る。第一彼等の態度からが不分明である。ある章には批評的鑑賞の態度で來るかと思ふと次の章へ行くと純然たる鑑賞的な事を述べる。此章は純批評的であると思ふと其次は又批評的鑑賞に移る。詰り著者が讀者に切れ〳〵の座談をして居ると思ふより外に仕方がない。又ある人は作品からして其人物を描き出さなければ行かぬと云ふかと思ふと、他の一人は作品から時代を推斷しなければならんと云ふ。而して是は何れがよいのやら誰も說明してくれ手がない。又は兩方ともよいのか兩方とも無理なのか說いて聞かせる者がない。又兩方共よいとすれば其他にも文學を見る方法があるかどうだか之を說明してくれる者もない。或本を讀むと其氣になり他の本を讀むと又其氣になり、此二つの本を繫ぎ合はせて雙方にどの位な關係的意味（レラチーヴ・イムポータンス）があつて全體（ホール・ヴィールド）としてはどの位のものか一向漠然として分らない。

既に今までの學者の著書が斯の如くであれば、彼等は漫然として文學を評し去るか、又は其頭腦が混雜して居るので明瞭な取扱が出來なかつたのに歸着するだらう。專門の大學者が既にかゝる體裁であるとすれば、余の如き淺學な者が論ずる事の明瞭を缺き、獨創を缺き、方法を缺くのは當然の事だ。と自慢する譯ではないが確かに云ひたくなる位である。從つて是からの講義が諸君に滿足を與ふる事が出來ぬのは無論の事で、余自身にも滿足を與へぬと云ふ事を斷言して置かねばならぬ。夫も五年十年と云ふ日子があれば比較的自己に滿足を與へ得る樣な方法で取扱つて見る事も出來るかも知れんが、兎に角夏休が濟んで直ぐ始めると云ふ早急な場合に碌な事が書ける者ではない。然らば余が是から十八世紀文學を論ずるに當つて取るべき態度は如何と云ふ問題になるが、既に此問題に對して明らかなる返事の出來得た者は古來の批評家歷史家中にあんまりないだらうと思ふからして、余の態度も頗る曖昧である。矢張り今迄の人の樣に或時は單なる鑑賞的となり、或時は批評的鑑賞となり、又出來得るならば時としては純然たる批評的態度になるかも知れぬ。然も其變化が一定の主義があつて時と場合に應じて自由に變ずるなら結構であるが、定見がないのと材料がないのとで已むを得ず變化する樣になる。是も甚だ心細い譯であるが今迄の歷史家も矢張り同樣な事情から變化して居るのだからしてどうか御容赦に預かりたい。

夫から以上述べた事に關聯して今一つ斷つて置きたい事がある。是は外國の文學史を論ずるに當つて外の人は未だ斷つた事がないだらうと思ふ。余は十八世紀文學を論ずるに當つて批評及び其方法に於て獨創を要求する樣な研究が出來ないと前に述べた。獨創的な意見がなければ請賣の意見を述べなければならぬ。請賣と云ふ事を前申した事に當て篏めて考へると、鑑賞的な態度に於て請賣になる事も出來る。批評的鑑賞の態度に於て請賣になる事も出來る。又批評的の態度に於ても請賣になり得る。外の者で請賣と云ふのは、只人の云ふ事を自らも云ふに止まるが、批評的鑑賞の態度に於て請賣と云ふとそこに矛盾が起る。何故矛盾になるかと云ふと、前申した通り此態度にあつては好惡が根本になつて、夫から出立して科學的手續をやつて、夫で此根本的好惡の說明をする。換言すれば己の標準なる趣味嗜好の證據とする。而して此出立點になる趣味とか

嗜好とか云ふ者は自己にある、しかも現在の自己にある。是は前以て御話しした通りである。夫だから今余が十八世紀文學を講ずるに當つて苟も此態度を取ると假定すると、此假定と同時に余は十八世紀文學を評するに余が現在の好惡を標準とすると云ふ事を意味して居る。既に余に一家獨特の好惡の標準があつて十八世紀の文學、即ちジョンソンでも、ポープでも、或はフィールヂングでも、スターンでも凡ての作品を此標準に關聯して批評するとなれば、是は余の批評であつて決して他人の批評ではない。余一家の批評である以上は請賣ではない譯である。又請賣であると云ふ以上は余の好惡は標準でなくして却て他の批評家例へばドブソンとかスチーヴンとか云ふ人が彼等自身の現在の趣味で以て十八世紀文學を評し去つたのを諸君に御紹介する事となる。かうすると請賣にはなるが批評的鑑賞の態度とは云へないのである。批評的鑑賞かも知れんが自己の態度ではない。他人の態度を蹈襲するに止まる譯である。此場合に於て此矛盾を避け得るのは只一つの場合がある。即ち英國の批評家の批評的鑑賞の態度と余の態度が偶然暗合して同じ樣な批評をなす事である。是は事實上は請賣に違ひない。即ちかゝる批評の本家は英國人である。だから其後起つて評論の筆を執る者が假令自家の見識で考へ出した事にせよ、其見識が既に他人の口から世に發表せられて居る以上は其人は世間に對して獨創の功を要求する譯に行かんのである。世の中から見れば矢張り請賣的批評である。同時に自分一個から云へば決して蹈襲ではない、人眞似ではない、矢張り純然たる己の批評的鑑賞の態度から出た批評である。此場合に於ては余の批評は請賣であつて又同時に獨創のものである。

偖此暗合があり得るとすれば是に二樣の區別を立てねばならぬ。第一は偶然の暗合。例で云ふと甲乙二人の男があつて其二人が蕎麥を食つて二人共腹が痛くなつたと云ふ樣な暗合で毫も相應な根據がないのである。既に相應な根據のない暗合であるから、其場合は極めて稀でなければならん。第二は必然的の暗合である。例へば自分の子が死ねば甲も悲しむと同時に乙も泣くと云ふ樣な場合で、文學上にあつても一作品に對して歐洲人も東洋人も同一に感ずると云ふ事があるだらう。其感じが自然に一致せねばならぬ譯があつて一致する以上は、暗合にもせよ是は必然的な暗合であつて、前の暗合とは大に趣を異にして居る。

然しながら此必然的暗合が成立し得ると云ふ事を認識する以上は趣味の普遍性と云ふ事を假定せねばならぬ。趣味の普遍と云ふ假定がなければ必然の暗合と云ふ事實があり得ると云ふは認識出來ぬ譯である。それでは其趣味の普遍と云ふ事は趣味の全部に渉つて下し得る提案であるか、又は其或部分に向つて下し得る提案であるか、又は全部にも局部にも下し得べからざる誤謬であるかと云ふ事を考へねば此提案の價値を判ずる譯には行かぬ。實は去年の講義に於て此普遍性に關して余の考へた事を話す積りであつたが、時間が無くて、そこ迄講ずる暇がなかつたのである。今此機會を利用して充分な御話しをすると便利であるが、此講義は文學論でないからして、此問題を詳細に論ずる餘地はないものとして、只一言に自分の思ふ事丈を述べて置く。但し甚だ通俗

の者で聞いて頂く程の者ではないが、結論丈が必要なのだから、其積りで御聽きを願ひたい。

趣味の全部に渉つて普遍性があると云ふのは愚昧な人の考へである。少しく事實に徴して見れば直ぐ分る事である。早い話が都會の生活に興味を持つて居る人も田園の生活を面白がる人もある。夫で都會を好かねばならぬと云ふ理窟もなければ田舍でなくてならぬと云ふ法則もない。雅だとか俗だとか高尚だとか下品だとか云ふのは勝手次第に好き〳〵から下した名である。よし都會と田舍の間に雅俗高下の區別があるとしても事實上人間が雅な者高い者を好むと云ふ點に於て一般に一致して居らぬと云ふは慥かである。俗な者も一種の趣味で卑しいものも一種の趣味であつて、實際其卑俗な者をすき好んで居る人がある以上は趣味の普遍性と云ふ提案は全部に渉つて成立しないのである。夫では人々の趣味は人々の趣味で二人以上の趣味は何れの部分に於ても一致せぬかと云ふと、是も事實上容易に誤謬である。前と同じく卑近な例ではあるが、例へば鳥の囀る聲を聞けば大抵の人は一種の趣味を感ずる。鳥の聲で動かぬ人でも、親が子を愛するのを見ては事實左もあるべき事と感じ、又夫婦仲の睦じいのを見ては何となく快き感じを起す。是等は古今東西とも同じ事の樣に思はれる。よし此等が時勢の變化に從つて、吾人の心を動かす强弱の度に相違を生じても、又は是等に對する趣味が全然普遍的でないとしても、人間の趣味はどこかに普遍的な所がなくてはならぬ譯である。第一人間と云ふ點に於て古今東西皆一致して居るではないか。男女が一所になると云ふ點に於て皆一致して居るではないか。女が子を

産むと云ふ點に於て一致して居るではないか。此位一致があれば、その趣味も亦全部の一致は望めぬにせよ、一部に於てはどこか一致して居ると豫想しても、あながち臆斷とは云はれまい。一部に於て普遍的に相違ない以上は、其普遍的な點に於て、吾人の批評的鑑賞の態度はある作品の上に同一の好惡的批判を下すであらう。卽ち此點に於て必然的暗合は起らねばならぬ譯である。

もう一つ必然的暗合を引き起すべき別種の趣味がある。是は外國文學を研究する際に當つて普通の場合よりも一層重大な任務を帶びて來る大切な趣味である。此趣味が普遍的である爲に、吾人は外國語を以て書いた書物に對しても比較的獨立した判斷を下して、相當の信念を以て、必然の暗合を却て彼等外人に對つて要求する事が出來るのである。此普遍性の趣味とは外でもない。卽ち文學書中に使用せられたる材料の繼續消長から出る趣味を云ふのである。前云つた趣味は材料其物に對して申したのであるが、今度のは材料其物は偖置いて、材料と材料の關係案排の具合から出てくる。畫を例にして御話しをして見ると、ドラクロアが *Dante et Virgile* を描いたとする。するとダンテとヴージルが船の中に立つてゐて、二人の姿勢やら容子やらがよく纏まつて見える。夫から船の外の波だか餘だか分らない中にゐる亡者幽靈抔が大勢かたまつて、中心になつた二人の周圍を取卷いた有樣がよく調つて見える。それで一目見ると、すぐに出來上がつた品物だ、是より以外に求めるものはない、是で澤山だと云ふ滿足な感じが起るとすれば、此畫は材料の案排具合からして出て來る吾人の趣味を飽かしめたのである。さうして此趣味は東西の別なく

通じる普遍的なものである。何故普遍的かと云へば少し具眼の人から注意されゝば、すぐ啓發を受けた樣な心持になるからである。もつと八釜しく反對を試みる人があるならば、其人に對して君は中心のない、もしくは散漫にして收束しがたき、或は支離滅裂なる藝術的作品を喜ぶかと聞いて見れば分る。もう一層進んで、餘計な事を無暗に書いたり、必要な事を矢鱈に書き殘した作品を見て、滿足な感じを起すかと質問して見れば分る。此問に對して肯定する樣なものは一人もない筈である。但し何處が散漫で、何處が冗漫で、何處が物足りないかは、人々に依つて必ずしも一致するとは限るまい。が相手が相當の修養のある人である以上は、趣味の高いものが一度說明の勞を執りさへすれば、多くの場合に於て、中心から之を屈服せしむる事が出來るから、まづ例外はあるにしても、之を普遍的と名づける充分の根據はあると見て差支なからう。所が今云つたドラクロアの畫中の幽靈のうちに、一見不愉快極まる日本の累以上のものが一人居る。仰向けになつて船の下に浮いてゐる。もし吾人が此幽靈を見て、實に厭だ。よせば可いのに、何故あんなものを描いたか、描かんでも濟みさうなものだのにと云ふ感じを起したとすれば、是は吾人が材料其物に對する趣味から出たものである。（此種の趣味は材料の美醜に對し、善惡に對し、又其眞僞と壯劣に對して起るのは無論であるが、一々の例は面倒だから省く。）

此二種の趣味を文學的作物に應用して少し御話しをすると、意味が一層明瞭になつて來るだらう。例へば今アレキサンダー・デユーマの *The Black Tulip* を取つて見る。もし私が、この作は駄目だ、構造が丸で糊細工の樣に旨く出來過ぎて居る、巧妙かも知れないが、非常に人工的で不自然であると評したとすれば、此斷案の基づく私の趣味は、作者の材料に對して起したのではない、材料の順序排列に對して起したものである。夫からもし此作物を評して、斷面的性格の描寫が淺薄だ、作家の都合の好い樣に動いてゐると評したなれば、此評の出立地にある私の不滿足な感じは、篇中の人物卽ち材料に對する趣味から來た事になる。又モーパサンの *Une Vie* を評して、中心點がない、夫婦の關係が主眼なのか、親子の情合が主眼なのか、兩者が箇々別々に獨立して有機的に一篇の作物を構成してゐないといふ非難をしたら、此非難は矢張り材料其物に對する趣味から生じたものではなくつて、材料の竝べ案排に對する私の趣味から生じたものである。

其他例を擧げれば澤山擧げられるだらうが、大抵了解になつた事と思ふからこれで廢める。ただ此材料の相互的關係から生ずる趣味は比較的土地人情風俗の束縛を受けぬ丈夫丈普遍的なものであつて、人によつて高下の差別はあるが種類の差別は殆どなからうと思はれるから、如何に外國に生れた日本人でも適當に發達した趣味さへ持つてゐれば、夫が唯一の趣味なので、之を標準にして外國人にも之を呑み込まして成程と合點させる事の出來るものである。だから必然の暗合は愚か、全く反對の場合に於ても猶且我を正しとし、彼を誤れりと斷じ得る大切な趣味である。

偖かゝる譯で文學的作品に對しては或點に於て必然的暗合が起るに相違ないが、趣味の普遍性が趣味の全部に涉つて居らぬ以上は——又其普遍的な部分が餘り廣くない以上は——又其普遍的

な點でも時代國民に於て强弱の程度が異なる以上は――此種の暗合がそんなに無暗に起る者でない。又そんなに深く起るとも限らない。（吾人は西洋の詩に於て特に此感がある。小說抔は左程とも思はない。）其上に今一つ此から生ずる暗合を障害する者がある。夫はかう云ふ事である。文學の或者は單純な要素から成立して居るに相違ない。しかも其單純な要素から妙詩妙文が出來ぬとも限らぬ。然しながら單純なる者には變化が乏しい。變化が乏しいと人が厭きる。のみならず文學の材料となる社會の狀態及び人間の頭腦は日に增し複雜になりつゝある。從つて此等の原因から末世の文學と云ふ者は複雜になると同時に又根本的な普遍的な趣味を離れて變化を求める樣になる。複雜になると云ふ例を擧げて云ふと、例へばこんな事である。――男女相愛すると云ふ現象は普遍的に人の興味を惹くものである。然しながら只男女相愛すると云ふ外に色々な條件が加はつて來る。例へば一人の男が夫のある女を愛するとなると少々複雜になる。複雜になると同時に普遍性を失ふかも知れぬ。甲の國民には夫のある女を愛すると云ふ事が興味のある事實かも知れんが、乙の國民には有夫と云ふ事實が氣に入らないかも知れぬ。丙の國民には陳腐の極で遂に文學の材料とするに堪へぬかも知れぬ。又男女相愛して居る時に戰爭が起る、男は戰爭を捨てて女と一所に居るとする。甲の時代には戰爭を捨てると云ふ事が氣に入るかも知れぬ。又乙の時代では夫が氣に食はぬかも知れぬ。それが又丙の時代では大に珍らしいかも知れぬ。丁の時代では尋常の事かも知れぬ。それから、一方の變化を求める爲に普遍性から遠ざかる例を云へば、

ある人が電燈の光を見て非常に感じて、此光の中に戀もある生命もある、凡ての情感、凡ての美術はこゝにある抔と欣喜雀躍して飛び廻る樣な有樣を書いたとすれば、其意味は一般の人に通じ樣がないに極まつてゐる。

以上の諸原因からして、趣味の普遍性によつて必然の暗合をなす場合は存外少ないのである。（材料の相互的關係から出るものを別とすれば。）殊に外國の文學に就いての批判となると是等の上に今一つの障害がある。卽ち言葉である。言葉と云ふ意味は日本語と英語とは構造が違ふとか文法が違ふとかいふ意味ではない。言葉には意味の微妙（delicate shade of meaning）がある。又一種の調子の附着したものである。只此丈では說明にならんからもつと分り易い事を例に引いて御話しをする。御承知の通り日本に俳句と云ふ一種の文學があつて十七字で詩形をなして居る。あの俳句で考へて見ると直ぐ分る。同じ題で同じ材料で同じ配合で丸で同じ趣向で出來た二つの句をとつて見ると、一は大に愉快な感が起る場合と一はそんなに愉快な感が起らない場合、否寧ろ忌味を感ずる場合がある。よく〳〵調べて見ると矢張りさう感ずるに相應な根據を發見する事が出來る。先づ是は俳句に於ける一の事實であるとして話を進めるが、此似寄りの句を髮結床の親方とか酒屋の主人とか云ふ普通の人が見ると其人々は其差異を全然感じて居らん、雙方共同一の句だ、一樣の價値があると思つて居る。俳句は無論日本語である。日本語で書いた而も殆ど同樣の事を書いたものに對して日本人――朝夕日本語を使ひ日本文を讀んで居る――日本人が見て

斯程差異のある感じを起す。夫は何故かと云ふと一は俳句と云ふものを見て俳句の言語を見慣れて居るから俳句的言語に就いて一種の微細な知覺を持つて居る。從つて俳句的言語があらはし得る微妙な濃淡（シエード）とか調子とか云ふ者を甄別する事が出來るのに反して、一方は是等の方に感覺が遲鈍なのである。「明月や」と云つても「明月よ」と云つても大抵同じ事だと思つて居る。今一つの例を擧げると「君は美しい」と云つた人があつた所で前後の場合やら其調子でもつて眞面目にも取れるし、又冷かしにもとれるし、單なる御世辭にも取れるし、又單なる冗談ともなる。忌味のあるやうにも云へるし、又淡泊にも云へる譯である。猶一層よい例は役者なら役者がハムレットなどを演ずる際に全體の解釋（インタープレテーション）は兎に角、一部々々の所を、こゝはハムレットの憂憤を示す爲の句として演じて見ようと思へば憂憤を示すことが出來る。又彼の諧謔的態度を示すためにやつて除けようとすれば夫でも出來る。而も彼は本文の文句を一字も易へないのである。是丈の事實を推し擴げて吾人が外國文學に對する時の場合を思ふとよく分る。日本人は英語に就いて其微妙なる濃淡（シエード）とか調子とか云ふ者を解する丈に練習が積んで居らん。從つて先方の人が忌味な言ひ廻し方だと思ふ者も忌味には聞こえない事もあらう。縹緲たる神韻のある言語も平凡だと思つて讀み過ごして仕舞ふ事もあるだらう。凡て此等の點になると日本人の感覺は餘程遲鈍であるに極まつて居る。英國の學者程鋭敏でないに相違ない。是から一つの弊が起る。何しろ英國で出來たものを英國人が評するとなると本家本元の製造品を本家本元で批評するのだから確かに相違ないと云ふ感が日本人の胸の中にある。日本の文學を評するなら兎も角も英國の文學を評するのは英國人の云ふ方が間違ひはないと云ふ考になる。恰も素人が呉服の價値を解せぬ爲呉服店の番頭の云ふことを一も二もなく信ずるが如き觀がある。

これは疑ひもなく言語の相違と云ふ點から來る。言語が既に異樣である。何だか思ひ切つた事をする氣にならん。何となく薄氣味が惡い。假令氣味が惡くならん迄が、手の附けやうがない氣がする。何だか紗を隔てて人を看るが如く判然しない。判然としないからして自己の感じを標準として批評するのが劒呑のやうに思はれる。感じがあればまだしもであるが頭（てん）で感じが乘つて來ない。從つて自分より判然と分る人、明確に見得る人が必ず判然に感じ得る人、明確に感じ得る人であるが、大抵の人は此誤つた結論を暗々裏に下して仕舞ふ。

此言語の相違から來る不便と共に今一つの誤つた結論が出て來る。夫は外でもない。詰り外國文學を評する標準は彼にあつて我にない。だから外國人の說に從はねばならぬ。外國人の說に從ふとなると自分が其說を尤もと思はざる事に就いてのみならず、無理と思ふ事迄も先方の說に從ふ樣になる。今迄は自己は此作品に對してから云ふ風に感じて居つた、然るに今某の批評を聞くとかく〳〵で自分の感じとは違つて自分には無理と思はるゝけれども、兎も角も本家本元の評家の云ふ事だから自分のよりも正しい感じであるに相違ない。して見れば自分が今迄抱いて居た感

じは誤つた下劣な感じである。誤つた感じである以上は改めねばならぬ。かう云ふ氣になる。すると人間は妙な者で何時の間にやら今迄の感じがなくなつて、自分の正しいと思うた感じに移つて仕舞ふ。從つて外國文學を研究して其批評をするとなると自分の感じはなくなつて外國の批評家の感じのみになる。中には自分の感じが移りもせぬのに、しか感じた如く裝ふ者さへ出來る。是は吾人が外國文學を學んで陷り易い所だと思ふ。しかも餘り無理のない所だと思ふ。然しながらよく考へて見ると是は趣味の普遍と云ふ提案を全部に應用したものではあるまいか。若し趣味のあらゆる部分に向つて普遍なる事が確言する事が出來るものなら斯樣に考へても差支はないのであるが、前に申した通り普遍は單に趣味の一部分に就いて言ひ得る事であつて、若し夫以外に此提案の有效を主張する時は根本的の誤謬を生ずるのみである。すると方今の外國文學を研究して居る者は言語の相違と云ふ障害物に迷はされて冥々の裏に趣味は悉く普遍であると云ふ無理な事を認識して居ると云うても差支ない。

然らば吾人が批評的鑑賞の態度を以て外國文學に向ふ時は、如何にしたらよからう。余はこれに二法あると思ふ。一は言語の障害と云ふ事に頓着せず、明瞭も不明瞭も容赦なく、西洋人の意見に合はうが合ふまいが顧慮する所なく、何でも自分がある作品に對して感じた通りを遠慮なく分析してかゝるのである。是は頗る大膽にして臆面のない遣り口であると同時に、自然にして正直な、詐りのない批評が出來る。而して此批評が時とすると外國人の批評と正反對になることが

ある。然し西洋人と反對になると云ふ事が、强ちに自己の淺薄と云ふ事の證明にはならない。之を淺薄と考ふるのは今の世の外國文學を研究する者の一般の弊であつて、吾人は深く省て或程度迄此弊を矯正しなくてはならん。アストンが「日本文學史」を書いてもチエンバーレンが日本の文章を評しても矢張り英人の見地からするのであつて之が正當なる批評である。言語こそ違へ、内容は文學である。文學と云ふ點に於て相違がない以上は、趣味を以て判斷すべき以上は、自己の趣味の標準を捨てて人の說に服從すると云ふ法はない。服從と同時に自己は趣味がなくなるのである。趣味がなくなる以上は外國文學は無論のこと、自國の文學さへ批評する資格がなくなつた者と云はねばならぬ。趣味と云ふ者は一部分は普遍であるにもせよ、全體から云ふと地方的（ローカル）なものである。（必ずしも何故と問ふ必要はない、事實上さうであるから否定する譯には行かん。）地方的であると云ふ意味は、其社會に固有なる歷史、社會的傳說、特別なる制度、風俗に關して出來上がつた者であると云ふ事は慥かである。既に是等の原因によつて趣味を生じ、而して此等の原因は東西古今によつて異なる以上は、其異なる原因によつて生產せられたる趣味も自然異ならねばならぬ。無論世界の交通が頻繁になつて人間相互の氣脈が漸々よく通ずるに從つて此趣味は統一せらるゝ傾きがある、普遍的になる傾きがある。英佛獨等の歐洲中の各國は一般の趣味の上に於て既に此普遍力の作用を受けた者である事は疑ふべからざる事實である。日本も外國と交際してから此普遍力の作用を受けつゝある事は決して疑ふべからずだが決して其

作用の一時期すら濟んだとは云へぬ。少なくとも今は相互の間に大なる溝渠が劃されて居る。例へば西洋で接吻と云ふことは親類夫婦の間に面會告別の際には禮として行はるゝ法式であつて、西洋人の之に對する趣味も此法式から割り出されて居る。然るに日本では維新前迄は女が男と同衾する位の程度の者である。今でも男女が無暗に接吻する抔と云ふ事は少なくとも敎育ある社會で公にすべきものではないとして居る。所が日本の新體詩人は西洋の詩から接吻と云ふ字を發見して一般の人の趣味の異なる日本に此字を引き入れて來て平氣で使つて居る。然し此字に對する普通の人の趣味は新體詩人が用ひる樣な意味を有して居らん。從つて一種の忌味を感じる。嘘を吐いてゐるとしか思はれない。こんな微細な例でもよく分る。

偖其異つた趣味の國民の製作を一種の標準に照らして評するには吾人が今迄養成せられたる趣味を以てすべきは無論の話である。接吻を以て無邪氣なものと考へて居る外國人は我々の批評を聞いて、そんな國柄はあるかと驚くかも知れないが、其判斷は幼稚だとは斷言し得まい。從つて吾人は外國の文學を評するに吾人の標準を以てすると云ふ事に關しては充分の理由があつて、此理由は西洋人と雖も駁擊することが出來んのである。尤も此方法を濫用すると作品を熟讀玩味せずして、無暗に批評すると云ふ弊が出て來るかも知れぬ。然し現今の日本の狀態では此弊を冒しても或程度迄此方法を用ひる事が必要だと思ふ。余の如き者は自ら省てかゝる事をなす丈の能力があるか、ないか頗る疑はしいけれども、若し出來得べくんば、或場合には此方法を以て進みたいと思ふ。例へばポープ一派の詩の如きは當時あの位隆盛を極めたに關せず、現今の英人は共に同音に人工的である、自然に遠ざかつて居ると云はぬ者はない。即ち現今の英人はポープ流の詩について多くの趣味を有して居らんと云ふ事が分る。然しながら現今の英人がかく云へばとて現今の日本人にもポープの詩は然か見えねばならぬと云ふ理由は發見出來ぬのである。即ち之は前に述べた趣味の普遍と云ふ提案を深き考へもなくポープ一派の詩の全部に應用して仕舞つたからこんな考になつたのである。ポープの詩が十八世紀にあの勢力を得たのは明らかに十八世紀の趣味に合して居たと云ふ事が云はれる。換言すればポープの詩は十九世紀では兎に角、十八世紀では自然であつたのである。偖ポープは十八世紀の嗜好に投じ、十九世紀の好尙に背いたと云ふのは歷史的事實に相違ないが、吾等日本人がポープを見る時は十八世紀の人の樣な感が起るか、又は十九世紀の人の樣な感が起るか、それは未定の問題である。又は十八世紀十九世紀の人以外日本人に獨特な感じが起るかも知れない。是も未定の問題である。孰れにしても讀んで感じて、現今吾人が有する趣味で好惡して見なくては何とも云へぬのである。又十八世紀の末に『オシアン』が出た。之はマクファーソンの胡魔化し物だと云ふが、兎に角之が出た時は非常な評判でゲーテも愛讀し、ナポレオンも愛讀した。然るに現在の英人は『オシアン』を單に歷史上の一現象として見る以外に何等の興味をも有して居らん。興味を有して居らんのみならず、到底讀み切れない抔と特筆する評家さへある。して見ると『オシアン』は出版當時の人氣には合ひ、現今の人氣に

は到底合はぬのであるが、日本人が『オシアン』を評する時に十八世紀の人の趣味になるか、又は現今の英人の趣味で讀むか、是も未定の問題である。當時の人が嘖々賞讃したからと云うて雷同する必要もないし、又現今の人が唾棄して顧ぬからと云うて其眞似をするにも當たらんのである。吾々は吾々自身の感じで以て（若し吾々自身の感じさへ起るなら）之を評して然るべきである。前から云ふ如く吾人は言語の障害と一種の誤解から、こんな風に自己に誠實に外國文學を評して居らん。甚だ臆病なのか又は不熱心である。故に余は諸君が外國文學を研究する際に成るべく自己に誠實ならんことを希望すると同時に余も出來得る限りは眞面目に出でたいと思ふ。然し之は隨分手間のかゝる事である。作品を精讀して而る後其感を充分に分析してかゝらねばならぬ。從つて一二年間に十八世紀文學を驅け拔けようとしては到底駄目である。そろ〳〵遣らなければならない。此點は豫め斷つて置く。

批評的鑑賞の態度に就いて今一つの方法は西洋人が其自國の作品に對しての感じ及び分析を諸書からかり集めて、之を諸君の前に陳列して參考に供するのである。之は自己の感ではなく、他人の感である。他人が或文學上の作品に對する感は自己の感ではないが、自己の感を養成し若しくは比較する上に於て大なる參考となる。のみならず只知ると云ふ點からして頗る興味のある事であると思はれる。卽ち或社會の狀態があつて其狀態からして或作品が出來上がつた。すると其社會に生存して居る人間がどう云ふ風に之を迎へたか、又どう云ふ風に感じてどう云ふ風に分析したか。偖其所感と分析とは吾人が同作品に對する所感と分析とどの位異なるか、異なる以上は吾人の趣味と當時の人の趣味とは或點で矛盾して居つた、其矛盾は如何なる社會的狀況から出て來たか。凡て是等を明瞭にするのは自己の見聞を弘めると云ふ點に於て大に吾人に利益を與へる者である。同時に右の作品に對する批評が五十年目にはかくの如く變化したと云ふ事を示す爲に、五十年後の批評家の說を紹介すると、五十年前の批評と五十年後の一國に於ける趣味の差が分る。そして其差は如何にして起つたかと云ふ事が分れば又之を紹介する。

斯うして行くと趣味の推移と云ふ者は、前代の趣味が自然に進化するものであつて、現在の趣味を生ずるに必要な條件は前代の趣味であると云ふ事實がよく分る。從つて前代の趣味が一樣でなければ次代の趣味も一樣でないかも知れないと云ふ事になる。して見れば日本は日本で昔から一個の趣味を有して、それが今日の趣味に自然に進化して來たものだから必ずしも我邦現代の趣味が英國現代の趣味と一致する譯に行かぬ。又一致せぬからと云つて恥づべきものでない、抔と云ふ事がチラ〳〵と分別が出來るやうになるかも知れぬ。すると此方法は自己と云ふ感じがない請賣の批評的鑑賞を紹介するに止まる樣な平凡な者であるけれども、甘くやりさへすれば實際は甚だ興味のある遣り口かも知れぬ。予の淺薄なる知識の許す限り、又時間の許す限りは、此方法も取らうと思ふ。元來人の說を聚めて紹介するのを平凡だとか才氣がないとか云ふが是は大なる誤解である。多くの書物を讀んで之をよく分る樣に紹介するのは一種の技能である。之を平凡だ

と云ふなら記述的科學の樣な單に自然の現象を分類して居るものは皆同樣に平凡でなければならぬ。文學上の講義も矢張り同じ事である。平凡と思ふ講義は却て價値のある場合がある。但し余の樣な遣り口では到底價値のある講義は出來にくいから、其邊も豫め斷つて置く。

第二編　十八世紀の狀況一般

嘗て歴史小説と云ふ事に就いて人に下の樣な話しをした事がある。若し小説を書いて實際社會を見る樣な心持を讀者に起させようとするならば、小説中の出來事が自然であり又人物の性格が自然に發展しなくてはならぬのは無論の事であるが、同時に背景を描く事が必要である。背景とは篇中の人物が出て働く舞臺卽ち之を圍繞する四邊の光景である。小説は固より人間相互の葛藤なり、情合なり、有形無形の出來事を寫した者に相違ない。然しながら此出來事は雲の中に生ずる者でもない、空漠たる虛無の世界に出現する者でもない。矢張り此大地の上、蒼天の下、人間社會中に起る現象の一部である。して見れば歴史小説抔を書いて、全篇が活動する爲には、卽ち如何にも其當時らしく思はれる爲には是非共社會其物を寫して、其活躍して居る社會の中からして肝心の用事になる小説の筋が湧き出す樣に書かなければならん。社會の中から入用の事件丈引き出して外の者は棄てて了つて只其筋丈を紹介するのは、其筋を了解すると云ふ點に於ては甚だ

便利に相違ないが、社會其物の一部の反射としては見られぬので、從つて其社會の光景が眼前に浮かぶと云ふ點から云へば、換言すれば其社會を感ずると云ふ點から云へば頗る拙な遣り方である。魚から骨丈切り取つた樣な者で、動物學者が魚の骨格を知るには骨を肉から切り取つて見る方が分り易いかも知れぬが、生きた魚を見せようとするには骨丈陳列して見せるより肉附きのまま人に示す方がよいのである。

文學史を講ずるは無論此意味の小說を作るのとは違ふ。然しながら或方面から解釋を下すと下の樣な事が云はれると思ふ。文學は社會的現象の一つであつて十八世紀の社會は文學丈で成立した者ではない。美術なり、哲學なり、社會の風俗なり、一般に云ふ大いなる人間の歷史中の一部分として文學が出現したのであるからして、今文學史を講ずるに當つて此錯雜なる現象中から文學丈を引き拔いて見せるのは文學の歷史の筋道を知るには便宜であるが、かうすると文學と他の社會的要素と關聯して、活動して世の中に出た景色が目に浮かんで來ない。云はゞ單に魚の骨丈を見て居ると一般で何だか興味が無い。是は單に文學史のみではなく、哲學の歷史でも科學の歷史でも同樣であるが、文學に至ると、殊に此點に注意せねばならん。と云ふのは文學は當時の一般の氣風が反射される者で當時の趣味の結晶した者であるから一般の社會とは密接の關係があつて、外の學問とは其關係の度が大に深い。從つて社會其物の中に文學なる一種の現象が自然と湧いて來た樣に講じて行けば骨格は分らなくなるけれども其當時の光景は明瞭になる。其代りゴチヤゴチヤで條理は立たなくなる。

すると一の板挾みに遭遇する。文學を社會から切り離して全く獨立した現象として論ずるか、又は社會全體の有樣を敍して其全體が動いて居る中に自然に文學が織り込まれて居る樣にするか。第一の樣にするのは筋道を見るには都合がよい、分類をやるには都合がよい、條理整然として混雜を來さぬと云ふ點に於て都合がよい。然し冷やかである、暖かみがない、知性を滿足させるかも知れぬが、繪畫的光景を現出せしむる譯には參らぬ。第二の方法に從ふと活きた世の中が分る、其活きた世の中から活きた文學が自然と活現して來ると同時に分類も立たぬ、甚だ込み入つて無茶苦茶である。條理が立たぬ、筋道が明らかに分らぬ。尤も兩者共甘くやればやつた丈の功能はある。（余の樣な者がやればどつちにしても旨くは出來んから云はんでも同じ事であるが、余の考だから一應御話しをして置く。）不思議なことに世の歷史家とか何とか云ふ人の內で科學的に傾いた人は此後の方法の價値を認めて居らぬ樣に思はれる。例へば歷史を書いても當時の宮廷の貴婦人が皇后の前でどんな失策をして赤面したとか何とか云ふ事は天下の大勢に關係がないからして書かんでもよい、否書く必要はないと考へて居るらしい。スペンサーが『敎育論』を書いて歷史敎育などで徒らに年代や事件を記憶させる事を非難した事がある樣に思ふ。年代はいざ知らず、事件に至つては殊にスペンサーなどが瑣事として棄てて顧ざる樣な事件が却て見方によると抽象的な原因とか結果とか云ふ者よりも大切かも知れない。そこでスペンサーの樣な何でも科學

的に世界を見て抽象的に知識を概括して行かうと計り思案する人は第一の方法より外に方法がない様に考へて居るかも知れない。然しながら天然の現象でも歴史的の事實でも抽象的な原理を掴み出す丈が何も吾人の要求を滿足させるものではない。若し是丈で人間が滿足し得る者ならば、あらゆる小説も、あらゆる戯曲も世の中に出現して來る譯が無い。そこで歴史は抽象的な原理を知る材料として科學的に觀る必要もあるだらうが、同時に歴史を一つの小説、一つの戯曲として耳目的(センシュアス)なる、興味ある、吾人の悲喜憂樂に訴ふる者として見る必要も無論あるに違ひない。前代の事を一つの繪畫として見、一つの活動せる社會として見るのは疑ひもなく大なる知識を吾人に與ふるのである。吾人の同情を廣くする所以である。從つて吾人を最も人間らしくする所以である。吾人の想像力を鼓舞して冷やかなる前世紀の死灰を再び燃やす所以である。ボズウエルは傳記者中に一番成功した人だといふ評判である。或人は之を評して彼は最も愚なる人で最も立派なる傳記者であると評して居る。ジョンソンの傳をあれだけに骨を折つて作り上げる價値があるかないかは別問題であるが、傳記としては慥かに見識のある書き方に相違ない。ジョンソンが橙の皮をどうしたとか、往來を歩くときにポストに必ず手を觸れるとかいふ事はスペンサー流にいへば何等の價値もない事である。然しながら活きたジョンソンは此處から生じて來る。活動して居るジョンソンは此手段で始めて吾人に傳へられる。若し傳記の目的が其人物の起臥し、寢食し、喜樂し、憂愁する人間らしさ行爲言動を吾人に示してはならぬと云へば格別、然らざる以上はボズウエルは傳記者として卓絶せる見識を有せる人である。若し彼がジョンソンの生涯を敍するに當つて、此方法によらず、ジョンソンの著書、ジョンソンの人生觀、ジョンソンの時代と云ふ樣に今の人のやる樣な手段を用ひたらば、成程吾人の頭に訴へて條理は井然として來るだらう。知性(インテレクト)の滿足は得らるゝだらう。然し活きたジョンソンの影もなくなつて了ふ。ジョンソンは骨と皮と、肉と眼玉と髮と別々に吾人の前に陳列せらるゝに過ぎぬ。歴史は一國の傳記である。一時代の傳記である。若しボズウエルが最善の傳記者である以上はボズウエル流に歴史を書くのも慥かに最善の歴史家でなくてはならん。少なくとも最善なるものの一つと云はねばならん。要は斯樣な文學史が出來るかと云ふ事になる。余には到底出來ん。

偖前に述べた二つの方法の兩方共利があつて兩方共弊がある。そこで余は殊に此編を設けて十八世紀の狀況一般と題して、此編のうちで文學以外の樣、殊に社會の風俗を敍述して諸君に十八世紀はこんな者だと云ふ圖繪を與へて置いて、然る後本編に入つて文學を述べようと思ふ。すると十八世紀の社會も一通り分り、又同世紀の文學も一通り分る。從つて此兩者の關係も分り、かゝる社會にかゝる文學が起つたと云ふ事が合點出來ると同時に、此編丈を纏めて置けば錯雜混亂の弊を幾分か防ぐ事が出來るだらうと考へたのである。それだから余のやり方は成るべく前に述べた二つの方法を同時にやりたいと云ふ願ひから割り出したのである。それで是が旨く行けば少しは面白いだらうが、前にも云ふ通り余の力量では到底諸君に滿足を與へる譯には行くまいと

思ふのみならず、自分にも甚だ感心せぬのである。但前置丈は何時でも長い理窟張つた事を云ふ。是が余の癖かも知れない。

一　十八世紀に於ける英國の哲學

人間も朝夕飯を食ふ事や、衣服を着る事や、人を凌ぐ事や、女房を貰ふ事や、凡て人事上の事に齷齪して居る中は、甚だ心配の樣な、甚だ苦しい樣な、又甚だ煩はしい樣な心持のする者であるが、實際をいふと甚だ太平な者である。何故かといふと是等の心配は皆「如何にして生活するか」と云ふ事に歸着して了ふので、其如何にしてといふ事が自己の思ひ通りに行けば其他は至極呑氣である。例へば車夫の如く、大工の如く、其日の勞働をして賃銀を得る、夫で口體の慾を滿足せしめて寢て仕舞ふ。明日は明日で又働くのである。終始こんな事を繰り返して居るうちに死んで仕舞ふ。少し教育のある者は彼等の生活を見て憫然に思ふ。何故憫然であるかと云へば彼等は考へないからである。凡ての事をあるが儘の者として濟まして居るからである。何故考へぬのが憫然であるかと云ふと考へぬ者は生存競爭に敗北をする、自己に不利益であるからである。然し一歩進むと、其利益不利益（目前の）の域を通り過しても、矢張り惰性で考へなければならなくなる。從つて物を知ると云ふ事は利益問題を離れた時に於てすらも、其知ると云ふ點に於て愉快を感ずる。從つて知力的好奇心と云ふ者は普通の衣食問題、緊要問題を通り過してずん〳〵先へ進む。先へ進めば進む程普通の人の考とは違つて來る。其極は平常の人から見れば、あの男は何を苦しんであんな事を考へて居るかと思ふ、あんな事を考へたからとて飯が旨く食へる譯のものではなからうと云ふ風になる。所が考へる人は急に考へ出したのではない。五重の塔を積み上げる樣に始めは普通の人の立場から段々高く土臺を築き上げたので、初めこそ、ふとした動機からやりかけたかも知れぬが、やつて居るうちには夫が職業の樣になつてどうしても止められない、迂濶だらうが空論だらうが、顯の上が干上がらぬうちは、到底已められない。益根本的に立ち入つて考へる。益概括的に考へる。其極は世の中を區別して心と物として見たり、心計りにして見たり、或は耶蘇教の影響と此考が寄り合つて世界は神の示現であると云つて見たり、到底普通の人間としては解すべからざる樣な事を眞面目な顏をして說き立てる樣になる。是が哲學者である。卽ち哲學者と云ふ者は或時代に在つて其中の最も善く考へる人、物を概括する人、換言すれば知力と云ふ、人間の能力を最もよく利用した人である。五重塔を積むに數十人の大工と二三年の手間が入る如く、知力の發達もこゝ迄行くには骨が折れる、容易な事ではない。從つて普通の人から見ると呑氣の樣であるけれども、實際は甚だ心配性の男である。普通の人なら目前の事計り考へて食つて行きさへすれば夫で濟むのだけれども、此哲學者になると永遠の事や、普遍的の事や、並みの人の五倍、十倍、百倍程なことを考へる、然も考へずに居られぬのである。哲學者と云ふ

者はかくの如く普通の人の考へ以上の事を考へる者であるから其説く所云ふ所は普通の人には馬耳東風であつて又一廉の教育ある者にも不得要領な事が多いのである。現にヒューム（一七三九―一七四八年の間に哲學的の著書、卽ち『人性論』（*A Treatise of Human Nature*）とか『人間の悟性に關する哲學的論文』（*Philosophical Essays concerning Human Understanding*）等を著はした時に、俗人は無論讀み手がなかつた。教育ある人の中でも之を讀んだ人は頗る僅少である。其僅少な中で彼を理解した者は極めて少ない。レスリー・スチーヴンの説によると、The attempted answers are a sufficient proof that even the leaders of opinion were impenetrable to his logic. Men of the highest reputation completely failed to understand his importance. (*English Thought in the 18th Century.*) とあるのでも、其狀況はよく分る。解せられなかつた著者は無論心細い。解し得ない社會一般も亦同樣に心細い次第である。

扨要するに昔から考へた上へ後世の人が又考へる。其上に又考へるので、考へが無暗に普通の人の頭を乘り超えてこんな次第になるのである。偖斯樣に一般社會の上に超然たる思想が一般社會に對してどの位な影響があるだらう。普通の人に讀めもせず、又分りもせぬ者がどうして世の中に感化を與へるだらう。若し與へぬとするならば此哲學者の考へと云ふ者は只唐人の囈語として他の社會の現象とは切り離して置けばよい。今此場合に於ても其通り、十八世紀の文學を論ずるからと云うて十八世紀の哲學を論ずる必要は全くなくなる。（哲學を文學と見做せば格別だが。）それだから今十八世紀の哲學を一寸述べる前に哲學と社會とはどんな關係があるか、少し考へて見たい。

哲學者の説が如何に難澁艱險にせよ、如何に空漠曖昧にせよ、如何に普通一般の人の心に入り難く解し難きにせよ、狂人白痴の言語の如くにせよ。其説を生じた哲學者は砂漠の中に生れ出た譯の者でもない。太山の頂に湧いて出た者でもない。矢張り他の普通の人と同じく同形同狀の社會に生れたのである。其衣服は社會の人の着る衣服で、其食物は社會の人の食ふ食物である。若し學校があれば矢張り其社會の學校で教育さるゝのである。從つて其生長した社會の影響はどんな風變りの人でも免れる譯には行かぬ。若し其社會の影響を蒙らぬと云ふ以上は自分が吸つて居る空氣が自分の身體に影響がないと主張する樣な者である。すると哲學者の考への全部は兎に角、一部分は是非共其社會の考へが反映して雜り込んで來るに違ひない。偖其反映せられたる考を一層深く廣くするか、又は前代から世々の哲學者が集積したり、或は互に訂正したりして當代まで傳へて來た哲學的思想を社會一般の思想でモヂファイして出來上がつて居るに相違ない。尤も根本的に云ふと心とか物とか云ふ極めて普遍的な者になつて仕舞ふからして一寸現代の制度風俗等に交渉はない樣であるけれども、そこに達する迄の徑路及び方法等は矢張り一般社會の人の風になづむものである。例へば歐洲基督教徒の研究した哲學は必ず神（ゴッド）と云ふ字が出て來る。我々日本人が考へると何も神と云ふ事と哲學的思想とは關係のない者である。神は神、哲學は哲學でよか

らう様に考へられるが、彼等は基督教徒であつて、生れ落ちた時から死ぬ時迄基督教の御蔭を受けて居る。而して基督教の根據は神であつて此神から人間も天地も出來て居るのだからして、哲學者のやうに物を考へる人の自然の傾向は此神を今迄通り認識するか、又は今迄の神と云ふ觀念を變形して之を受納するか、若しくは全然此神なるものを打ち崩すか。どうにか神（ゴッド）の始末をつけねばならぬ。從つて歐洲の哲學者は神のことを云々せざるを得ない。我々日本人は違ふ。根本的にそんな影響を蒙つて居らんから神抔をどんなものだと考へる必要もない。西洋の哲學書にある神などの受賣をする必要はない。歐洲人が神の屬性（アットリビュート）などを理窟をつけて矢釜しく騷ぐのは矢張り歐洲に固有な風潮の支配を受けた因果であると思つて居ればよいのである。

兎も角も此事實を以て見ても如何に寐言の樣な哲學でも一代の影響は免れぬと云ふ事が分る。若し彼等の考へた抽象的な原理が實際的（プラクチカル）交渉（ベテリング）を有して出て來る時、卽ち政治とか道德論とかとなつて出て來る時は、必ず當代の德義及び政治に密接なる關係を有して來る事は疑ひもない。日本の德川時代の儒者は固より考理の上に於て西洋學者の樣に大膽でない。然し堯舜の世と云ふものは彼等の理想として居つた黃金時代である。而して堯は舜に位を傳へた。卽ち天下を他人に讓つた元祖である。此事實があつて此事實を執行した本人を神の如くに謳歌する儒者共ですら嘗て彼等の理論を擴げて之を吾朝に及ぼさうとした者はない。何故ないかと云へば彼等の哲學的の頭腦が眼前の事實に束縛せられて、日本は血統で天下を子々孫々に傳ふべき者であると信じ切つて居

つたからである。夫から忠と孝と貞とは彼等が口を酸くして說く敎であるが、親の義務、君の義務、夫の義務は嘗て說いた事がない。靜かに考へて見ると頗る馬鹿々々しい。理窟に訴へて少々考へて見れば此位の事は是非分らなければならん。然るにも關せず、彼等は或一種の狀態にある社會に生れた爲此見易きことをすら考へなかつたのである。彼等の生れた時代は君が絕大の權利を有して居つた時代である。親が無上の勢を振り廻した時代である。夫が妻を勝手に取扱つた時代であつて、然も子たり臣たり婦たる者は此偏頗な道德に馴れて自ら自己の不便不利益を感ぜざる迄に壓逼を甘んじた時代である。此事實を有する社會に生れ出でたる學者は此人事的關係を以て人間の自然と心得るのは無理もない事である。人事上の事は不滿か不平があつて始めて一變化をしても差支ないといふジアスチフイケーションを見出だす者である。德川時代の民は此不滿を感じなかつたから同時代の學者は此關係を變更しようと云ふ爲に新しき理論を唱導し得なかつたのである。理論は時として事實を變更する。然しながら理論は事實から出立する者である。忠、孝、貞の飽くまでに重んぜられたる世に此事實に反する理論の出る譯がなかつたのである。斯樣に論じて見ると、純粹の哲理さへ一代の風氣に感染するから、實際哲學に至ると勿論其影響を受けることが明らかである。從つて十八世紀の文學を論ずるに哲學を附記するのは大に興味のある事と思ふ。要は此哲學が實際文學上如何にあらはれて居るかといふ事を指摘するにあるだらうと思ふ。余の手際で旨く行けば結構である。

十八世紀を見渡して如何なる哲學者が出たかと思ふと、先づ三人居る。第一にロック(Locke)。第二にバークレー(Berkeley)。第三にヒューム(Hume)である。夫でロックはデカルト派の哲學を攻撃した學者であるが、當人自身神學者である。バークレーが此ロックを駁したのは元はといへば大に神學の爲に盡力した積りである。ヒュームは二人と大分異つて居るかも知れぬが、其二人を攻撃した攻撃の仕方は、彼等の結論が彼等の神學と一致しないと云ふ趣意である。すると當代の哲學が神學と密接な關係を有して居つたと云ふ事が分る。是は一寸面白い現象である。人の知る如く所謂自然神教の爭論が盛に行はれたのは此世紀の事であつて、此爭論なる者が矢張り一種の氣風をあらはして居て然も其氣風が文學にもあらはれて居りはすまいかと思はれる。然し夫は後廻しとして以上述べた三人の哲學の極くざつとした所を述べて、そして其特性を概括して見たいと思ふ。(私は哲學上の知識に乏しいから旨く行かない。のみならず手前勝手の概括で、飛んだ誤謬があるかも知れない。たゞ參考の爲に申す迄である。)

ジョン・ロック(John Locke. 1632—1704)。年代から云へばロックの有名な著書『人間の悟性に關する論文』(*Essay concerning Human Understanding*)は千六百九十年の出版であるから、詰り十八世紀ではない、十七世紀に屬するのである。然しながら實際彼の十八世紀に於ける影響は大いなる者で、バークレーの說はロックから出立し、ヒュームの說は又バークレーから出立する譯であるからして、ロックを十八世紀の哲學者として論ずるのは別段不合理の事はないと思ふ。

そこでロックの說はどこから緣を引いて居るかと云ふとデカルト(Descartes)から來たのである。其デカルトはオーソリチーを棄てて理性に從はねばならぬと唱へた人である。一般の人は他人が信ずるから信じても差支ないと考へて居る樣だが、是が間違ひの種である。決して人造の世間的通說(リチー)に盲從すべき者ではないと云ふ事を主張した。是は無論彼の消極的方面であつて、デカルトは一方に於て吾人は吾人の心中に於て天賦觀念(インネート・アイデア)があり得ると云ふ事を假定した。吾人が若し物を知るが儘に知り得るならば——經驗と獨立して眞理を認むることが出來るならば——其知識は誰にも同じでなければならぬと斷じた。此論法を引つくり返せばかうなる。各人に同じきものは經驗と獨立したものである。例へば數學の第一原理の如きは普遍で絕對な眞理で、全く經驗から獨立した者である。だから哲學者も數學者の樣に自分の取扱ふ問題に就いて公理とも云ひ得べき爭ふべからざる者を發見して、夫から出立したならば數學程に精密な學問が出來るだらう。——是がデカルトの考である。そこでデカルトは色々な推理の末、三つの實在を得た。卽ち神(ゴッド)、心(ソール)、物(マター)である。

そこへロックが出て來て、此天賦觀念の說を駁したのである。次にバークレーが出て來て彼の實在の說を駁したのである。最後にヒュームが出て實在の殘り者を打ち壞したのである。ロックは先づ經驗で確め得ざる觀念、又は實際の事實と一致せぬ觀念を哲學界から驅逐して仕舞ふと云ふ點から出立した。哲學界を見渡して見ると、天賦觀念と云ふ譯の分らぬ者がある。さうして哲

學は此天賦觀念と云ふ誤りの上にうち建てられてゐる。ロックは第一に之を攻撃せざるを得ない。ロックは前に申した如く耶蘇信者である。だから神の存在は無論認めて居る。然るにも關せず、彼はデカルトの主張した、神なる天賦觀念をさへ駁撃した。さうしてかゝる要用な觀念さへ天賦(インネート)でないからして、他の觀念の天賦でない事は知るべきのみであると云ふ樣な筆法を用ひた。心と(ソール)云ふ天賦觀念も亦ロックの攻撃を受けた。個人の同一性(アイデンチチー)と云ふ者は意識(コンシアスネス)から成り立つて居る。すると心の統一及び連續も疑はしくなるからと云ふ論である。第三、物(マター)と云ふ天賦觀念に關しては、彼は何だか妙なことを云うて居る。「吾人は一般に實質に關しては只不明にして關係的なる觀念を有するに過ぎず」といつて居る。然し是も兎に角駁論である。斯樣に天賦觀念を否定してかゝつたロックの立場は自ら明瞭で、人の知る如く、彼の考へによると、凡ての觀念は、必ず感覺性(セーション)と反思性(リフレクション)の二つを通して、經驗を待つて始めて得らるべきものとなつて居る。元來ロックの『悟性論』は大變大部な者であつて之を僅か二三行で講ずる事からが既に亂暴な話であるし、又二三行位ならば云はんでも誰も知つて居る位なものであるけれども、ロックが經驗の二字に飽く迄重きを置いて心は何でも經驗から觀念を得るのであるから、經驗を棄てては丸で議論が出來ぬと迄論じたのは、空漠なる哲學を堅固なる基礎の上に建立した者で、此實際的な着實的な態度が大に注目する價値のある事と思ふ。退いて考へて見ると是が一般英人の氣風であつて、そして之が最も十八世紀の社會一般を反映する氣風ではあるまいか。此點に關してレスリー・スチーヴン

(Leslie Stephen) は其著『十八世紀の英國思想』に下の樣な事を述べて居るのは大に吾人の參考になる事と思ふ。

"The critical movement initiated by Locke and culminating with Hume reflects the national character. The strong point of the English mind is its vigorous grasp of facts; its weakness is its comparative indifference to logical symmetry. English poetry is admirable, because poetry thrives upon a love of concrete imagery; whilst Englishmen have always despised too indiscriminately the dreams of a mystical philosophy which seems to be entirely divorced from the solid basis of fact. In metaphysical speculation their flights have been short and near the ground. They have knocked pretentious systems to pieces with admirable vigour; they have been slow to construct or to accept systems, however elaborately organised, which cannot be constantly interpreted into definite statements and checked by comparison with facts. As one consequence, we perhaps underrate our own philosophical merits. Comparing Locke, or his successors, with the great German writers, we are struck by the apparently narrow, fragmentary, and inconsistent views of our countrymen. If the merit of a philosopher were to be exhaustively measured, not by the number of fruitful principles, but by the variety and order of his applications of his principles, Locke and his successors would occupy a low position. If the

courage which passes over a difficulty in order to frame a system be more admirable than the prudence which refuses to proceed beyond clearly established principles, they must be content with a secondary rank. Nor is it doubtful that our dislike to pretentious elaboration often blinds us to the merit of the more daring speculators whose width of view has stimulated thought even whilst covering many fallacious generalities. Yet I believe that the merits of our shrewd and sober, if narrow and one-sided, speculation, will be more highly valued as we recognise the futility of the cloudy structures which it has dissipated."

（ロック）によつて唱道せられ、（ヒューム）に至つて最高頂に達したる批判的運動は英國國民性を反映する者である。英國思索家の長所は、確と事實を捕ふるにあると共に、其短所は比較的論理の整然たるに無頓着なる邊に存して居る。詩は具體の影像を愛するが爲に榮える。故に英詩は群を拔いて卓越してゐる。之と同時に英人は、常に事實の牢たる基礎を全く離れたる如き神祕哲理の夢幻的なるを侮蔑してゐる。其侮蔑し方が無差別過ぎると思はれる位である。純正哲學に於ける彼等の羽搏きは短かきものである。且地上を去る事甚だ遠からずと評しても差支ない。彼等が白癡（こけ）嚇しの系統を粉摧するときは猛然として驚嘆に値すべき精力をあらはすにも拘らず、明晰なる命題に翻譯しがたき、もしくは事實の保證を有せざる系統に至つては、如何に精巧に組織せらるゝも、容易に之を建立する事がない。又容易に之を承認する事がない。其結果として吾人は動ともすれば我哲學者の功績を見縊る癖がある。（ロック）及び（ロック）の繼續者を取つて獨逸の大家と比較して見ては、常に吾邦人の見解の矛盾で狹隘で、しかも斷片的なのに驚いてゐる。尤も哲學者の價値は、其哲學者の齎した富實なる主義の數量で殘りなく計られるものでなくて、其主義の應用の變化あり區域廣き點によつて定まるとすれば、（ロック）の如きものは固より低級の席を占むるに過ぎぬだらう。若し一系統を組織する爲に困難を凌ぎ越す勇氣が、確立せられたる主義以外には一歩も足を踏み出さぬと云ふ用心よりも賞讃に價するとなれば、彼等は第二流以下を以て甘んじなくてはならぬ。巧緻を盡くしたる僭越なる系統を嫌ふの極、誤謬ある概則を含みながらも思索を鼓舞するに足るべき雄大なる見識家の功績を吾人が見逃したるは明らかであるが、余は信じて疑はぬ。——吾人が吾人の打破したる雲を攫む樣な哲學系統の空虛なる事を認識するに從つて、鋭利堅實なる（偏狹かも知れぬが）吾人の哲學思想の功績は次第に重んぜられるに至るだらう。）

是は英國の學者が自ら英國人の氣風を考察して其哲學の利害得失を明らかに述べたる一章であつて、吾人の爲には大に參考になりはせぬかと思はれる。英國は神祕的な臭味を嫌ふ。事實を愛する。夫だから宏淵縹緲の趣がない代りに着實適切の風がある。此神祕を嫌ふと云ふことは一般の英人の臭味であつて同時に十八世紀の風ではないか。此事實を愛すると云ふ事は英人全體の氣風であると同時に殊に十八世紀の特徴ではあるまいか。而も此氣風が當時の文學にあらはれては

居るまいか。若しあらはれて居るとすれば、吾人は之に因つて朧氣ながら當時の哲學と當時の文學との底を一貫して居る纖素（ファクトルス）を見出だしたものである。同時に社會現象が同時代の産物である以上は或關係を以て結び附けられて居ると云ふ一の例を得ることになる。尤も是丈では分らない。もつと同樣な例が澤山集まれば一の概括が出來る樣になる。果してさうなるか、何うだか今の所ではすぐ分らない。

ジョーヂ・バークレー（George Berkeley. 1685—1753）。ロックに繼いで起つた者はバークレーである。『幻象の新理論』（*New Theory of Vision.* 1709）。『知識の原理』（*Principles of Human Knowledge.* 1710）。『ハイラスとフイロナスの問答』（*Dialogues between Hylas and Philonous.* 1713）の著者である。偖前に述べた如くデカルトが世の中を割つて物と心とすると、物と云ふ者には明瞭なる屬性がある爲動もすると空漠たる心を凌いで之を壓倒する傾がある。此傾向を見て取つたバークレーは心の勢を恢復して之に相當の地位を與ふる爲に物を打破せんと企てた。夫だから彼の筆鋒は所謂唯物主義を打破する方面に向つたので、彼の主義が物の存在に反對する所からして之を唯心主義（アイデアリズム）と云ふのである。普通の哲學者の考へによると、觀念なるものは外物を代表するもので、外物夫自身は不可知である。だから此不可知なる物を代表する觀念は實在のものではないといふのが一般であつたのだが、バークレーは丸で此議論を倒まにして、觀念こそ實在である。物質こそ毫も實在を有して居らぬ。外界の存在と稱する者は此觀念が或一定の方法で俱發

し、若しくは連續するの謂に外ならぬ。それで此方法の原因となる者は神である。（バークレーが神を建立した論理はエルドマン著『哲學史』第二卷二百六十二頁に旨く書いてある。）

一寸見ると十八世紀の風潮と相應しない樣な說であるけれども、ロックが既に天賦の觀念を論破した以上はバークレーが物を打ち碎いたのも非常に突飛な事とは云へぬ。然し、物、心、神とある中で、何故心の方を打ち碎いて物を存して置かなかつたか。其方が十八世紀的の樣に思はれるがと云ふ質問が一寸起したくなるかも知れない。此質問は頗る困難な質問で、恰度ブラウニングが何故哲學者にならないで詩人になつたかと聞く樣な者である。かゝる込み入つた問題は込み入り過ぎて居る爲、眞面目に返答すればする程滑稽になるけれども、余はどうも此質問を起したくなる。と云ふものは十八世紀は其全體に於て頗る物質的な傾向のある世である。散文的な世である。若し茲に物、心、神と云ふ三つのものがあつて其中何れか片付ける必要があるならば、先づ心から片付けさうなものだと思はれる。然るにバークレーは余の豫期に反して物を滅して仕舞つたのは聊か妙な感じがする。余は哲學を專門に考究する者でないから此邊の消息については權威（オーリチー）を以て明答を與へる事は出來ない、のみならず、かゝる質問を一言で解決するのは少々馬鹿氣た感じがあるが、先づ杜撰ながら余の推察を御笑草迄に一言述べて置かうと思ふ。

バークレーの論鋒が一意心と云ふ事に着眼して物を取り壞す方に心を用ひたのは眞理のある所だから仕方が無いと云へば夫迄である。彼が何れの國、何れの世に生れてもかう云ふ風に世界を

見るのであると云へば夫迄である。余も強ひて之を爭ふ氣はないが、然し彼をして十八世紀の風潮に反して苟も眼をこゝに轉ぜしめたのは矢張り一種の事情がある樣に思はれる。彼は坊主である。一千七百三十四年からクロイヌの僧正である。して見ると彼は神と云ふ者を度外に置くことは出來ないのみならず、彼の著書は哲學であると同時に神學的意義を有して居る、彼の態度は哲學者であると同時に又神學者である。而して當時の神は——一般の學者に因つて理解せられたる神は——眼を備へ、口を備へ、喜怒哀樂の情を具へた希臘人の思惟した神のやうなものではないに極まつてゐる。非常に抽象的な非常に茫漠たる非常に理窟詰めに割り出した神であらう。一の精靈である。彼れバークレーの思惟する神が斯の如き神であつて彼が職業上敎育上この神の觀念を取り去ることが出來ぬ以上は、物と心を竝べてどちらか片付けろと云はれた時に、彼が何れを選び何れを棄てるか其取捨は多言を用ひずして明瞭であらうと思はれる。心を棄てるは神の影を棄てる樣なものである。否神の一部分を棄てる樣なものである。物に至つては之を棄てても神の領分を犯す憂はない。彼の信ずる神を毫釐も冒す所なくして、心と物の取捨を決しようとすれば、無論物を棄てたいに極まつて居る。棄てたいと云ふ了見で理窟を附け出せばしたいと云ふ願と共に理由はいくらでも湧いてくる者である。彼が心をとつて物を棄てたのは十八世紀に似合はしからざるにせよ、彼の心理狀態から云へば左もありさうな事に思はれる。

其上彼の議論は唯心主義であるけれども經驗的である。其「幻象の新原理」は純正哲學に導く

楷梯には違ひないが、其自身に於て心理學である。在來の理論によると廣袤といふ事と、空間的物體との二者は視覺でも分る、又觸覺でも分る。卽ち兩方の感覺で一樣に分るものと思はれて居たのをバークレーが出て來てさうでないと主張したのである。彼の說によると吾人が眼から受ける觀念（觀念には感覺性の印象と其模寫（コピース）とを含む）は色のみである。それが漸々觸覺的觀念の記號となつて其代理をつとめる樣になる。眼で見た色は或場合に於て觸覺の經驗に伴なふものである。そこで眼で物を見た時は觸覺と云ふ事が暗示せらるゝ樣になる。是を視覺廣袤（ヴイジユアル・エツキステンション）の觀念といふ。一寸單純な樣に思はれるけれども其實は複雜な結合から出來て居る。それだから吾人が物を見て色と共に廣がりをも見るのは過去に於て色の觀念と共に出來上がつた觸覺の觀念を呼び起すに過ぎぬ。是がバークレーの說であつて後世の心理學者は一般に之を採用するのである。此實驗的なる態度は矢張り英國人流であつて何處までも事實と離れぬ氣風を示して居る。而して又十八世紀の氣風とよく調和して居る。それだからバークレーが一般から云つて物質的な十八世紀に出たのも驚く程な現象ではないと思ふ。

デヰツド・ヒユーム（David Hume. 1711—1776）。バークレーが出て物丈は打ち崩したが、心と神丈は依然として存在を認識せられて居た。然るにこゝに蘇格蘭土からデヰツド・ヒユームなる豪傑が出て來て研究に一層歩を進めて遂に心も神も一棒に敲き壞したのは痛快の至りである。彼の第一の著書は『人性論』（倫理問題に向つて實驗的方法を試みたるもの）（*A Treatise of*

Human Nature, being an Attempt to introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects. Lond. 1738) で、これは彼の大著述であつて而も彼の二十五六歳の時の製産物である所を以て見れば餘程頭腦の勝れた人に相違ない。不幸にして此大著述は折角の勞力にも關せず、世間の人から一向注意を惹かなかつた。彼は後年自家の學說を「死生兒」と評したのは是が爲である。そこで彼は此著述を書き直して一般の人にも解る樣にした。それが『人間の情性に關する研究』となり、『情感論』(*A Dissertation on the Passions*) となり、又『道德原理に關する研究』(*An Enquiry concerning the Principles of Morals*) となつた。

彼の說によると、吾人が平生「我」(イゴー)と名づけつゝある實體は、丸で幻影の樣なもので、決して實在するのではないのださうである。吾人の知る所は只印象と觀念の連續に過ぎない。たゞ此印象や觀念の同種類が何遍となく起つて來るので、修練の結果として、此等の錯雜紛糾するものを纏め得る爲に、遂に渾成統一の境界に達するのである。だから心など云ふものは別段に夫自身に一個の實體として存在するものでないと云ふのがヒユームの主張の一つである。次に、因果の概念と云ふのも亦習慣の產物として出現するに過ぎないのである。吾人は茲に甲と云ふ印象を受ける。次に乙と云ふ印象を受ける。かくして甲乙從伴する印象を何遍となく同一の順序に經驗するうちには、甲の印象を受けるや否や習慣の結果として自ら乙の印象を期待する樣になるのが自然の數である。斯の如く因果の念と云ふ者は習慣から出て來るものだから、若し之を應用しようとするなら其習慣を構成する經驗の範圍內に限らるゝのは當然の話である。經驗的に與へられたる已知件からして出立して漫りに經驗の領域以外に逸出して、徒らに超絕的の議論に移るのは明らかに不法である。從つて神とか不滅とかを口にするのは不法である。是がヒユームが世人からして懷疑派といはるゝ所以である。

偖此懷疑と云ふ態度は英國人全體の態度としては受取り難いかも知れぬが、十八世紀の英國人の態度としては調和して居る所がないでもない樣に思はれる。成程ヒユームの樣に哲學的に理論的にこゝ迄押し詰めた者は澤山あるまい。又多くの人間の居る事だから其中には信心家も無論あつたらう。忠實なる基督敎信者もあつたらう。然しながら概して社會の調子が懷疑的ではあるまいかと察せられる。信仰が餘り强くなくなつて、世の中はこんな者だと中途で妙に悟つたやうな所から云つても、根本的の事は分らなくても構はんと云ふ樣な調子のある處から云つても、無暗に物に熱中するのを輕侮する樣な氣風から云つても皆此懷疑的な態度を具へて居る樣に見える。偖全體の社會にこんな空氣が充滿して居ると云ふと哲學的に物を研究するにもこんな氣風で手を着け出す。こんな氣風で手を着け出して、こんな方面から物を見、物を考へて煎じ詰めて行くと、矢張りヒユームの樣な結論に達しはせぬだらうか。しかも一度學說的に此處迄到達して見ると、一時の臭味に感染した感情的な抑もの始りは綺麗に消えて、全く普遍的に效力のあるやうな、古今東西に通ずるやうな、抽象的な理論となつてあらはるゝのではなからうか。此出來上がつた所

丈を見てヒユームの考へは一代の風氣を反射して居らぬと云ふ事は云へまいと思ふ。果してさうであるとすればこんな哲學者のやうな、普通の人に直接の興味を與へぬ事でも何等かの興味があるのみならず、文學を述べる前にヒユームの哲學を一言述べるのは反つて適切なことと思はれる。ヒユームの感染した樣な氣風が同じく文學の上にもあらはれて來れば猶更面白い事だと思ふ。

（バークレーの說はバークレーの心理狀態から出たと云ひ、ヒユームの說は一代の風潮に胚胎したと云ひ、ロックの說は事實を喜ぶ英人氣質から出たと說いたのは何れも不完全なものに極まつてゐる。だから其外にもつと複雜な原因が澤山あると云ふ事を御互に承知の上で、述べもし、聽きもしたと致して置かなければならない。一寸考へても分る。いくらロックが英國氣質だと云つて、哲學の系統がデカルト迄降下して來なければ經驗說を主張しなかつたかも知れない。デカルトを駁しよう爲にこそ經驗說を建立したとも見做される。バークレーも其通りデカルト、ロックのあとに出て何か自說を樹てようとすればこそ、彼等に反對の方面に研究の步を進めたので、單に自分が僧侶であつたからと云ふ事實は事實として原因の一に數ふるに足る迄である。ヒユームも同じ事である。もしバークレーが彼の前に出て、あゝ云ふ說を唱へなかつたならば、如何に獨創的なヒユームでも暗示の材料を失つて、しかく大なる懷疑說を持ち出す迄には至らなかつたとも思はれる。だから一代の風潮のみがヒユームの學說を產出した抔と云ふのは固より盡くさざる議論である。たゞ個人、學說、社會、國風、文學、抔をならべて幾分でも其間の關係をつけて見ようとしたから、話頭が此所に及んだのである。しかも肝心な本論の文學でないから、それすらも頗る盡くさざるものである。簡單過ぎる所は御容赦にあづかりたい。）

ロック、バークレー、ヒユームの三人の哲學を述べたからしてこれからは他の事項に移つて御話しをする筈であるが、今一つ之に聯關して自然神敎者のことを述べて置きたいと思ふ。英國の十八世紀は自然神敎者の論爭舞臺として知られたる世紀である。自然神敎を主張する自然神敎者の多數は所謂フリー・シンカーであつてホツブス（Hobbes）一流から發達して來た唯物論者の樣に見える。卽ち靈魂の不滅や未來の存在抔は理窟上信ぜられんと主張するものと見做せば差支あるまい。此主張に應じて一方では、成程靈其物は自然に不滅ではないかも知れない。然しながら神の惠みによつて未來の存在を得るのであると答へる者が出て來る。すると又それに反對するものが現はれる。議論に議論が重なつて段々局外者には解らなくなる。それで此等の著書は總體で百部か二百部もあるだらうと思ふが、何れも耶蘇敎に關係した哲學的の議論であつて、自然神敎者の方では理性に協ふやうな宗敎でなくてはいかん、默示や奇蹟は信ずるに及ばずと絕叫するのだらうし、又反對の側の方でも夫に應じて色々な辯護をするのだらう。余の如き門外漢は此錯雜した論爭のなかに一步も立ち入る權利はないのであるが、まあ一例を擧げると、德を賞し惡を罰すると云ふ事物の原始的傾向が此世では旨く出來んから均衡をとるために未來の生命を神が作つ

た抔と云ふのである。要するに我々日本人――ことに耶蘇教に興味を有つて居らぬ余の如き者からして見ると、何の爲に彼等は貴重な時間をこんな問題に費やして鎬を削つて喜んで居るのだか殆ど要領を得るに苦しむので、成程一代の趨勢と云ふものは不思議なものだと云ふ感が起る。實を云ふと、前にも述べた通り、余の如き横着者は如何に奮發して見ても、此混亂した神學とも哲學とも判じかねる議論を研究して其道筋をさへ合點する勇氣に乏しいのである。萬一諸君が此論爭を御承知にならうと思はれるならば、ユーバーウエヒ（Ueberweg）の『哲學史』第二卷三百七十一頁乃至三百八十六頁を御覽になれば要領丈は書いてあるから、二三日熟讀したら御會得になるであらうと思ふ。若し又詳細の事が必要ならばレスリー・スチーヴンの『十八世紀に於ける英國思想』を御覽になればよい。

偖自分で解し兼ねるとか、面白くないとか云ひながら、自然神教の論爭の事を何故に茲に一言でも述べたかと云ふと、當時の哲學者神學者は皆此の如き議論を自己の本分の樣に心得て居たらしく思はれるから、夫を敢て紹介して置かうと云ふのである。それを紹介して何の爲になるかとの質問があるかも知れぬが、私は局外から見て之を一寸妙な現象と考へる。而も十八世紀流ではなからうかと思ふ。元來宗教の中に理窟があるかないかと云へば、あるべき筈であるとも無くて成立するとも答へらるゝのであるが、兎に角理性に訴へて宗教を議論するやうになつては、宗教は暖い感情的のものでなくて、冷やかな理論的の者となることは疑ひもなき事である。信仰とか熱誠とか狂亂とか云ふ境に入る時は理も非もある者ではない。神が有難いと一生懸命に思ひ込んだ時には神其物の屬性とか權限とか何とか面倒な事を言ひ出すものでない。聖書を取つて來て之を理窟的に解かうとするのが既に聖書の勢力がなくなつたゝ證據である。成程聖書を理性に合ふ樣に解釋する事も、書き直す事も出來よう。然しながらさうしたからと云うて宗教熱は高くはならない。宗教觀は變つてくるかも知れぬが宗教上の有難味のある信仰心は熾にならない。耶蘇教の神はジユピターでもない、觀音でもない、そんな異教徒の神とは違ふ、其屬性をいへば無限である、絶對である、遍在であつて全知全能であると理路を經過して結論するのも成程結構であるが、かうすれば單に教徒の頭腦を滿足させるのみである。教徒の心情を滿足させる點に於て何の位の利益があるかは未定の疑問である。ある場合には却て不利益になるかも知れない。彼等は自分の知る能はざる、自分の考ふる能はざる空名を以て神を飾つたのであるから、此空名が彼等の心情に反響を起さぬ以上は、彼等の神に對する感情は反響を起さぬ丈其丈薄弱になる譯である。

自然神教の論爭は是とは違ふかも知れない。然し自然神教の論爭の樣な現象が宗教界に起るのは何を證明するかと云ふと、明らかに人間が理窟に墮在して來たと云ふ事を證明して居る。信を以て立つよりも、理を以て勝たうとする風を教界の全部に輸入したのである。是は時勢上已むを得ないかも知れない。決して惡く云ふ積りはない。然し此傾向が十八世紀の文學にも現はれては居るまいか、それが吾人に取つても尤も興味のある問題である。若し此理窟臭い所、議論を好む

所、論理的抽象的な事を愛して直覺的感情的なる點を冷却した氣風が文學にもあらはれたならば、吾人は此に於ても亦十八世紀全體に渉つて一般の英國人を支配した一の特性を認め得るのである。

二　政　治

十八世紀は政黨の世である。王黨（トリー）といひ、民黨（ホイッグス）と云ふ、二派の政黨があつて互に聲援し、互に軋轢し、互に罵詈したる有樣を今日から見ると、殊に政治に冷淡なる余の如き者から見ると、實に意想外である。其熱度は實に存外な點に迄及んでゐる。調べて見ると此政治的感情が純粹の娯樂を目的とする劇場裏に迄入り込んでゐる。劇場の一側には王黨主義を贊成する婦人が席を占めると、こちらには民黨贔屓の女連がずらりと竝んで、御互に雙方から睨み合うて居る。そこで役者の口から少しでも政治に關した臺詞でも洩れようものなら――否微塵でも政治上の解釋が出來る樣な言葉が出ようものなら、一方は割れる許りの喝采をする、同時に一方では之に負けない位な叱聲を放つ。之が政治家であつて政治に狂して居る男ならまだしもであるが婦人と聞いては驚かざるを得ない。現にジョンソンの書いたアヂソン傳中に *Cato*（アヂソンの作つた脚本の名）が千七百十三年の舞臺に上つた當時の狀況を述べて、斯う云うてある。

"The whole nation was at that time on fire with faction. The Whigs applauded every line in which liberty was mentioned, as a satire on the Tories; and the Tories echoed every clap, to show that the satire was unfelt. The story of Bolingbroke is well known. He called Booth to his box, and gave him fifty guineas for defending the cause of liberty so well against a perpetual dictator. The Whigs, says Pope, design a second present, when they can accompany it with as good a sentence."

（當時全國民は黨閥的紛爭を以て狂する許り熱して居た。自由の二字が出る度毎に民黨は王黨にアテコスル積りで盛に拍手した。すると王黨の方でも其手に乘るものかと云はぬ許りに手を拍き返した。ボリンブロークがブース（役者の名）を自分の棧敷に呼んだ話は誰もよく知つてゐる。彼は其時ブースに五十ギニーを與へながら斯う云つた。專權者の面に立つて、しかく自由の爲に盡くされたる勞を謝すと。ポープに聞いて見ると、斯う云ふ面白い文句が云へさへすれば、民黨はもう一遍ブースに纏頭をやる積りださうだ。）

政治熱が劇場裏に侵入した證據は、サー・ロバート・ヲルポールが千七百三十七年に彼の特許法案を提出して、爾後新作の脚本は必ずロード・チエンバレン（官名）の嚴密なる檢閲を待つて始めて場に上す事を得る規則にしようと申し出たのでも明らかである。彼等が如何に黨派心によつて支配せられたかは此一事を見ても合點が行くだらう。

單に劇場計りではない殆ど事々物々が黨派的臭味を帶びて居る。新聞紙は日毎のやうに誹譏讒

謗、人身攻撃で埋まる位、町内往來は是から起る喧嘩騒動の爲に寧日のなき位、賑ひと云へば中中な賑ひである。ある時抔は此黨派心が服裝の末に迄及んだ。黄色のチョッキと同色のずぼんは民黨で、眞紅のチョッキに金釦をつけて黑い絹のずぼんを穿いたのがピットの味方と、いつの間にか相場が極まつた抔は、丁度天然自然に憲兵と巡査の制服が出來た樣なものである。夫から女が頭に狐の尾をつけて、同じく狐の暖手套(マッフ)を用ひるとチャールス・ゼームス・フオックスの黨派であると云ふ事になる。是は狐とフォックスで駄洒落て居るが旗幟は自ら鮮明である。

狂熱の餘り意外な所に政治的臭味が傳はつたのは以上の如くであるが、肝心の本家張本の政治屋――政治屋と云つても一國の政治に關係する者を云ふのではない、政治に興味を有して、しきりに之を論議する者を云ふのである。――是等は皆夫々會があつて、皆銘々が行きつけの珈琲店又は酒店に集まつて、深夜に至る迄政府の處置方針等を批評したり、又は議論するのである。（討論の題目等は新聞に廣告したり、又は書かせたりする。）是が教育のある又生活に餘裕のある所謂紳士計りであれば、別段怪しむにも當たらんが、倫敦の手代、屠獸者、麵麭屋、靴屋、仕立屋抔でさへも夫々倶樂部を構成して盛に政論を闘はしたと云ふのだから驚かれる。曾てフィールヂングが（『カヂェント・ガーデン』雜誌八號及び九號に於て）彼等を諷した事がある。フィールヂングは去る所からかゝる會の記事を送られたと號して、自ら其記事を彼等の無教育な言語で綴つて之を該雜誌に載せたのである。其文には斯うある。

"Important questions cunsarning relidgin and gubermint handyled by the Robinhoodians, March 8, 1751. This evenin the questin at the Robinhood was, Whether relidgin was of anuy youse to a sosyaty; baken (taken) bifor mee Tommas Whytebred, baker. James Skotchum, barber, spak as showeth: Sir, I ham of upinion, that relidgin can be of no youse to any mortal sole; because as why, relidgin is no youse to trayd, and if relidgin be of youse to trayd, how is it yousefool to sosyaty. Now nobody can deny but that a man maye kary on his trayd very wel without relidgin; nay, and better two, for then he maye wurk won day in a wik mor than at present; whereof no body can saye but that seven is more than six, etc., etc."

無論常人には解すべからざる英語であつて、其解すべからざる所がフィールヂングの讀者には興味のある所である。英語の教授でないから、文法や綴字の間違を一々訂正して見せる必要もあるまいが、何のことか會得にならないと引用した甲斐がないから、まづ一應日本語に譯して見よう。然し譯すると同時に、文句言語は普通の日本語になつて仕舞ふから其積りで見なくては不可なし。

（ロビンフード會員によつて議せられたる宗教及び政治に關する重要問題。千七百五十一年三月八日。ロビンフード《酒店の名らしい》に於ける今夕の問題は宗教は社會に必要なりや否やの問題なり。討議は余卽ち麵麭屋のタマス・ホワイトブレッドの前に開かれたり。其時床屋

のゼームス・スコチャム下の如き意見を陳述せり。――議長。余は斯う云ふ意見を有して居ります。即ち宗教は何人に取つても不用なりと云ふ意見である。何となれば宗教は商賣上何等の利益もなきものだからである。よし宗教が商賣上に何等かの利益ありとするも、どうして社會に要用であると云ひ得るであらう。偖、世に宗教なきとも吾人の商賣を營み得るは何人も疑ひを容れざる所である。否無い方が寧ろ幸福である。何となれば現今よりも一週に於て一日丈營業の時間を儲け得るからである。七日が六日より多きは何人も爭ひ難き事實である。云々。）

是は寧ろ宗教上の討論であつて政治に關係はない樣であるが、凡てかゝる口調で政治上の事を論議したと見れば差支あるまい。（是は現今倫敦の下等社會の言葉に大分似て居て興味があるから引用して見た。）

此等の人が集合する珈琲店とか酒店とか云ふ者は十八世紀に於て種々なる意味を有する所から見逃すべからざる現象として、歴史上人の注意を惹いてゐる。だから是は後から別の條目として御話しをする積りである。

政治の項の下に選擧の事を一言云ふ積りである。現今日本の選擧は隨分腐敗して居ると云ふ話であるが、當時の英國の狀態は又驚くべく無主義無節操であつた。平生は嘘をついたり人を欺いたりすることは誓つてすべからざる者と心得ても居り、又之を實行して居る人が、選擧に關すると丸で別人の樣な敗德漢になる。名譽を害しようが詐欺をやらうが構はない、

只競爭者に勝ちさへすればそれでよいのである。自己の黨勢を扶殖する爲には上總理大臣から下郵便局の小使に至るまでを餌にして釣るのである。ホーガースと云ふ畫家（是は後に一寸御話しをするが、御承知の通り有名な畫家である）が例の諷刺的な畫風で選擧の圖を三枚描いて居る。ホーガースの畫は固よりポンチ（caricature）に近いものだから、多少の御負けのあるのは勿論であるが、就いて之を見ると當時の選擧の模樣があり〳〵と能く分る。第一圖は候補者が選擧區で御馳走をする圖で、第二圖は運動する圖で、第三圖は愈投票と云ふ圖である。其中最も甚しいのは第一圖御馳走の圖である。一寸其解題を申すと。――四十人に餘る同勢が食卓の周圍やら、部屋の中に各勝手な眞似をして陣取つたものである。固より支離滅裂に陣取つてゐるのだから一團となつて御馳走に呼ばれたとは到底受け取り惡い位席が亂れてゐる。しかも室の外部からは反對派の者がしきりに石や煉瓦を投げ込んでゐる。其破片が室内の一人に當たつて、其男は將に椅子から倒れ落ちつゝある。他の一人が之を怒つて、椅子を振り上げて窓外を目懸けて今や放り付けようとする。一人は壺の中からザアーッと小便を外の奴へ浴びせかけて居る。清教徒風の一人が賄賂を固辭して居ると女房が傍から大聲をあげて、自分や子が餓死するのも構はず金を貰はないと云ふ法があるものかと怒鳴つて居る。其他ひつくり返つて居る奴がある。頭へ傷をこしらへて、其頭上へジンと云ふ酒を打ちかけられて居る者が居る。最も滑稽なのは食卓に坐つて居る一人で、餘り食ひ過ぎて目を廻して居る。片手に肉叉を握つてその肉叉には牡蠣がついて居る。醫者が其

傍で出血法を遣つて居る。選擧の亂暴な事は此でも一般が想像出來る。或時は選擧の役人が三十七票しか得ない候補者を當選だと宣告し、八十七票を得た者を反て落選だと詐つた事さへある。是は序だから御話しをするがフオツクスと云ふ人が選擧を爭つた時には、大分女が加勢に出たものである。デヴンシヤア公爵夫人、カーライルとダービー伯爵夫人、ビーチヤム夫人、ダンカノン夫人等がいづれも帽子に狐の尾を插んで戸毎に投票を勸誘して歩行いた。當時の人は之を落首(Epigram)に作つた。

"Arrayed in matchless beauty, Devon's fair,
In Fox's favour takes a zealous part,
But oh! where'er the pilferer comes, beware!
She supplicates a vote, and steals a heart."

(無雙の容色に身を堅めてデヴンの美人が、フオツクスの爲に熱中するのは好いが、泥棒をされるから氣を付けないと危い。此女は腰を低く投票を願ひますと出る。さうして人の心を奪つて行く。)

或屠殺者が此公爵夫人に、御依頼通り投票をするから御褒美に接吻をさして頂きたいと云つたら、公爵夫人は宜しいと云つて、接吻を許したと云ふ話さへ傳はつてゐる。落首の出來たのも無理はない。

當時の政德の腐敗と云へば有名な者で、何人でも少々歴史を讀んだものは心得てゐる。ジヨーヂ一世からジヨーヂ三世の時代に至るまで、民黨内閣は贈賄及び敗德の有らゆる手段を盡くして自己の地位を守つて居つた。一口に云ふと今と同樣に議員全體を買收し盡くすのである。夫で平氣なものであつた。毫も不德とは思はれなかつた樣子である。一例を擧げるとサー・ロバート・ヲルポールが議員を御馳走した時議員が席に着いてナプキンを取つて見ると各自のナプキンの下に五百磅の手形があつたと云ふ有名な話さへある。

先づ此位で黨派爭奪の話は止めるが、是に因つて見ると當時は隨分亂雜な世の中で有つたに相違ない、又道德も餘り進歩して居なかつたに相違ない。人を罵詈する事抔は平氣で居たに相違ない。偖此政治的感情の一般は矢張り文學上に反響しては居まいか。王黨とか、民黨と云ふ字は常に文學書に散見しては居らぬか。彼等の道德はありのまゝの姿を以てフイールヂング、スモーレツトの小説に出ては居らぬか、又反對の聲としてアヂソン、スチール、下つてゴールドスミスの著書抔にあらはれては居らぬか。又他を罵詈すると云ふ一代の氣風は、文學上に Satire なる一種の産物となつて現はれて居らぬか。追ひ〳〵其邊を分明にして行きたいと思ふ。

三　藝　術

十八世紀は音樂に於て、ハンデル（Handel. 1685—1759）を生じたる世である。ハンデルは在來の人の夢想することも出來なかつた聲音的敍述（tone-painting）を樂界に輸入した人である。ベートーゼンやシューマンのために地盤を固めた人である。彼は鳥の鳴く聲や、川の流れる音や、其他自然の聲を表顯する事を力めた人である。其上彼の傑作なる神樂（oratorio）に至ると此聲音的敍述を擴張して、太陽の一所に止まつて動かざる樣子やら、奇蹟のために紅海の巨浪が裂ける狀態やらを聲音の力で暗示するに至つたとしてある。（ハンデルは獨逸人であるけれども英人は自國に關係深き點に重きを置いて、此音樂家を英國人と見做してゐる。ヘンデルと云はずしてハンデルと呼ぶのも之が爲である。）

音樂に於てハンデルを生じたる十八世紀は、繪畫に於てもレノルヅ（Sir Joshua Reynolds）を出だし、又一代の奇傑ホーガース（William Hogarth）を出だした。私は音樂に就いて不案内だから何も話す事が出來ないし、繪畫に關しても固より詳細に調べないのだから、多くを言ひ得ぬ男であるから、只大體の要を掻い摘んで御參考にしようと思ふ。まづ千七百三十九年に「藝術愛好會」（Dilettanti Society）と云ふ一種の會が成立した事から御話しをするが、是は僅か五人の人が發起人になつて設立したものであつて、其五人が揃ひも揃つて悉く伊太利へ旅行した事のある男計りであつた。會の趣意は自分等が外國を旅行した時面白いと感じた繪畫藝術を自國に於て奬勵しようと云ふので、丁度今日吾邦のハイカラ

流の遣り口と同じ事である。夫から十年立つて千七百四十九年には「美術協會」（The Society of Arts）と云ふのが設立せられた。以上は兩會ともに、懸賞の方法で繪畫を募集したり、又は展覽會抔に使用する爲に自家の建物を貸與したり、其他色々の手段で斯道の爲に奬勵の策を講じたのである。さうかうして居る内にホーガース（一六九七年—一七六四年）が出現した。

此ホーガースと云ふ人は疑ひもなく一種の天才である。天才ではあるが餘程片寄つた方である。彼の繪を見ると色が非常に好いと云ふ譯でもない、又今の人のやかましく云ふデッサン抔も（余の如き素人の眼から見ても）調つて居らん。然しながら彼は當時の風俗畫家として優に同時代の人を壓倒するのみならず、一種の意味から云へば、恐らく古今獨歩の作家かも知れない。彼は他の畫家の如く希臘の諸神や古代の勇者抔を題目とする事を屑しとしなかつた。彼は氣取つた上品振つた高尚がつた畫風を唾棄したのである。彼はジョーヂ時代の人間であつてジョーヂ時代の人間を描いて滿足して居つた。而も彼の見付ける所は普通の畫家の注意する畫らしい處ではない、普通に詩的と認められたる處ではない。彼は特に汚苦（おさくら）しい貧乏町や、俗塵の充滿して居る市街を擇んだ。さうして其内に活動して居る人間は決して眞面目な態度の人間ではない、必ず或滑稽的の態度を見はして居る、或は諷刺的意義を寓して居る。其の大膽にして如何なる事をも寫して憚らぬことは、彼の畫集中の『前』"*Before*" と『後』"*After*" と名づけられたる二枚が發賣禁止を命ぜられたのでも分る。（たま〳〵坊間に此二枚入りの儘の畫集が出ると頗る高價に賣れる。）

加之彼は繪を以て、繪の本分以外なる事件の發展をさへ描かうと試みた。有名なる "*Marriage à la Mode*" などは六枚續きになつてゐる。是は或富貴な貴族が結婚をする始めから、結婚後の家庭の有様を通して、遂に不幸に終る迄の經歷を、彼一流の風俗畫で示したものである。第一は結婚の約束の場。第二は朝飯の場で亭主は宿酔、女房は欠伸の體、兩人共冷淡で無頓着で何う見ても夫婦の情合らしいものが現はれて居らない所。第三は既に財産を蕩盡した亭主が健康を害し醫者に見て貰つてる圖。第四は女房が自宅で大勢を聚めて放埒を盡くして遊んで居る所。第五は女房の不義をして居る處を見付けて、亭主が劍を拔いて飛び込むと、却て姦夫のために刺されて無慘な最期を遂げる。第六卽ち一番仕舞の一枚には女房が毒を仰いで死ぬ處が描いてある。そこへ阿爺が來て娘の手から金剛石の指環をはづすと云うた様な皮肉がある。此繪は今でも National Gallery に懸かつて居ると記憶する。此外にも "*Rake's Progress*" とか "*Harlot's Progress*" とか云ふのがある。プログレスとは經歷とか、一代記とか譯すべきもので、前者は卽ち放蕩兒の生涯を八枚續きに延ばしたもの、――財産を相續した、のらくら息子が、藝人幇間の類を呼び集めて無闇に散財をしたり、茶屋酒を浴びたり、賭場へ行つたり、借金で牢へ入つたり、最後に狂癲院へ送られて、市が榮える迄を順々に描き分けたものである。後者は卽ち名前の示す如く、賣女の一生を前同樣の筆路をたどつて容赦なく寫し出したものである。

ホーガースの畫は疑ひもなく卑猥である。或點に至れば殆ど殘忍に近い感を起す。臆面もない

斟酌もない畫である。のみならず、故意に、もしくは無理無體に露骨を衒ひ過ぎるから、一種の意味の理想畫で、また一種の意味の寫實畫及び風俗畫である。それで之を寫實畫風俗畫といふ方面から見ると當時の文學と密接の關係があるに相違ない。果せるかな、フィールヂング抔を讀むと、其の滑稽的なる點に於て、其の無遠慮なる點に於て、其の諷刺的なる點に於て、而も其の倫理的なる點に於てよく類似して居る。フィールヂングの書中にはホーガースの畫きさうな題目がいくらもある。又ホーガースの畫にはフィールヂングが解題しさうな所がいくらもある。

ホーガースに次いで起つたサー・ジョシュア・レノルヅは別方面の肖像畫の部門を開拓して、その技術の開山と目せられて居るのみならず、又師として仰がれて居る。今迄の畫工の描いた畫と云ふものは肉でも衣服でも性格でも態度でも、筆に任せて在來の約束に從つて描き上げたもので、毫も眞の肖像らしい感じを與へなかつたのを、レノルヅが出て來て始めて之を一變したのである。彼の畫には非常に落付きがある。而も驚くべき程緻密な觀察がある。一寸捕へ惡い樣な情を巧みに捕へて、描かれたる主を躍然と畫布の上に寫し出す。小兒の無邪氣な所でも、慈母の溫情掬すべき有樣でも、青春の燃ゆるが如き狂熱でも、やす〳〵と之を一枚のカンバスの中に收めて仕舞ふ。（レノルヅと共に肖像畫家として知られたのはゲーンズボローであるが、肖像畫家として此人の事を述べる餘地がないから略することとする。）

其處でこの肖像畫と云ふ者が何故こんなに發達したらうと云ふ問題になる。無論レノルヅの樣

な大家が出たからであると答へれば夫迄である。然し何故こんなに流行したらう。人の言に依ると、彼の畫室へは幾多の老若男女が絶え間なく詰めかけて、先を爭ひつゝ畫中の人物となりたがつたと云ふ話である。是も無論畫家の伎倆から出た繁昌には相違なからうが、少し調べて見ると、此繁昌を來した裏面には物質的膨脹と云ふ大原因が伏在して居る。其頃英國は農業上にも牧畜上にも、大なる改良の結果として非常の利益を受けた、云はゞ百姓の黄金時代である。そこで田舍の懷の暖くなつた連中が一樣に申し合はせた樣に、自分共の肖像を描いて貰つて、之を室内の裝飾としたのだと、慥か或書物に書いて在つた樣に記憶して居る。けれども亦一方から見ると懷中が暖まつたから必ずしも肖像畫を描かせると云ふ理窟もなささうに見える。よし畫の方に趣味が走るにしても山水畫とか歴史畫とかを買つても濟みさうなものである。勿論レノルヅが肖像畫家であるからして注文するものも肖像畫を描いて貰ふのに不思議はないかも知れないが、問題を逆さにすれば、何故レノルヅが肖像畫專門家とも云はれる樣になつたのだらうともなる。私はこんな問題に答へる資格も義務もない。又誰だつて到底答へる事の出來ない問題かも知れない。然し此一節に於ても出來得るならば文學の方と幾分の關係をつけて見て、相互に共通類似の點があれば、異なつた社會的現象の底にも暗流が一つになつて彼我を貫いてゐると云ふ解釋が出來ると思ふ。少しコジツケになると思つたらあとから割引をして置けばよい。一體、畫で肖像畫と稱するのは文學に於て何に相當するだらう。寫實小說でもあるまい。（是は畫の方で云ふとホーガースの領分である。）歴史的ロマンスでもあるまい。（是は歴史畫に當たる。）古代の神話抔を題目とした詩でもなからう。（是はクラシカルな題目の繪畫に相當する。）するとレノルヅ抔が描いた肖像畫は文學で云ふと何に當たるだらうか。余の考へでは所謂性格描寫（Character sketches）に匹敵する者ではあるまいかと思ふ。Character sketches と云へば今でも通用する尋常の語の樣に聞こえるかも知れないが、昔はもつと特別な意味を有して居た。是は十七世紀頃から起つたもので、始めは僧侶とか教師とか云ふぼんやりした題目の下に、極く短かい敍述をしてゐた。固より類型以上に漠たるものであつたが、十八世紀になるとそれが段々に發達して來た。小說のやうに筋の立つたものでないにしても、兎も角短篇の中にある人物の性格を一寸畫き出す樣になつた。アヂソン、スチール抔が自家の雜誌上で得意に遣つた仕事の一分は此 Character sketch である。中にもアヂソンの作つたかのサー・ロジヤーの如きは今以て文學史上有名な人物となつてゐる。何故此意味の性格描寫が肖像畫に比較すべきものかと云ふと、御承知の通り肖像畫は現前の人を其儘にあらはすのが主であつて、モデル其物がある目的の方便に使用されるのとは大變趣が違ふ。其人が憂ひて居れば憂ひた樣にかけば好い。笑つて居れば笑つた樣に寫せば好い。そんな表情をされては此場合困るから、もう少し我慢して眞面目になつて呉れろと注文する必要も何もない。斯樣に描かるべき人物が僞らざる自己の表情卽ち性格の符徵を持つてくるのを、畫家の方では隨時に模寫するのであるから、所謂カラクター・スケッチと大變其揆を一にした所がある。此二者

が偶然併發したとすれば夫迄であるが、もし一代の好尚が根にあつて、其根から分かれて畫に入つて肖像畫となり、文にあらはれて一種の性格描寫となつたとすると、大分話が面白くなつてくる。私は單に自分の話を面白くする爲に必ずさうだと斷言する程の勇氣はない。けれども幾分かさうかも知れないと丈云つて、あとは諸君の研究と判斷に任せる迄にはして置きたい。然し大した思付きでもない。幾分の眞理があるにしても、たゞ夫限りの事である。甚だ淺薄の思付きであるとは氣が付いてゐる。

今一つレノルヅの畫が十八世紀の特色を帶びて居る事がある。十八世紀は一面にクラシカルな世である。フイールヂングやホーガースが出たにも拘らず中々約束的である。所が今云ふ肖像畫は決してクラシカルな題目ではない。レノルヅは此中間に立つて巧みに此二者を調和して彼の畫を時勢に應ずる程のクラシカルなものにしたのである。卽ち彼は彼の描く當時の人物を古代の人の服裝を着せるとか、又はもう一歩進んで之を上世の神に見立てるとかして、依賴者の請求に應じたのである。かの有名なるシドンス夫人が悲劇の女神として此畫家の手に不朽の芳名を垂れつつあるは洽く人の知る所である。是も時代の影響の一部として見れば見ることが出來ると思ふ。

最後にウイルソンといふ景色畫家のことに就いて一口御話しをする。此男は英國風景畫の元祖と云はれた人で、伊太利及び佛蘭西に遊んで大陸諸家の感化を受けたのださうである。尤もラスキンの評によると、此人の畫はプーサンやサルヴトル抔をもぢつた者に過ぎぬとある。御承知の

如く天然と十八世紀と云ふのは頗る興味のある問題で、十八世紀の詩を論ずる人は必ず十八世紀の詩人の天然に對する態度を批評するのが例である。余は一歩進んで詩中にあらはれた天然と此ウイルソンやゲーンズボローの畫いた自然を比較して見たらば、矢張り兩方共一樣な臭味に支配せられて居る事はなからうかと思ふ。然しながら余の如き淺薄な繪畫の知識では到底充分な御話しは出來ないから此位にして已めて置く。夫よりも他日もし機會があつたら、かの有名なターナーの山水と是等の諸家を對照して御覽になつたら非常に興味のある發見をせらるゝ事と信ずる。

四　珈琲店、酒肆及び倶樂部

此三つの者は大同小異であつて、何れも十八世紀の社會的生活に離すべからざる因緣關係を有して居る。社會的生活の上ばかりではない。文學にも直接間接に影響がある。是等の名稱は無論の事、其景況が文學書中に散見する事もあるし、又此等の建物へ文人輩が會合した事もあるし、そこで草稿を起したものさへある。第一に來る珈琲店と云ふのは、上下貴賤共に出入した所で、實際を云ふと、あながち珈琲を飲んだり、鑛泉を飲んだりする計りではない。そこへ行つてぶらぶらする、或は新聞を讀む、或は手紙を書く、或は今日の出來事を聞く、或はカルタを取る、或は政論をする。要するに甚だ輕便な所である。十八世紀に入つて二十年とならぬ中に、倫敦の珈

琲店の數が忽ち二千と云ふ數に達したと云ふのでも其盛大な事が知られる。

此等の珈琲店には夫々得意があつて是は坊主の行く所、是は町人の出入する所、是は法律家の贔屓にする所と、大抵は皆受持が極まつて居た樣である。文人におなじみのあつた内にはジョン軒、チャイルド軒、バットン軒、ウイル軒抔と云ふ名前がある。スチールの發刊した『タトラー』——御承知でもあらうが——を見ると毎號共に二三欄に分けた其一欄毎の上に「ホワイト・チョコレート店にて四月七日」とか「ウイルス珈琲店にて四月八日」などとわざ〳〵斷り書が付いてゐる。是は其欄に書いてある種が、此格段な珈琲店から出たと云ふ意味なので、是を見ても此珈琲店なる者が社會上どんな地位を占めて居たかが分る。スチールが『タトラー』の第一號に發刊の目的を述べた後にこんな事を書いて居る。

"All accounts of gallantry, pleasure, and entertainment, shall be under the article of White's Chocolate-house; poetry, under that of Will's Coffee-house; learning, under the title of Grecian; foreign and domestic news, you will have from St. James's Coffee-house; and what else I have to offer on any other subject shall be dated from my own apartment.

I once more desire my reader to consider, that as I cannot keep an ingenious man to go daily to Will's under twopence each day, merely for his charges; to White's under sixpence; nor to the Grecian, without allowing him some plain Spanish, to be as able as others at the

learned table; and that a good observer cannot speak with even Kidney at St. James's without clean linen; I say, these considerations will, I hope, make all persons willing to comply with my humble request (when my *gradis* stock is exhausted) of a penny a-piece; especially since they are sure of some proper amusement, and that it is impossible for me to want means to entertain them, having, besides the force of my own parts, the power of divination, and that I can, by casting a figure, tell you all that will happen before it comes to pass. ……"

（艶事、娯樂、人寄せに關する記事はホワイト茶店と題する欄内に收め候。その他詩文はウイル軒、學藝はグレシアン軒、内外の通信はセント・ゼームス軒とそれ〴〵部門を分かち候。其他の諸項に關する一切の話說は「自宅より」と題し申すべく候。

茲に再應讀者の御一考を煩はしたき事有之候。ウィル軒に參れば、參るだけにても二片を要し、ホワイト軒にては六片を要し候。また多少の黄白を懷にした上ならではグレシアン軒の學者方と席を共にして對等の御交際は出來がたく、垢のつかぬ白襯衣ならではセント・ゼームス軒にてキドネー（註、給仕の名）とすら言葉を換はしがたく候。氣の利きたるものを雇ひ入れて、是等の方面へ手配り致し候ためには上述の如き準備を要し候次第に御座候。從つて不肖遊資のつゞかざる曉には大方の諸君より一葉一片御助力を仰ぎたく、事實前陳の如くなれば、あながちに不法の御願にも有之間敷と存候。其代りそれ相當の御慰みは屹度提供仕るべく、それもた

だ御受合致し候などと弱い音を吹く丈には無之、否でも應でも御機嫌に叶ふやうになる深い因緣のある事に候。と申すは、實は不肖人間の天分以外に未前を豫知するの神通力を授かり居候故、一度天文を占へば前以て萬事の報道を起らぬ先に御覽に入るゝ位は容易の業に候。云々。）

まづ入場の時は一片を拂ふのが通則である。それから室内に入つて珈琲を飲めばまた一片取られる。その代り新聞は隨意に縱覽が出來る。手紙も珈琲店宛でやりとりが出來る。頻繁に出入する者はみな自分の席を持つて居る。アヂソンは殊にバットンと云ふ珈琲店へ行つたと見えて、茲に獅子口の信書函を備へつけて置いて、自分の編輯する『ガーヂアン』に投書せんとする者はこへ投函せよと斷つたのでも、如何に珈琲店に人の出入が繁かつたかが分る。前に引用した『タトラー』ばかりではない。アヂソンの發行した『スペクテーター』にも此珈琲店の事はよく出て居る。（閑があつたら二百六十九號及び四十九號等を讀んで御覽になるが好い。）ある人はベッドフォード珈琲店の事を書いて、其うちに斯う云つてゐる。——同店は

"was every night crowded with men of parts. Almost every one you meet is a polite scholar and a wit. Jokes and *bon mots* are echoed from box to box; every branch of literature is critically examined, and the merit of every production of the press or performance of the theatres weighed and determined."

（毎晩才名のある人が澤山集まつて來た。逢ふ人も逢ふ人も文藝上の學殖ある人か、隅へは

置けぬ通人であつた。《wit と云ふ言葉は十八世紀にあつて特別の意味を有つてゐる。かう云ふ言葉で一種の人間をあらはすのも自然の勢で、つまりはそんな人間が幅を利かして澤山都會に生息してゐたからである。此意味に於ける wit と云ふ字は當今は全く不用に屬して仕舞つた。今譯字に困つたからかりに通人として置いた。適切とも思はれない。此講義を進めて行くうちに眞の wit の意味が段々解つてくるだらう。》諧謔が百出する、機智を弄し合ふ。席から席、座から座へと響き渡る。文學の各方面を批評する。あらゆる出版物の功過を論斷する。開場演劇の是非を判定する。）

此有樣を遠くから見物すると大分面白さうである。中へ入つたら存外俗臭を帶びたハイカラの寄合で愛想をつかしたくなるかも知れない。日本には昔から是程な事はない樣に思ふ。こんな風にやつて居ると文學や何かは一種の刺激を受けて一方に發達する。其代り悉く囚はれて仕舞ふ。それは餘事であるが、前に一寸名前の出たセント・ゼームスと云ふ珈琲店も文學的に有名な歷史を有して居る。曾て茲に當時の名流が會した事がある。其内にはレノルヅやバークやガリックが居て各自にゴールドスミスと云ふ題で諷詩を作らうぢやないかと云ふ相談で、彼の田舍辯や一風流の癖を思ひ〳〵に咏じたのである。すると其次の會にゴールドスミスが出て來てかの "*Retaliation*" と云ふ詩を朗讀した。其中には、是等の人々を一々捕へて來て、滑稽的に嘲弄し返した所がある。

次に酒肆（tavern）の事を少し御話ししよう。是は字の示すが如く唯珈琲丈を飲んで雑談に時を移す簡略の場所ではない。飯を食つて酒を飲む料理店である。尤も現今使用する tavern と云ふ字を見ると田舎の安つぽい料理屋のやうな氣がするが、當時の酒肆卽ち十八世紀の所謂酒肆は特別の意味を有して居つた者と解釋するのが穩當である。偖この酒肆へも人が大分入り込んだやうに見える。ジョンソンは「酒肆の腰掛は人間の幸福の王冠なり」と云つた事がある。「適意なる酒肆又は旅館より受くる大幸福を、何人も此世に於て發見せる事なし」と云つたのも亦ジョンソンである。ジョンソンは料理屋が餘程好きであつたと見える。ジョンソンとかゴールドスミスとか云ふ連中は金さへあれば、こんな所へ入り浸りに這入り込んで呑み食ひに日夜を送つて喜んで居つた。之を他の言葉で言ひ換へると彼等は根本的に都市的趣味に渇仰してゐたと云ふ事になる。會食の有樣抔は珈琲店と大同小異だらうから略す事にして、一つ料理屋に特有な面白い話をして御仕舞にする。當時の料理屋の主人は客引と云ふ樣なものを雇ひ込んで、競うて客を呼び込んだのである。其樣子が一寸吾邦の宿引に似てゐる。此客引を「デコイダック」と云ふので、日本でいふと椋鳥をかける男と云ふ意味になる。其有樣を書いたものにこんなのがある。

"They are for ever establishing clubs and friendly societies at taverns, and drawing to them every soul they have any dealings or acquaintance with. The young fellows are mostly sure to be their followers and admirers, as esteeming it a great favour to be admitted amongst their seniors and betters, thinking to learn to know the world and themselves ..... In a morning there is no passing through any part of the town without being hemmed and yelped after by these locusts from the windows of taverns, where they post themselves at the most convenient views to observe such passengers as they have but the least knowledge of; and if a person be in the greatest haste, going upon extraordinary occasions, or not caring to vitiate his palate before dinner, and so attempts an escape, then, like a pack of hounds, they join in full cry after him, and the landlord is detached upon his dropsical pedestals, or else a more nimble-footed drawer is at your heels bawling out 'Sir! Sir! it is your old friend Mr. Swallow who wants you upon particular business.'"

（彼等は料理店に於て倶樂部とか懇親會とか云ふものを、いくらでも拵へる。さうして何かの緣があるか又は少しでも知り合ひであると、誰彼の容赦なく引つ張り込まうとする。年の若い者は自分達の先輩や自分達より地位の高いものの仲間入りが出來るのを榮譽と心得るのみか、世間を知り、かねて己等を知る便宜もあらうかといふ料簡から多くは彼等の門下生又は崇拜者となつて仕舞ふ。……朝、町を通ると、何處を通つても料理屋の窓から首を出してゐる奴がある。此奴が見張りをして、一面の識と云ふ名も下せない程な男でも往來を通り掛かりさへすれば、屹度大きな聲で呼びとめる。うるさく付け纏はる。もし其男が非常事件を抱へて急いで行

つて仕舞ふか又は晝食前に舌を汚すのが厭なので逃げようとでもすると、彼等は一群の獵犬の如く聲を揃へてわめき立てる。今迄脚氣患者のやうに構へてゐた亭主が重さうに飛んで出る。それでなければ足の利く drawer 《酒をはかつて樽から注ぐ男、日本なら料理番とでも云へばよろしい》が、旦那々々、御なじみのスワローさんが是非御目にかゝり度いと云つて待つて御出でです抔と大きな聲を出して追掛けて來る。）

最後に倶樂部と云ふのは別段獨立した建物がある譯ではない。上の珈琲店とか又は料理店へ時を期して會員が聚まる丈の話であるが、其數は非常な者で、毎夜澤山の會合があつた者と思はれる。調べて見ると倶樂部と云ふのは當時流行物で何でもかんでも倶樂部組織にした樣に見える。其證據には倶樂部の中には隨分妙な目的を有したのがある。「貴婦人抱狗倶樂部」（Lady's lap-dog Club）抔云ふ、名前からして奇妙なのがある。是は所謂通人とか洒落者とか云ふ連中が毎日午後集合して各自の服裝を比較し、新流行を考へ出してはやらせる爲の倶樂部であつたさうだ。夫から「花卉倶樂部」と云ふのがあつて、是は石竹や鬱金香の愛翫者の會で、雛菊の色變りを三時間も見詰めて居たり、十里も歩いて行つて花瓣の筋一本を珍らしがる樣な連中から成立して居た。夫からもつとも名前の振つたのは「ビフテキ莊嚴會」（Sublime Society of Beef Steaks）に「惡鬼會」（Pandemonium Club）抔であらう。文學史上に有名なのは「スクリブリラス倶樂部」（Scribleruς Club）である。是はスキフトがポープ、ゲーなどと共に立てた會である。惜しいこ

とに政治的黨派心の爲にしばらくして潰れてしまつた。スクリブリラスと云ふのは昔の誇學者であつて、此男が子供を教育する時は途方もない非常識な考を應用したものである。其子が成長して一角の人物になつて、頗る博識の譽はあつたが、其判斷は常に正鵠を失して其趣味は人をして恐れを作さしむる程に下劣であつた。會の名は此故事から出たもので本來の目的は庸愚な文學者を嘲笑するといふ質の好くない會であつた。然し決して政治的臭味は帶びて居らなかつたのである。夫から人のよく知つて居るのが「キットカット倶樂部」（Kitcat Club）で、是も其名の妙な點に於て決して二と下からぬものである。ある人の說によると、此會は始めクリストファー・カットと云ふ人の家で會したから主人の名に緣んで命けたのだと云ふ。クリストファーの短縮形はキットである、夫へ姓を加へてキット、カットと續けたのださうだ。同時に此男の製造した羊肉のパイもキットカットと云つたさうだ。此會には大分有名な人が入つて居つた。アヂソン、コングリーヴ、ヴンブルー、ガース、マルボロー、ロバート・ヲルポール等は皆會員であつた。此會は一千七百九年に四百ギニーを募つて喜劇の製作を奬勵した事がある。彼等は祝飲の盃に當時の美人を頌する詩句を彫り附けて美人に對する乾盃を擧げる時は必ず此盃を用ひたとある。

例のジョンソンはボズウエルの云へる如く倶樂部向きの男（clubbable man）であつて生涯中色色な倶樂部に關係した。彼の作つた辭書を見ると倶樂部の定義の下に「ある條件の下に會合する善良なる伴侶の集會」とあるのを見ても彼が倶樂部を如何に解釋したかが分る。ジョンソンの關

係した倶樂部の中で「倶樂部」後に「文學倶樂部」と云ふのがある。是は當時「王立協會」の會長であつたサー・ジョシュア・レノルヅの發起にかゝるもので、後には會員も大分殖えたが最初は會員を九名に限つたものである。レノルヅ、ジョンソン、バーク、ゴールドスミス抔は當初の會員であつた。後にはガリック、ギボン、ボズウエル抔も入會した。彼等は毎日曜午後七時には必ず寄つて晩餐を共にした後、文學、科學及び美術の談話に夜を更かすのを以て例として居つた。

五　倫　敦

次に倫敦市の事を一言述べようと思ふ。倫敦市は現今で人口五百萬、廣さから云つても市街の立派な事から云つても世界第一の都市であるからして、今から百五十年前も矢張り大同小異であらうと思ふのは大變な誤りで、當時の景況を調べて見ると存外野蠻なのに驚く事がある。今でも倫敦の町は巴里抔に比べると餘程不規則であるが、當時は今所ではなく曲がりくねつて甚だ見苦しかつたと見える。例の千六百六十六年の大火に燒け殘つた家が此處彼處に立つて居て、其最も古い者になると地震に襲はれた樣に時々往來へ崩れ出した事さへある。

夫から現今は何れへ行つても鋪石があるが、其頃は鋪石のあつた町は殆ど數ふる程しかない。そこで町人や商人が已むを得ず、自分の家の前丈を自己の費用で鋪石する。然しながら自分勝手にやる事だから石の大さも竝べ方も隨意である。大抵は石穴から掘り出した儘の丸石である。從つて町内中凸凹で、目を眠つて歩ける樣な所は一箇所もない。往來の眞中は穴だらけ、汚穢物だらけ又水溜りだらけである。往來の兩側には溝（どぶ）がある。是は雨さへ降れば流れ出す。天氣になると甚だ臭い。凡ての色、凡ての臭氣は皆此溝（どぶ）の中から蒸發する。こんな有樣だから出來る丈安全に通行しようと云ふのは、成るべく家の傍を歩くに限る。西洋の諺に人に道を讓ることを「壁を與へる」（to give the wall）と云ふが、今の倫敦では殆ど意味のない言葉で、又吾々日本人が聽くと全く了解に苦しむ俗語であるが、實はこゝいらから出て居るので、つまり往來で安全な方を人に與へて、自分が惡い方を選ぶと云ふ文字通りの意味から來たのである。スモーレットの『ハムフレー・クリンカー』（*Humphrey Clinker*）であつたか、さる男がさる婦人に對して「壁を與へなかつた、どうも無禮である」と云ふので、他の一人が大に怒つて其男に決鬪を申し込んだと云ふ話があるが、して見ると當時は此句もまだ實際の意味を有つてゐたものとも思はれる。今でも女と歩く時には内側の方へ女を入れるのが禮であるが、是は全く昔の習慣から出た者かも知れない。

夫から人道と車道を今では邊石（カーブ・ストーン）で區別するので、高さが一段（三四寸）違つて居るが當時はそんな設備はない。兩者を何で分けたかと云ふと、少し宛間を置いて柱（ポスト）を立てる。其間は鎖か何かで繋ぐのである。私が少時マコーレーの書いたジョンソンを讀んだら、ジョンソンには一つの

癖がある、柱から柱へ必ず手を觸れて歩くと書いてあつた樣に記憶するが、其時私には何の柱だか分らなかつた。郵便函にしては少し可笑しいと思つて居たが、今考へると此柱のことだらうと思ふ。

當時商店などでは成るべく大きな、華やかに色彩をした看板を掛けたものださうである。是が風が吹くときなどはぎい〳〵と鳴つたと、わざ〳〵書物に斷つてある位だから餘程鳴つたに違ひない。夜に入つても今の樣に瓦斯や電燈は無論ない。たゞ今の日本の軒先へ立てる樣なランプで薄暗く照らされる。ブリキの壺へ鯨の油を入れて是に綿の心を入れたものである。是も數が不充分であるのみならず、油が不充分なので、少し夜行でもしようと云ふ時には提灯持を連れて歩いたものである。提灯はリンクと云つて日本の松明に似た者であつた。夫を持たせる人足は今日の車夫や昔の駕籠屋の樣に雇ひ入れるのである。しかも甚だ不用心極まつたもので、此提灯持がよく盜賊抔と示し合はせて、いざと云ふ場合には火を消して影を隱す抔と云ふ話は珍らしくない。泥棒の提灯持とは是から出たのかも知れない。

日本で御一新前にあつたと云ふ辻番の樣なものがあつた。（巡査ではない。）ウオッチマンと稱する奴である。是は矢張り番太郎の如く貧乏人から募集した者で、六尺棒を突いて夜中巡回して歩く。日本では「火の用心」とか何とか云ふのだが、倫敦では時刻を報じながら又天氣模樣を怒鳴りながら歩いた。「十一時すーぎ雨ふーりの夜ー」と云ふ樣な事を申しながら町内を廻つて來る。番太の小屋は極く小さな箱小屋で、交番よりも小さかつたと思はれる。時々いたづら者が居つて、辻番が居眠りをして居る所を見濟まして、箱ごとひつくり返すと云ふ樣な騷ぎが起る。最も驚くべきのは町内の小路抔に豚を飼つて居たと云ふ一事である。町の内を豚がのそ〳〵横行する景色抔は今の倫敦に住んでゐては到底想像の出來ん光景である。

町を歩くには日本の昔と同じ樣に一種の駕籠が有つた。是は轎椅子（セダン・チエーア）と云つて駕籠舁が二人棒を二本通して手で荷ふ樣に出來てゐる。轎椅子の屋根は、自由に開けたり閉てたりする仕掛である。中は天鵞絨とか繻子とかで張り詰めた頗る美しいものである。此駕籠は佳人才子が芝居へ行くとか遊山に行くとか云ふ時に用ひた、まあ頗る上品な氣取つた乘物になつてゐた。此外にまだ貸馬車がある。是は今の車夫の如く辻々に客待ちをして居つた。之は四人乘りの二頭立の馬車である。頗る古くて危かしげなのが多いさうであつたが、賃銀は一哩一志だから左迄高價ではない。

斯の如き體裁であるから警察權の行屆かざる事は無論の事で、倫敦の或一部は丁度今のイースト・エンドの如く泥棒、掏摸、其他の兇漢の巢窟で、彼等は何等の束縛もなく此處彼處に潛伏して兇行を働いて居た。千七百二十六年にハーボロー伯と云ふ人の轎輿がある日の午後（夜ではない）泥棒の爲に途に擁せられた事がある。而も泥棒が出たのはピッカヂリーといつて今では倫敦の最も賑やかな場所で、其頃でも決して淋しい所ではなかつた。矢張り其頃の話であるが世間がこんなに物騷であつた爲、或女は轎に乘つて財布を二つ用意してゐた。若し泥棒が出て來たら小

錢の入れてある奴を與へて興を急がして歸ると云ふ趣向であつた。日中ですら此通りであるから夜間にあつては全然無警察と擇む所はなかつたらう。シエンストーンと云ふ詩人が一千七百四十四年に友人に與へた書中に、斯う云ふ節がある。

"London is really dangerous at this time: the pickpockets, formerly content with mere filching, make no scruple to knock people down with bludgeons in Fleet Street and the Strand, and that at no later hour than eight o'clock at night. But in the Piazzas, Covent Garden, they come in large bodies armed with *couteaus*, and attack whole parties, so that the danger of coming out of the play-houses is of some weight in the opposite scale, when I am tempted to go to them oftener than I ought."

(近頃は倫敦も誠に危險千萬に候。從前はたゞ竊盜を以て滿足致し候掏摸ども今は公々然として、フリート街及びストランド附近にて、棍棒にて行人を打ち倒し候。而もほんの宵の口の事にて八時廻るか廻らぬかの刻限に御座候。のみならずピアザ及びカヴエント・ガーデン抔にては皆々合口を用意致し、數多相率ゐて、團體を强迫致候。夫故芝居抔も、たまさかなれば格別の事、あまり度數重なり候節は、却て芝居小屋より出て家に歸る際の危險を思ひ躊躇致す位の者に候。)

ケンシントン、(其頃のケンシントンは今のやうに町續きで行かれる所ではなかつた、)其ケンシントン抔へ遊びに行つて少々遲くなると矢張り歸りが物騷なので、日曜の晩には必ず號鐘を鳴らしたものである。是は其處等に散つてゐる遊人が一團となつて泥棒の襲擊に對する丈の頭數を揃へて都に歸る便宜を計つたものであるさうだ。ジョンソンの書いた『倫敦』と云ふ詩に、

"Prepare for death, if here at night you roam,
And sign your will before you sup from home.
Some fiery fop, with new commission vain,
Who sleeps on brambles till he kills his man;
Some frolick drunkard, reeling from a feast,
Provokes a broil, and stabs you for a jest.
Yet ev'n these heroes, mischievously gay,
Lords of the street, and terrors of the way;
Flush'd as they are with folly, youth, and wine,
Their prudent insults to the poor confine;
Afar they mark the flambeau's bright approach,
And shun the shining train, and golden coach."

(夜中の外出は死ぬ覺悟でなくては出來ない。だから外で晩飯でも食はうと云ふ前には屹度

遺言狀を認むべき事である。この頃漸く小役にでも有り付いたと云ふ大得意なハイカラが酒亂の體で草の上などに寢そべつてゐて、相手が來ればいつでも刃傷に及ぶ。でなければ、御馳走酒に盛り潰され損なつて、足元のあやしい手合が出合頭に喧嘩を吹き掛ける。さうして屁でもない事に命の取り遣りを始める。斯んな有樣である。

然し是等の英雄も——路上の御大將、街頭の厄病神、馬鹿と無法と、若年と酒の氣で逆せ返つて、惡いたづらを得意がる是等の英雄も、其實中々狡い所がある。貧乏人や弱いものと見ると、てんから侮つて凌辱を加へるが、いざ向うから明るい松明の火が見えたとなると、早速逃げ出して仕舞ふ。貴人の馬車、富者の供揃ひ、——是等には決して掛からない。）

是は泥棒の事ではない。又倫敦の眞中の事でもない。然しいくら場末だつて、飛鳥山だつて、普通の人間の惡戲がこの位だとすれば、本職の橫行は思ひやられた次第である。

六　倫敦の住民

倫敦の住民の上層は開化して富有であつた。商人も之に次いで開化して居つた。下等社會に至つては野蠻である、殺伐である、俗惡である。品格の點に於て上下の區別が甚しいのみならず、同じ倫敦中でも所によつて氣風が大に異なつて居つた。是は今のやうに電車とか鐵道馬車とか汽車とか云ふ輕便な交通機關が備はつてゐなかつた爲で、一端から一端に行くのに大層億劫であつたからである。そこで日常彼等はどんな事をして暮らしたかと云ふと、シドニーと云ふ人の『十八世紀に於ける英吉利』と云ふ書物（是は此講義を作るに大變參考になつた書である。序を以て著者に謝意を表して置く。）にこんな事が書いてある。

"Roughly speaking, a fine gentleman of the Georgian era ordinarily began the day about ten o'clock in the forenoon by a general reception of visitors in his dressing chamber; having first fortified himself for that arduous task by swallowing a cogue of Nantsey. When the last batch of callers had taken their departure he rose and placed himself under the superintendence of his valet for about two hours. Now was brought into requisition his extensive assortment of perfumery—oil of Venus, spirit of lavender, atar of roses, spirit of cinnamon or eau-de-luce—among others—with which the various articles of attire were severally and carefully sprinkled. Then, as now, there were in vogue certain sweetly-scented soaps which were largely patronised by fashionable beaux, and with a cake of one of these he freely lathered his hands and face. He next dabbed his face with scented powder till it was as white as that of a miller, and plastered his hair with scented pomatum, and having perfumed his pocket-handkerchief with rose or jessamine water, tied his cravat and adjusted his periwig, he finally sat down to dine about

three, either alone or in company with his friends. The repast concluded, he buckled on his sword, brushed his hat with great care, gave it the 'cock,' placed it with much ceremony on his head, and for a brief space surveyed himself in the mirror. When quite satisfied with his appearance the beau took up his cane, ordered a sedan-chair, and proceeded in state to some coffee-house in the neighbourhood of St. James's (generally White's), where for about an hour he aired his political views, or tickled the ears of the company with choice samples of his wit and pleasantry, intermingled with jests from the newest play or the gist of the latest scandalous story that had been circulated. Then this 'killing creature,' having first smeared his upper lip with snuff, hailed a chair and was borne along to the door of the playhouse, where, instead of attending to the performance (his mind would have recoiled with horror at the thought!), he wandered from pillar to post, now laughing and chatting with his friends, and then pulling out by turns his watch and pocket-handkerchief. When the play concluded the beau usually repaired either to the coffee-house or to the residence of some boon companions, with whom he spent the remainder of the night, lending a hand at crimp, ombre, loo, or whist, over bowls of punch and bottles of claret, until the small hours of the following morning — not unfrequently being conducted reeling home by a friendly watchman, bribed with sixpence for the purpose."

（極くざつとした所を話すと、ジョーチ期の歴とした紳士の生活は先づ、毎朝午前十時に始まると云つて好からう。彼は此刻限になると自分の化粧部屋で訪問者を引見する。紳士に取つてはそれが隨分と骨の折れる大仕事なので、彼はあらかじめ元氣を付ける爲に cogue of Nantsoy を飲む。《何を呑むのだか私には分らない。》それで來客が一同引き取ると、彼は起つて御化粧を始める。物の二時間は全く召使（ワレー）の自由になる。其時使用する香水香油の類は夥しいものである。ヰーナス油、ラヱンダー水、薔薇の atar《不明》、肉桂水、又はオー・ド・リユス等で、是を一々衣服持物に振り懸けるのである。夫から顏と手を洗ふ。當時にも今のやうな好い香のする石鹼があつた。次に白粉を塗る。粉屋の主人よろしくと云ふ色になる。髮に油をつけて、てら〳〵固める。夫から薔薇水又は茉莉水を手巾（ハンケチ）へ振りかける。襟飾を結ぶ、鬘を被る。此化粧が濟んだ所で、漸く晝食をやる。時刻は午後三時頃である。御相伴のある事もあるし、獨りの時もある。食事が濟むと、劒を下げて、丁寧に帽子の塵を拂つて、cockをつけて、《註、cockと云ふのは廣い帽子の緣を二三箇所つまんで、帽子の山へぴたりとつけることを云ふので、其つけ方に色々の流行があつた。あとで御話しをする機會があるかも知れない。》勿體なさうに之を頭に戴いて、それから姿見の前へ立つて、自分の姿を一應眺めて見る。眺めて見て、是で滿足だと云ふ段になると、彼は杖を持つて轎椅子（セダン・チエヤー）を命じて、威風堂々と珈琲店へ行く。場所はセント・ゼームス宮庭近くにあるのを擇ぶ。大抵はホワイト軒である。此珈琲店で約一時間

も政治上の話やら、冗談やら笑話やら、新狂言の評判やら、三面種の風聞やらをし盡くすと、女殺しの先生、上唇へ嗅ぎ煙草を塗つて、再び轎椅子を招いで此所を出る。行く先は劇場である。劇場へ行つても眞面目に演藝を觀る氣は丸でない。《本氣の見物は考へても竦(ぞう)とする位である。》只彼方此方とぶら〳〵する。友達をつらまへて話す、笑ふ、手巾(ハンケチ)を出す、時計を見る。時計を見る、又手巾(ハンケチ)を出す。芝居がはねると珈琲店に行くか、道樂仲間の家へ行つて、骨牌を弄ぶ。――クリンプ、オムブル、ルー、ホイスト、何でも御座れである。其上バンチを鯨飲(あは)つて、クラレットの壜を空(から)にして、二時三時頃迄も夜更しをする。歸りにはひよろ〳〵して、夜番の御情で自宅迄送り屆けて貰ふ事も珍らしくはない。六片の心付けは無論の事である。)

此生活狀態は固より人によりて多少異ならねばならぬから其積りで讀まなくては不可ない。此文中に ぼー beau とあるのは十八世紀の通語であつて、先づ日本の通人とか粹人とか、若旦那とか、凡て金があつて身分が善くて、のらくら暮らして居る連中と思へば間違ひはない。尤もボーにも色々ある。bloods（少々遊び人の風を帶びた者）frolics（是は辻番などにいたづらをする者）又は macaronies（外國の流行を無暗に輸入した者）抔と色々の種類に分かれる。其中には隨分奇拔な事をやるのがある。或時連中が寄つて、婦人の靴を煮て食つたに至つては既に奇拔の域を通り越してゐる。其顚末を御話しすると。或時ボー連の懇親會があつた時に、何かの都合で一人の美人が列席して居つた。するとボーの一人が女の靴を片足脫がせて夫へシャンパンを注いで其女の爲に祝盃を擧げた。そこで今一人のボーが、なんの是しきに負けるものかと、忽ち給仕に向つて此靴を料理して持つて來いと命じた。給仕は眞面目な顏をして命の如くにした。其時彼は靴の上部（繻子か何かで出來て居る）を引きちぎつてラグーの中に交ぜた。それから底は賽の目に、踵は薄い切り身にしたもんだ。夫をバターでフライにして皿に盛つた。一座の面々はうまい〳〵と云つて之を食つたと云ふのが御仕舞である。

男の方はざつと斯んなものであるが、女の方はと云ふと、身分のある者は矢張り何も仕事がないからして、日本と同樣遊んで暮らした者だ。當時「印度店」India shops と稱して現今の勸工場の樣な者があつたが、貴夫人は先づそんな處へ這入り込む。夫から轎輿へ乘つて芝居かオペラ抔を見に行く。夫に飽きると家へ歸つて茶を飲む。夫からカルタをやる。カルタは十八世紀に非常に流行した者だが、殊に婦人は何も用事がないので、カルタ計り遣つて居つたらしい。是は重に婦人だけで男を交へずに遣つたとある。元來十八世紀の男は餘り婦人と交際をしなかつた。たまたま婦人に接近すれば藝者女郎のやうな身分のもの計りを相手にして居つた。夫だから儼然たる宴會抔で男子と女子と席を竝べると何も談話がない、御互に手持無沙汰である。ウオルター・ベザントの言によると、斯うである。

"Ladies, chiefly without the company of gentlemen, played cards every evening. The lives of ladies, indeed, were so monotonous and dull that the excitement of cards became necessary for

them. A great lady had none of her husband's company except perhaps of dinner; he had his own pursuits, his own friends, often his mistresses as well; he was drunk most nights. The lady, for her part, had no intellectual resourses whatever: she read no books; she knew nothing that went on, and cared nothing; her maid dressed her; she had a carriage and four horses—her running footmen before, her hanging footmen behind; she had her town and her country house; her nurse looked after the children; her life was that portentously dull kind of life in which everything is provided and there is nothing left to desire." (*London in the 18th Century*, pp. 280–1.)

（婦人は婦人丈で毎夜骨牌を取る。《夫が遊んであるくからである。》婦人の生涯は無味單調で骨牌の刺激さへ必要と感ずる程である。貴婦人になると晝食の外は夫と同居する機會がない。夫は夫の道樂がある。友達がある。妾もあるかも知れない。毎晩醉拂つてゐない事はない。婦人は婦人で又精神上の保養が丸でない。書物を讀むではなし、世間にどんな事があらうと、知らうぢやなし、構ふぢやなし、召使から着物を着せて貰つて、四頭立の馬車に乘つて、別當を前に走らして、從者を後ろに立たして、本邸と別宅を有つて、子供は乳母に世話をして貰つて——萬事意の如くに行つて、欲しいものを考へ出すのに骨が折れる程に、又先が案じられる程に興味のない生活である。）

斯の如く無學であるから人の前で學問上の談話抔は到底出來ない。加之婦人の癖によく egad! 抔とやつたものである。或書に一人の婦人が無暗に此べらんめい調をやるので、始めてあれは貴夫人だと覺つたと云ふ事が書いてある。

女に少々學問が出來て、幾分か六づかしい談話に口を挾む樣になつたのは十八世紀中頃以後の事である。夫の「青靴下」と云ふ字は此時代から始まつたのである。此「青靴下」の隊長はモンタギュー夫人であつて、當時の婦人の馬鹿で無學なのを慷慨するの餘り率先して精神的修養を奬勵したのである。千七百五十年に始めてカルタなしの伴侶を組織した。成るべく男子に愚弄せられない樣にと奮發した。

以上は上流社會一般の景況である。中流の市民に至つては先づ家族と食事を共にした後、十時頃から各自行きつけの珈琲店に至つて煙草を飲み珈琲を喫し、雜誌類を讀む。『デーリー』『パブリック』『レッヂアー』『クロニクル』の類である。夫から家に歸るか又は仕事を處理する。午後二時には Change（取引所）に行つて二時間程はこゝで潰す。それから四時になると dinner を食ふ。dinner を食つたあとは散歩とか娯樂とか朋友と會合するとかで日を暮らす。

それから一般の人の特性を擧げて一言に御話しをすると、(一)野卑。(二)酩酊。(三)賭博。(四)決鬪。

(五)服裝の不自然なる事等である。

(1)野卑なること。Coarse と云ふ英語を日本の書生は普通唯亂暴粗野の意味にとるが、英國でコースと云ふと、重に卑猥に涉る虞れのある言動ことに言語を指すのである。こゝにコースと云

ふのも重に其意味で云ふ。で此十八世紀は其歌でも會話でも脚本でも到底今の人の口にする能はざる様な猥褻な事を平氣で述べたものである。丁度徳川時代の風俗と似て居る。又現今の日本の或社會の有様と似て居る。十八世紀の始めの頃行はれた脚本は重に王政復古の脚本と稱するので、其王政復古の脚本は風教上頗る宜しからぬ者であつた。小説を讀んで見ても隨分可笑しいと思ふ様な事を臆面もなく記載して居る。前に御話しをしたホーガースの『前』と『後』と稱する銅版の如きは其好例である。一寸した例が、「ガーヅ・ヅ・メス」（ガードは兵隊の一種、メスは兵隊の會食をするときの總人數）が晩餐を了へた後一人殘らず、「セント・ゼームス」邊の或女郎屋か何かへ行つたと云ふ事がある本に書いてあるさうである。又ある婦人は好んでジョンソン博士を招待したが、其理由は自分の亭主や其朋友が自分の前で聞くに堪へぬ猥褻な言語を弄するのでジョンソンが來ると皆遠慮して丁寧にするからであつたさうだ。尤もこんな習俗は現今の日本の狀態に照らして餘り不思議な事はない。隨分吾々の目擊し得る範圍内に於て起り得る事實であらう。又二十世紀の今日に至つても英國人は歐洲中で一番品性が高いとか稱せられて居るにも關せず、其内幕は矢張り十八世紀と別に異なる所もないだらうと考へらるゝ。唯公然こんな事をやるのと世間へ對し少々憚ると云ふ丈の差であらう。ウオルター・ベザントは宴會の時に酒客が女郎抔の爲に祝盃を擧げると云ふ一事に大分驚いて居るが、そんな事は驚く價値のある事だか何だか分らない。兎に角現今の英國人が驚くのだから現今の英國人はそんな事はすまじきものと心得て居るの

だらう。して見ると十八世紀と二十世紀の間には此野卑と云ふ點に於て少なくとも表面上大變な相違がある。

これには大分原因があるであらう。元來物の變化するには内部から變化するのと表面から内部へ食ひ込んで行くのとの二筋がある。表面を作る者を世人は僞善者と云ふ。僞善者でも何でもよい。表面を作ると云ふことは内部を改良する一種の方法である。是は日常の實驗でよく分る。表面を作ると云ふ事は、作りたくはないのだけれども、外部の壓迫の爲に已むを得ず體裁を作るのである。此體裁が百年も二百年も永く續くと、之が缺くべからず又犯すべからざる形式となる。舊幕時代に武士が金を輕蔑した様な者である。從つて二十世紀の英國人が僞善者だからと云うて之を攻擊する氣はない。寧ろ僞善者になつて表面上から正すのは、正す氣がないよりはよいかも知れぬ。それでは内部から正すのは不必要かと云ふにさうではない。必要かも知れぬ。然しながらこんな事は内部から正せる譯の者ではない。人間の性は古今東西野蠻も開化もこんな事に關すると區別はない位のものである。從つて内部からは容易に矯められない。内部から矯められなくて而も弊害のあることは仕方がない、外部から壓迫を加へるのみである。現代の英國人は此壓迫を最も强く感じて居るのである。從つて上品に見えるのである。偖此一事に關してかゝる壓迫を加へる必要があるかないかと云ふと、それは大に議論をする餘地があると思ふが、今はそんな事を云ふ場合でもなく、又深く考へても見ないから云はない。ともかくも野卑と云ふ事が惡い事な

らば、現今の英人のやり口は當を得て居るのだから日本人も眞似をしたら善からうと云ふ迄である。

ウォルター・ベザントと云ふ人は此野卑の原因は男女の交際がなかつたからだと解釋して居る。其言を一寸引用して見ると、斯うである。

"Yet we must not exaggerate. These things belong to the men. They were tolerated and welcomed because the men for the most part kept their own society to themselves apart from the women. They passed, every day, many hours at the tavern, the club, and the coffee-house. The surest and the shortest way to make men brutal is to separate them from the women. I dare say that the poor ladies of the time had much to endure, and constantly heard things which should not have been said. Remember, however, that ladies of the present day must hear things bawled aloud in the street which ought not to be said in their hearing. What happens? They do not hear them; they not only make as if they do not hear them, but the words pass through their brains as a disagreeable object passes before their eyes, making no mark and disappearing. I say that the coarseness of the period was mainly caused by the separation of the men from the women in their natural amusements. It is nothing to the point that there were assemblies, gardens, and places of meeting; the fact remains that the national habits kept the great mass of the men apart from the women every evening in their taverns, coffee-houses, and clubs, and that this separation caused a great deal of the common coarseness. This position is proved by one fact. When the taverns and coffee-houses ceased to be the resort of the better class; when merchants, lawyers, and responsible persons generally, left off frequenting the tavern; when they began to spend the evening in their own homes and in the society of their wives and daughters, — then language purified itself, stories and jests previously laughed at became impossible, the old ribaldry disappeared and found shelter in holes and corners, and society, from the highest to the lowest, became distinctly cleaner and purer in language. I believe, too, under the new influence of women, that it became cleaner and purer in reality. It is true that life became also much duller. The life of the bourgeois suburban resident, the man who goes to a dull, though innocent, home every evening all the year round, is infinitely more dull and monotonous than that of his great-grandfather, whose evenings were spent at the tavern, where every day there was something new said or told, and some new jest to hear." (*London in the 18th Century*, pp. 276–7.)

(然し無暗に言ひ過ぎると弊が出る。今述べたのは男子に就いて述べたので婦人は預かり知らずと云つても差支ない。男子は大抵、婦人と別々になつて、男子のみ集まつてゐたから、こ

んなことも苦情が起らずに濟んだのである。否寧ろ歡迎されて居たのである。男子となると毎日料理屋や倶樂部や珈琲店に行つて數時間も過ごした。所が男子を尤も獸的にする最捷徑兼最良法は女拔きの野郎頭を揃へるに限る。だから先生方があゝ亂暴になつたのである。尤も當時の婦人だつて、男のために隨分つらい辛棒もしたらうし、又聞くに堪へぬ言葉を男から聞かされた事もあつたらう。けれども斯う云ふ事は記憶してゐないと間違ひになる。――今日の貴婦人だつて、往來では隨分如何はしい言葉を耳にしない事は有るまい。それぢや今の婦人はどうする？唯聞かない振をしてゐる。唯聞かない振をしてゐるのみならず、聞いた後はすぐ忘れて仕舞ふ。丁度表をあるいて不快なものを見た時と一樣の結果になる。だから其點に就いては當時の女と今の女と別段の相違はないと見て差支あるまい。で今申した通り當時の卑猥な風俗の原因はと云へば、全く野郎が野郎でかたまつて仕舞つて、兩性に尤も自然な娯樂を女と共にしなかつたからだと斷言する。當時だつて集會や、公園や、その他寄り合つたり、落ち合つたりする場所があつた抔と辯解したつて何の役にも立たない。事實は依然として故の如くである。卽ち――英國一般の習慣として、多數の男性が婦人を置き去りにして、酒肆、珈琲店、倶樂部に夜を過ごしつゝあつたのだから仕方がない。さうして此男女の隔離が一般の卑猥なる風俗の大原因であつたのだから仕方がない。余の言の嘘でない證據には、上流社會が料理屋や珈琲店に遠ざかる樣になつてから、紳商、辯護士、其他の責任ある人物が茶屋酒の味を忘れる樣になつてから、彼等が夜々自宅で細君令孃を相手に大人しく時を過ごす樣になつてから、彼等の言葉は漸く純潔になつたのである。以前は遠慮もなく高笑ひをして打ち興じた冗談も御話しも到底人前を憚つて出來ない樣になつたのである。舊時の卑しい滑稽は此時から影を藏してどこかの穴の隅へ這入つて仕舞ふと共に、言葉使ひの點に於て上層下層共に通じて綺麗に上品になつたのである。言葉の末ばかりではない。女性の新感化の爲に生活の內實迄も綺麗にかつ上品になつた者と信じて疑はない。其代り世の中が詰らなくなつたのも事實であらう。山の手に住んでゐる中流社會の主人は、毎夕無邪氣かも知れないが無味索然たる家庭の人とならなければならない。所が曾祖父の事を考へて見ると、夜は必ず御茶屋で暮らして、面白い話の一つや二つは屹度聞けたんだから、自分の生活は大變單調で非常にくさ〳〵するに違ひない。）（『十八世紀に於ける倫敦』二百七十六―七頁。）

ベザントの論法によると、男女交際の開けなかつた時は人間が野卑であつた。男女交際が開けてから人間が開化した。夫だから男女交際をすれば人間は開化すると云ふ三段論法になる。此事實があれば必ず此結果に到着するとは云へない。事によれば全然誤つて居るかも知れぬ。然し之を穿鑿するのが此講義の目的でもないから、別段立ち入つた詮議はしない積りである。若しベザントの解釋が正鵠を得たものとすれば、日本の現代の風敎云々を口にする人は參考にしたらよからう。日本の社會はある方面に於て、又ある意味に於て疑ひもなく野卑である。又男女交際と云

ふ事が成立して居ない。又進んで男女交際などをやる女のうちには男よりも反つて野卑なのが居るかも知れない。良家の妻女でエライ事を平氣で言つて居るのもある。單に男女を接近させる丈で此弊が救へるならば、遣つて見たら宜しからう。

(2)酩酊。當時の人間は頗る酒食ひ(さけくら)であつた。必ずしも下等社會に限つた事ではない。ポリンブローク卿抔は夜通し飲みつゞけて、明くる日役所へ出勤するときには濡手拭を頭へ卷きつけて事務を執つたと、ちやんと歴史に書いてある。シエリダンとかピットとか、フオツクスとか云ふ連中は一度に葡萄酒の壜を六本づゝ空けたとの話だ。いくら西洋人が酒が強いと云つても現今の人は是程は飲めないさうだ。當時の政治家や何ぞが統計上長壽を保たなかつたのは全く飲酒過度の爲だと云ふ人さへある。上流ですら斯うだから下層社會に至ると、無論激烈極まつた者である。かの gin と稱する酒が此仲間うちに流行り出したのも全く此世紀の始めからである。尤も是は外國から輸入した酒である。此酒が倫敦の下層社會に突然と大勢力を振ひ出して、彼等は遂に gin 狂とも云ふべき一種の病氣に罹つた。ホーガースは『ビール街とジン小路』と云ふ繪を畫いて其景況を今日迄傳へた位である。需要が斯うだから酒鋪は次第に增加する。遂には五六軒に一軒位の割で町内に幅を利かせると云ふ始末になる。飲む奴は一片で醉ふ、二片で寐る。酒屋には臺があつて其上に乘つてぐう〳〵寢るやうな仕掛に出來てゐた。勞働者は夫婦共子供達を抛り出してジン屋へ這入り込む。腹掛のかくしに錢が見當たらないと道具一切手當り次第に賣り飛ばして迄

醉つ拂つて見せると云ふ有樣である。仕舞には政府でも大に驚いた。已むを得ず法則を發布して、ジンに多額の稅を課して、貧乏人どもが容易に飲む事の出來ない取締法を設けた。

宴會の時などでも今日と違つて、大分亂雜であつたらしい。骨抔を手で取つてピチャ〳〵しやぶつたと云ふ。夫から一つ皿の肉を二人も三人もで、互に切つて食ひ合つた事もあつたので、ある時さる男が鷄を切つて、わが分を盛り分けようとしたら、つい他(ひと)の指迄切つて仕舞つて、しかも御丁寧に之を自分の皿の中に持つて來たと云ふ話さへ傳はつてゐる。

(3)に出るのは賭博である。此賭博的(ガンブリング)傾向は英國人特有の性質であつて彼等は毫もこれを惡德と考へて居なかつたのである。否現今でも惡德と考へて居らぬ者が大分ある。昔『ポカー・オブ・ウエークフイルド』と云ふ書物を始めて見たら、プリムローズ博士と云ふ上品な人が錢を賭けてカルタをやる事か何か書いてあつたので驚いた事がある。然し漸々西洋の事情、英國の有樣を知るにつけ是は普通の事であると思ふ樣に至つた。曾て或書物を讀んだら、英國人と佛國人が邂逅して會話をするときに、英國人が二言目には必ず「賭けをやらう、屹度さうだ」「いくら賭ける、屹度さうでない」抔と丸で賭氣違の如くに騷ぐ所が書いてあつた。是は勿論英國人を嘲笑した者である。して見ると英國人は外國人(西洋の外國人)から嘲弄せらるゝ位の賭博好きなのかも知れない。尤も英國人が出て來てさうでないと主張すればすぐ撤回してもよろしい。偖此賭博的傾向は十八世紀にあつて殊に甚しかつたのである。英國人自身が甚しいと自白する位だから餘程激

しかつたのだらう。トリエリアンと云ふ人の『中年以前のフォックス』（八十九頁）にはかうあるさうだ。

"Society was one vast casino. On whatever pretext and under whatever circumstances half a dozen people of fashion found themselves together — whether for music, or dancing, or politics, or for drinking the waters or each other's wine, — the box was sure to be rattling, and the cards were being cut and shuffled."

（社會全體が一大賭博場の觀をなしてゐた。奏樂の爲でもいゝ、舞踏の目的でも構はない、又は政談の主意でも差支ない、其他鑛泉を呑むとしても、葡萄酒を飲むとしても、何でもいゝ。如何なる事情、如何なる言辭の下にでも、五六人の當世男が寄るとすると屹度賽壺がから〳〵鳴り出す。骨牌を切る音がする。）

博奕もある程度を超えれば娯樂の域を脱して狂亂の世界に入る。十八世紀の人々が一擲の勝負に賭した金高は非常な者である。デヴンシャア公は此道樂の爲にレスター・アベーの不動産を悉く取られて仕舞つた。ある人は一度の勝負に五萬磅を賭けたと云ふ。サー・ジョン・ブランドと云ふ國會議員の負け高は凡て三十二萬圓になる。尤も其外に一文もなかつたさうだ。其他に丸裸になつたり自殺をした者は頻々ある。千七百七十五年にマウントフォードと云ふ貴族が短銃（ピストル）往生を遂げた。翌年にジョン・ダマーとかデマーとか云ふ男が矢張り前同樣どんと死んで仕舞つた。

其時彼は二十三歳であつた。其他乞食同樣になつた者は無論夥しい數である。然し乞食になつたり自殺する前には大抵借金をするのが人情だから、多くの人、殊に若旦那と云ふ樣な手合は皆高利貸の爲に苦しめらるゝ樣になつた。此賭博と云ふ一種の娯樂は英國全體の氣風なのだから、唯男子のみが耽つたとは限らない。女も大に肌抜ぎ向う鉢卷で遣つたものである。始めのうちは夫から供給を受けるが、小使がなくなつて愈始末に終へなくなると、止むを得ず指輪、胸飾、腕輪一切の裝飾品を七つ屋へ曲げ込む。中には不正手段で當の敵を瞞着した女さへ出來た。

例のホーガースは『ホワイト倶樂部の賭博』と云ふ畫題で、其猛烈な體たらくを今の世に傳へて居る。其畫を見ると亂暴でもあり、狼藉でもあり、又笑止でもある。眞中に狂氣の如く拳を握つて、憤悶の極鬱を振り落とした男がゐると、其隣りは之とは反對で、帽子で顏を藏した後悔の體である。解題者の言葉によると、相續したての現金を懷に、運命を一擧に決しようとして、からりと目算が外れたのださうだ。其傍に貴公子と見える程な立派な人物が、悉く財布の尻をはたき盡くして、高利貸を眼の前に、借金の證文を書いて居る。奥の方には負け腹を立てて拔刀の上相手を刺し殺さうと息捲いてる奴がある。夫に外の者が仲裁を入れて居る。みんな一六で夢中になつて居る内に、何かの過失で洋燈でも引繰り返したものと見えて、火が天井へ燃え移つて既に大事に至らんとして居る。消防夫が一人戸を排して飛び込んで來る。ざつと斯んな圖である。

(4) 決鬪。十八世紀には決鬪が大分流行したものだ。是は今迄御話しをした倫敦の情況を綜合し

て考へて見ると尤もの事と推察せられる。第一倫敦の町は物騒である、辻番は殆ど役に立たない。兇漢は何の憚りもなく自由に横行する。身分のある者でも時と場合によると、身分にあるまじき惡戯をする。夫から賭博場で喧嘩が起る。飲み過ごしては酒亂になる。

從つて男は必ず劍を指して居つた。日本で云へば指すのだが、實はぶら下げてゐた。此劍をぶら下げると云ふ事實が已に決鬪を促す大原因である。假令裝飾用の物としても間違ひが起れば血を流すに極まつて居る。十八世紀に決鬪が流行したのも無理はない。のみならず當時の人間は恰も舊幕時代の侍の如く苟も上流紳士である以上は幾分か擊劍を心得て居らねばならぬ者に相場が極まつて居た。從つて決鬪其物も決して蠻風とは認められて居らなかつた。ジョンソンさへもボズウエルに語つて、云つた事がある。

"He who fought a duel did not fight from passion against his antagonist, but out of self-defence, to avert the stigma of the world and to prevent himself from being driven out of society."

(決鬪をしたつて、相手が惡いので激昂の餘りに遣るのぢやない。遣らなければ、正當防禦が出來ない。のみならず、社會から擯斥されて、汚名を蒙るからだ。)

からして當時の人が決鬪を好い事と心得て居たのは無理もない。そこで何ぞ間違ひが起ると、自己の非を承認したり、謝罪したり、又は取消したりすることは決してせん。必ず劍の先で是非曲直を爭ふ。其内には今から見ると隨分滑稽なのもあるが、當時はそれで一般が滿足して居た。

芝居抔では屢喧嘩口論から決鬪が起つたものである。こんな話がある。

或時粹人ロバート・フイールヂングなるものが牧師フルウードなる者に突き當たつた。するとフルウードが大きな聲で何故突き當たつたと咎めた。咎められたフイールヂングは、いきなり刀の柄へ手をかけた。相手はいきなり自分の劍を拔いてフイールヂングに斬り付けた。斬り付けたと云はなくては日本語にならないから、さう云つて置くが、西洋の事だから實は向うを刺したのである。所が此フイールヂングと云ふ男が芝居見物の婦人達の同情を得ようと云ふ料簡から、わざとみんなの方を向いて、此通りと云はぬ許りに疵口を見せびらかしながら引き取つた。本當の芝居をして見せたのである。生憎見物の女共は氣の毒とも何とも思はないで、却て大聲で笑つたので、先生大に心持を惡くしたとある。其他決鬪の話は澤山ある。一々擧げる譯にも行かんから略して仕舞ふ。注意すべきは此時分の決鬪は形式的の決鬪でない。實際の眞劍勝負である。從つて今の樣に雙方共擦過傷抔で終ると極まつて居らん。どつちか一人は卽死する事が多い。雙方共斃れる場合も少なくない。ことに驚くのは耶蘇教の坊主の決鬪である。十八世紀に坊主で決鬪をした者が三人ある、一人は相手に殺されて仕舞つた。一人は相手を殺した、而も依然として僧侶の職に居つた。第三は三遍決鬪をして後に從男爵になつたさうである。

(5)服裝。十八世紀の服裝は百年間に大分變つたさうである。此講義は服裝の歷史でないから一一其變遷を敍する必要はない。唯現今と違つて頗る華美であつた、否きらびやかであつた、否あ

る點では不自然であつたと云へばそれで大體は盡くせる事と思ふ。第一現今英國へ行つて見ると、みんな地味な服裝をして居る。多くの人はフロックコートに絹帽で洋袴の縞も見えぬ迄に細かい。又背廣を着て居る者でも大概は灰色の樣な目立たぬ者ばかりである。概して云ふと彼等の服裝に對する趣味は極めて狹い範圍の中を上下して居るのみで、極く粗雜な觀察眼から云へば皆同樣だと斷じても宜しい。所が私が英國へ行つた時、ある芝居でシエリダンの脚本を場に登せた事がある。シエリダンの脚本中の人物は皆十八世紀式だからして役者も亦十八世紀式に生れ變つて出て來る。私は今迄書物の上でこそこんな服裝を見た事はあるが、實際の實物を見たのは其時が初めてである。初めて見た私は頗る彼等の衣裝の美麗華奢なのに驚いた。同時に今代の人から云ふと甚だ不自然なやうな感じを免れなかつた。今之を少し順序立てて御話しする積りである。

先づ男子から申すが、第一に妙なのは彼等が自然の毛髮を立派に所持しながら、鬘を拵へて被つた事である。御承知の通り是は禿を隱す爲の道具でも何でもない。子供迄も被つた事がある位で、全くの裝飾品である。尤もシエリダンの『競爭者』の序幕第一場に鬘の廢れた事が書いてある位だから、百年間のべつに同樣の勢力を以て流行つたものでもあるまいが、何しろ日本の女の髷のやうに色々の種類が出來る位發達した所を以て見ると、一時の流行は凄じいものであつたに違ひない。しかも女の髷のやうに、身分に應じて夫々特別の鬘があつたらしい。だから醫者の鬘は一見して醫者のだと見當がつく。法律家の鬘はすぐ法律家のだと合點が行く。而も同じ法曹社會の鬘でも被り手の位置階級によつて各其類を異にしたと云ふ話である。從つて當時の人間が變裝して人の目を暗ますのは存外容易であつた。一寸鬘を被り易へても胡魔化される。此點は今よりも餘程進步してゐたと云はねばならぬ。

鬘の種類を擧げて見ると story wigs, bob wigs, riding wigs, busby wigs, scratch wigs, bag wigs, brown George wigs, nightcap wigs, periwigs, tie wigs, queue wigs, brown bag wigs, grizzle majors, grizzle ties いくら書いても書き切れない程ある。閑があれば十八世紀の鬘と云ふ論文を書いたら可からうと思ふ位出て來る。小泉先生の髷の研究以上の仕事である。

斯う色々な種類が出來て世間一般が鬘を被るとなると、鬘は袂時計とか寶石入の指輪以上に需用が多くなるのは必然の勢である。從つて鬘泥棒が出來る。立派な鬘を被つて揚々と步行いて行くと、後から行つて、いきなり突き飛ばして置いて、鬘を攫つて逃げて行く。攫つて行く筈である。鬘の價格は非常なものである。美しい髮の毛になると一オンス三磅位の相場で賣れたさうだ。自分の頭の毛を賣り拂つて人の頭に植ゑ附ける抔は中々奇特な事である。斯う云ふ仕儀だから鬘師は立派な商賣の一つになつて居た。ある時不圖した流行から鬘を被らずに地髮で人が出步くやうになつた事がある。すると鬘師に大恐慌が來た。彼等は直ちに時の國王に嘆願書を差出して、どうか陛下の臣民が故の如く鬘を被るやうに御取計ひを乞ふと申し立てた。其後此事件はどう片が附いたか知らない。

此鬘の毛へもつて來てパウダーと云つて粉をふりかける。名詞には無論使ふし、動詞にも用ひられる。此粉が又隨分巨量に使用された者である。ピットは苦し紛れに此粉に稅を課して國家の收入を增さうと企てた位のものだ。所が上には上があるもので、色々工夫の末思ひも寄らぬ原料から一種の粉を發明して巧みに稅を免れた。——百年の後こんな事を讀めば凡て滑稽である。

次は帽子に移る。彼等の帽子は決して今の山高、中折の類ではない。紳士となると必ず cocked hat と云ふのを被る。緣を金か銀で卷いて其廣い鍔を山へひつつけるのである。此 cocks も時々に流行が異なるのみならず、人々の嗜好に依つて違ふ。從つて名前が色々ある。「デムマルク・コック」とか「カムバーランド・コック」とか云ふが、どれがどれだか私には分らない。其次はレース。これは今日だと婦人より外に用ひないが、當時は婦人同樣、男子も用ひたのである。レースの襞緣を男子が裝飾として頸の廻りに結んで、其端を二本だらりと長く胸に下げて居る圖がよく繪に畫いてある。是は御承知だらう。手頸の所も今のカフスの代りにレースを用ひた。猶妙な事がある。其頃では男子がマッフ（暖手套）を用ひた。ホーガースの『上流社會の趣味』と云ふ畫にちやんと男がマッフをはめて居る。夫から男子は決して蝙蝠傘を使用しなかつた。佛蘭西人が倫敦を歩いて雨が降つたから傘を擴げたら、何故車に乘らん〳〵と倫敦人が口々に罵つたと云ふ話がある。當時の傘は玄關に釣るして置いて車へ昇降の時丈さし懸けて用ひた者である。而も構造甚だ不細工で油布張りの如何はしい奴である。

是から着物に移るのであるが、之は陸軍、海軍、坊主、醫者で夫々異なるのであるから詳しくは無論申されぬ。先づ普通服裝一般を云ふと、頭に大きな、毛の澤山ある鬘を被つて、上衣を膝の下まで長く垂れる。袖は大分寬く、カフスは折返して袖の半ば迄來る。ずぼんは膝頭迄、チョッキは上衣と同じ位な長さである。これに美しい刺繍をして緣を付ける。襟飾は長いのを用ひた。履は小さな扣子でとめる。一時銀の四角な形が流行つた時、是が婦人にも大變氣に入つて、みんな男の眞似をした。すると銀の盾が足の甲一ぱいになつて女の足が殆ど見えなくなつて仕舞つた。ジョン・スペンサーと云ふ人が結婚の當日用ひた扣子は三萬磅の價であつたさうである。日本の金にすると三十萬圓だから扣子丈でも中人十家の產がある。是でも衣服に贅澤を盡くしたことが分る。ホレース・ヲルポールが其親族の結婚の時に用ひた衣服は、白地に紫と綠の花を縫ひ出した者であつた。縫ひ丈なら夫程でもないが、是へ眞珠を付けたり、又は金の細工をして胸の邊りへぶら下げたりするから、其費用は莫大なものに相違ない。ゴールドスミスのやうな貧乏詩人でも一揃に二百圓以上かけたと云ふ話である。カーネル・ハンガーと云ふ人は一冬の晴着一襲に九千圓費やしたと書いてある。

女の方も無論之に劣らぬ贅澤を遣つた。先づ第一に驚かれるのは其帽子である。決して唯の帽子ぢやない。人が嘲弄して「塔」といひ、「弓狀塔」と號した位のもので、非常な高い大きな奴である。それへ插す鳥の毛の如きに至ると殆ど半碼（即ち一尺五寸以上）の高さに達した。ハンナ・

モーアが他の婦人を評して、彼等は頭上に「灌木の一エーカー半、外に斜地、草地、鬱金黄花壇、芍藥一叢、菜園、及び煖室」を戴いて居ると評した位である。婦人の服裝で今一つ目に立つたものは、例の箍骨(フープ)である。是は婦人の下袴の裾へ入れてピンと突つ張る爲の鯨の骨である。所が其箍骨を入れた下袴が漸々廣くなつて、仕舞には紺屋の桶位な大きさになつた。其大きさの並外れな事はアヂソンが『タトラー』の百十六號に斯う云うて居るのでも分る。

"The court being prepared for proceeding on the cause of the petticoat, I gave orders to bring in a criminal, who was taken up as she went out of the puppet-show about three nights ago, and was now standing in the street, with a great concourse of people about her. Word was brought me, that she had endeavoured twice or thrice to come in, but could not do it by reason of her petticoat, which was too large for the entrance of my house, though I had ordered both the folding-doors to be thrown open for its reception. Upon this, I desired the jury of matrons, who stood at my right hand, to inform themselves of her condition, and know whether there were any private reasons why she might not make her appearance separate from her petticoat. This was managed with great discretion, and had such an effect, that upon the return of the verdict from the bench of matrons, I issued out an order forthwith, 'that the criminal should be stripped of her encumbrances, until she became little enough to enter my house.'"

（法廷は下袴事件に進行する用意が出來たので罪人を呼び入れろと命じた。罪人と云ふのは三日以前操人形屋から出る處を捕へられて、今や群集に取り卷かれて、表に立つて居る。所が復命によると、女は二三度家のなかへ這入らうとしたのだが、下袴が入口に支(つか)へて、どうする事も出來ないのださうだ。あらかじめ左うもあらうかと思つて、開き戸は觀音開きに開(あ)けて仕舞へと云つて置いたのだが、それでも自由に行かないと見える。そこで自分の右の方に立つてゐる婦人陪審官に向つて、かう云ふ譯だが、何うでせう、袴を脱いで出て來る譯には行かないものでせうか考へて見て下さいと賴んだ。勿論巧妙にうまく賴んだので、利き目はすぐあつた。そこで婦人方の意見を確めるや否や、直ちに命令を發して罪人を家へ入れ得る程少さくする爲に無用の長物を剝いで仕舞つた。）

七　娯　樂

十八世紀の倫敦市及び倫敦の住民の有樣及び其特性の一般を述べたから、是から彼等の娯樂に移つて一言しようと思ふ。娯樂は大分ある。中には現今の娯樂と大同小異なのもある。又は全く廢れて迹方もなくなつたのもある。先づざつと數へて見ると、(一)喫茶園。(二)假面會。(三)芝居。(四)

倫敦緣日(フェヤー)。(五)鷄合せ。(六)懸賞闘技。(七)熊いぢめ及び牛いぢめ。(八)クリケットとフートボール。(九)保養場等である。是を逐一述べる譯には行かんから先づ大體の事丈話す。

(1)喫茶園。と云ふと公園の中に興行物や茶店があつて、音樂も聞ければ、ぶら〳〵歩きも出來る、先づ淺草の奥山に似て今少し萬事上品なものと思はれる。是は重に當時の上流社會の人達が行く所である。中に最も有名なのが二つある。ヲークスホールとラネラーである。前者は當時の文學書に斷えず引合に出て大分規模の大きな物の樣に思はれる。是は十九世紀の始めに取り拂はれた。私が洋行した時之を見たいと思つて居つたが、ある時ヲークスホールと云ふ所を通つて見ると、極めて汚い街で公園の樣な物は毫も見當たらなかつた。發音もヲーゾールと記憶して居た。字引にもさうあるが、英國人はヲークスホールと云つて居る。此喫茶園に就いても大分話す材料はあるが時間が惜しいから是で止める。

(2)假面會。數限りもなく行はれたうちで、ヘイマーケット座で遣つたハイデガーの興行にかゝるものが一番有名である。會のある時は前に話した珈琲店のホワイト軒と云ふ樣な所で切符を賣る。是は臨時飛入りを防ぐ爲である。豫約者以外に切符を渡さないのは、成るべく下等な人間を入れない工夫なのださうだ。想像しても解ることだが、この娯樂には大分惡習が伴なつてゐたさうで、その爲坊主其他方正の士君子からは痛い攻擊を蒙つた。之を歴史的に研究して、どういふ發達につれて、どう云ふ弊害が出て來たかと明めるのも面白いに違ひないが、たゞ事實を離れて、頭のなかで考へても心理的に興味のある事と思ふ。人間の德義とか世の掟とか稱ふるものの三分の二は、自己の同一性(アイデンチチー)を人から認められる切なさの餘りに、辛うじて保存せらるゝ場合が多い。闇の中へ這入つて、何の某と云ふ姓名が消えるや否や道心は失せがちになる。假面會は世の中を暗くする代りに、自己の顔を暗くして、之と同樣の結果を煌々たる燭光の下に收め得たのである。文明の洋燈(ランプ)を其儘に點けて置いて、各自の同一性(アイデンチチー)を消す方の工夫を凝らした頗る巧妙を極めた娯樂である。文明の壓迫を受けた一部の自然をことさらに狂ひ出さしむる必要から起つた設備と見ても差支ない。ホレース・ヲルポールがある假面會の事を敍した中に下の一節がある。假面會の性質は此一節でも想像が出來る。

"When you entered, you found the whole garden filled with masks and spread with tents, which remained all night *very commoddy*. In one quarter was a May-pole dressed with garlands, and people dancing round it to a tabor and pipe and rustic music, all masqued, as were all the various bands of music which were disposed in different parts of the garden; some like huntsmen with French-horns, some like peasants, and a troop of harlequins and scaramouches in the little open temple on the mount. On the canal was a sort of gondola, adorned with flags and streamers, and filled with music, rowing about. All round the outside of the amphitheatre were shops, filled with Dresden china, japan, etc. and all the shopkeepers

in mask. The amphitheatre was illuminated; and in the middle was a circular bower, composed of all kinds of firs in tubs, from twenty to thirty feet high: under the orange-trees, with small lamps in each orange, and below them all sorts of the finest auriculas in pots; and festoons of natural flowers hanging from tree to tree. ..... There were booths for tea and wine, gaming-tables and dancing, and about two thousand persons. In short, it pleased me more than anything I ever saw."

（園内に入ると見渡す限り天幕（テント）が張つてある。見る人毎に假面を被つてゐる。天幕は終夜張り詰めであるから甚だ便利である。《ヲルポールは此所にわざと圈點を打つた。》一方には花で飾つた五月柱（メイポール）の周圍（まはり）を取り卷いて、笛、鼓の音に調子を合はせて、大勢躍つてゐる。固より素顏ではない。其外園内の所々に構へた樂人の群を見ると、是も悉く面を被つてゐる。佛蘭西風の角笛を持つた獵夫の樣なのもゐる。百姓姿に身を扮したのもゐる。小山の上の御堂のなかにはハールキンやらスカラマウチが澤山控へてゐる。《註、ハールキンもスカラマウチも共に以太利の道化芝居に出る一種の類型的人物で、日本で云ふと二十五座の馬鹿の樣なものに當たる。芝居でやるとスカラマウチが虛勢を張つてハールキンに打ちのめされると云ふのが寸法である。今ではハールキンはたゞパントマイム劇の中にあらはれる丈であるが、假面會の流行した當時は人がよく此風體を裝つたものである。》水には一種の畫舫（ゴンドラ）を浮かべる。旗幟（はたのぼり）を押し立てて、そこらを漕ぎ回る。圓形の中央館の外部は雜貨店で一杯である。ドレスデン陶器もあれば漆器もある。店の主人は無論面をつけてゐる。中央館は目眩い許りに明りを點ける。眞中の茂りは大鉢に植ゑた檜を集めて圓狀に拵へてある。高さは二十尺もしくは三十尺もあらう。上には柑類がある。其一つ〳〵に小さい洋燈を點ける。下には目の醒める樣な鉢植の九輪草を竝べて、自然の花を枝から枝へ懸け渡してフエスツーンを作る。外に茶店もあれば酒鋪もある。賭博場もあれば舞踏場もある。二千人程の人數ならば何時來ても差支ない。）

此敍述は一讀しても分るが、前に云つたハイデガーの催しにかゝるヘイマーケット座の假面會とは全く趣が違ふ。劇場で遣つたのではなくて、ラネラーと云ふ大きな公園の樣な所で開いたものである。夫をヲルポールが見て、其盛況に一驚を喫して、逐一の模樣を當時以太利に居た親友サー・ホレース・マンに報道したものである。ある詩に（作者知らず）斯うある。

"The midnight orgy and the mazy dance,
The smile of beauty and the flush of wine,
For fops, fools, gamesters, knaves, and lords combine;
Each to his humour—Comus all allows:
Champagne, dice, music, or your neighbour's spouse."

（酒は夜なか迄飲む、踊は眼のまはる程踊る。女は媚びる。酒には醉ふ。ハイカラ、馬鹿、

賭師、惡黨、或は華族、誰でも構はない。めい〳〵の好物を女神コーマスが下し賜はる。――三鞭、賽、音樂、でなければ隣の細君。）

(3)是から芝居の話に移る。近頃英國のある雜誌を見たら、其誌上に劇場の批評が大分長く載つてゐた。そのうちに英國の見物人の不心得不體裁をひどく罵倒した節がある。幕と幕の間に座を立つて、次の幕が明く前には歸つて來ない。どこかに愚圖々々してゐるものと見えて、丁度人の邪魔になる時分にひよつくり顏を出す。是が一つ。夫から、仕舞際になると、肩や胸をむき出しに曝らした女達が、急にそは〳〵して、急がないでも濟む所を、外套抔を引懸けて、ことさら歸る支度を早くする。是が二つ。此二つは熱心な觀客の邪魔をする非常な沒公德の所爲であると隨分苛烈な言語を列べて痛論してゐた。所が正直なところを白狀すると、斯の如く手痛い攻擊を受けた英國劇場の見物人は其靜肅なる點に於て、其行儀のよい點に於て、其高尙なる態度に於て、大に私を敬服させた事があるんだから可笑しい。私が英國へ行つて芝居を見た時、第一に氣が付いたのは彼我觀客の態度の上に著しい相違のあると云ふ事である。どつちが行儀が好いかは改めて說明する迄もない。第二に胸に浮かんだのは、シモンズの著はした『沙翁以前の英國脚本家』中に詳しく書いてある沙翁時代の劇場內の光景と、私が自分で親しく目擊したこの有樣との相違であつた。其時私はシモンズは當時の無規律な樣子を、筆に任せて少々誇張し過ぎたのではあるまいかと疑つた位であつた。シモンズを讀んだ私には彼等の大人しく成り方が餘り烈しくつて、

さうとしか思はれなかつた。所が十八世紀の芝居の模樣を調べて見て、其整はざる事、其亂暴なる事に於て現今の場末の倫敦劇場よりも甚しかつたと云ふ事が明瞭になつたので、此方面の改良も亦十九世紀に至つて漸く成就した者と悟つた。

十八世紀の芝居は大體六時から始まつた者である。（今では七時半乃至八時である。）夫で身分のある人になると、まあ三時頃から召使、――日本で云へば中間、若黨と云つたやうなもの、卽ち英語のフートメンを豫め芝居へやつて席をとらせて置いた。所が其フートメンが大人しくない。中々狼藉の所爲に及ぶ。帽子を被つて居たり、大聲を出して笑つたり、向う側の者と話しをしたり、嗅ぎ煙草を嗅いだり、動もすると、主人の威光を笠に着たがつて仕方がなかつた。或人は之を慷慨して新聞に投書して、「劇場は禮儀作法の中心として尊敬を拂はねばならぬ」云々と云つた。狼藉はもとより宜しくあるまいが、「劇場は禮儀作法の中心として」も少し變な樣だ。何だか英人の芝居を見る時の考と、日本人の芝居を見る時の考が根本的に違つてるやうな氣がする。我々だつて芝居へ亂暴しに行く馬鹿ぢやないが、劇場を以て高雅なる禮式、品格ある作法の中心とは思つてゐない。從つて見物の態度も自ら異なる譯であらう。からして此等の中間、若黨の動作が大に秩序を壞亂した樣に記載せられて居るが、實を云ふと、日本なら此位の事は主人自身が遣りかねまじき行爲かも知れない。それは兎に角もう一つ此中間、若黨に就いて話がある。彼等は無錢で桟敷に入る特許を有して居つた。是は矢張り主人公に對する劇場の厚意かも知れぬが、

彼等は其聾桟敷を我物顔に横領して大に他の見物の迷惑になるやうな亂暴ばかり働いた。其極ドルーリー・レーン座の支配人がとう〳〵我慢し切れずに、此奴等を二階の隅から追ひ出して仕舞つた事がある（1737）。すると彼等は大に激昂して手に〳〵棍棒を携へて劇場に亂入した。舞臺の上を暴れ回つて、仕舞には二三十人の負傷者を拵へて引き上げた。別に面白くもない事だが、序だから話した。

夫から今日の劇場で飲食をしようと思ふと席を立たなければならない。（尤も珈琲などは時々持つて來るが。）所が當時は幕の間々に蜜柑を賣りに來た。林檎も賣りに來た。是等の物賣人が大きな聲を出して喧騒を極めたものださうだ。ばかりではない、肝心の見物人がワイ〳〵言つて役者を冷やかした。それでも不足だと自分の買つた蜜柑や林檎を役者へ放りつけた。此時分には二人の番兵を舞臺の上に立たせて置いた習慣がある。其番兵が遠慮もなく大きな聲で笑つたものだ。或時餘り笑ひ過ぎて舞臺の上に倒れた奴がある。

席は特別室（ボックス）と土間（ピット）と第一桟敷（ガレリー）、第二桟敷（ガレリー）とで、此時分には上等土間（ストール）なる者はまだ出來なかつた。上等土間（ストール）の出來たのは十九世紀の初めであつた。此時分でも特別室（ボックス）は上等客の這入る所となつてゐたが、其見物人は又隨分亂暴であつたらしい。先づ貴婦人は前述べた通り自分々々の定服を着せたフートマンを二時間あまりも其處へ坐らせて置く。夫からして徐々と入場して來て、大きな扇子を廣げて知り合ひの人々に夫々挨拶をする。さうして talk and laugh as loud as they are

able（出來るだけ大きな聲で話したり笑つたりする）とある。あれが貴婦人なら世の中に貴婦人になる程容易な事はないと冷やかす者さへ出て來た。貴婦人はまあ我慢も出來ようが、bloodsと云つて前に話した粋人などになると始末に行かない。特別室（ボックス）に來ても大抵は醉つぱらつてゐるから、ちやんと着席はしない。自墮落に寢轉んで居る。

最も妙な事は舞臺の兩側に席を設けて此上へも見物人を載せた事である。ホーガースの描いた舞臺の圖を見ると、まづ中央に役者が五六人何か演じて居る。其のすぐ左右、卽ち役者と同じ平面に紳士淑女が居竝んで見物をしてゐる。一寸見ると此見物人も亦役者と思はれる樣に描いてある。かうすると舞臺が狹くなつて、役者が自由に働けなくなる。で有名なガリックが出て來て遂に見物人を舞臺の下に追ひ下げて仕舞つた。ガリックは御存じの通り十八世紀の舞臺と離すべからざる關係を有してゐる。此人が役者となつて三つの改革を十八世紀の劇場に加へた。第一は今述べた通り見物人を舞臺に入れぬ事。第二はフートライトを點火（つけ）て前方から舞臺を照らす事。此改良を輸入する前は天井から蠟燭を點けて薄暗く舞臺を照らした者と見える。第三は技巧上の改革であつて演劇史としては大變大切な者である。今迄の役者の口迹は單調で、文切り型で、抑揚も高低も版に押した樣に機械的の者であつた。だから最初の二句位を聞けば、あとはどんな風に遣つて退けるか聞き慣れた者には誰でも分る位な有樣であつた。そこへガリックが出て始めて此積習を一洗して、情緒の抑揚に從つて音調の緩急舒促を計つたのである。從つて口迹が突然とし

て活動して來た。之が爲に在來の觀客が一度に毒氣を拔かれて驚嘆したと云ふのは恐らく本當の事だらう。其證據がある。當時は特許法案と云ふ者があつて脚本、劇場及び役者共にロード・チエンバレンの公認を經べきものとなつて居た。固より役者や支配人の方では色々な名義を設けて特許を受けずに、私の興行を繼續して居つた者も少なくはなかつた。處がガリツクの出勤したのはグードマンス・フイルドと云ふ處にある小劇場で固より公認を受けて居らなかつたのであるが、ガリツクが此所で『リチャード三世』を演じて、倫敦一般の人氣を一身に集めるや否や、今迄誰も知らなかつた緞帳の名が急にロード・チエンバレンの耳に入つて、此劇場は直ちに閉場を命ぜられた。同時にガリツクは一躍してドルーリー・レーン座に買收されて仕舞つた。ガリツクの斯道に對する功績は是計りではない。彼は進んで役者の服粧を改良し始めた。是迄は脚本の如何に關せず、又主人公が希臘の人物であらうが羅馬の英雄であらうが、委細無頓着に十八世紀の服粧で臆面なく出場した者である。此弊に着眼して、多少の矯正を加へたのは矢張りガリツクである。是は寧ろ文學史と關聯して述べる方が適切であるからして、當時の脚本の內容の特性や衣服等と共に後廻しにする。一寸服粧に關して面白いと思ふことを附記して置くが、當時の役者の著た服粧は大變立派な者であつたさうだ。それで皇后とか公爵夫人とか云ふ人の禮服の御古を頂戴したり又は買つたりして、早速之を舞臺の上に着て出たさうだ。又當時新聞紙で劇に關する廣告などをするには、新聞の方から金を出した者ださうだ。或新聞屋は座元へ年々二百弗宛を拂つたと書いてある。夫から役者の地位を云ふと、世の中からは無宿者として目されて居たとあるからして、日本の河原乞食同樣の有樣であつた。ガリツク抔は當時の名流と交際して堂々たる紳士であるが、是は役者としてではない一個人としてである。職業から云ふと到底齒すべきものではないのである。夫から女役者は無論品行がよくなかつた。品行がよくなくても私交上輕蔑を招く事はなかつたので、或者は宮廷へ出入した位である。唯公然と紳士の細君になることが出來ぬのみであつた。

(4)市。(fair) 習慣によつて市と譯して置くが實は日本の緣日の樣なのである。但し普通の緣日のやうに規模の小さい者ではない。バーソロミユーの市抔になると長いときは二週間も續いて開いた事がある。是は倫敦で一番有名な市で、スミスフイルドと云ふ處の氏神セント・バーソロミユーの市だから斯う云ふ名を付けたのである。バーソロミユーの日が來ると小屋掛けをして見世物、賭博場、輕業、手品、其他草々の娛樂を集めて倫敦市民を呼ぶ。中でも其掛け芝居は最も有名なものであつた。奇體な事に、當時の名題役者とも云はれるものが此假小屋の芝居に出勤するのを名譽として、競うてこゝに寄つて來たさうだ。其位此芝居は呼物になつて居たと見える。だから始めて舞臺に上る者などは、此機を利用して、一躍名聲を博して置いて、すぐドルーリー・レーン抔に雇はれる工夫をした。芝居の外には前に云つた諸種の興行者が軒を竝べてドンチヤン騷いでゐる。中には野獸園(メナジエリー)の如き殺風景のものさへあつたが、當時の上流社會の人は一向平氣な

もので、市のある度に貴婦人を連れて見物しながらそこらを遊び廻つたものである。

バーソロミューと竝んで有名なのはサザークの市である。これは例のホーガースによつて後世に傳へられて居る。――右の方を見ると擊劍家が二の腕に傷をして唯今此通り負傷しましたと云はぬ許りに市場を馬で乘り廻して居る。向うのお寺の高い屋根から此方の家の屋根へ長い綱を筋違ひに渡して、一人輕業師が今其眞中を渡りつゝある。全くの離れ業である。日本ではこんな大袈裟な綱渡りを見た事がない。左は大騷ぎである。小屋が崩れ出して音樂師、太夫、其他樂屋の人數一同が見事に轉がり落ちつゝある。柱の端に猿が一匹囓り付いて居る。落ちないのは猿ばかりである。猿の下で賭博をやつてゐる。そばに熊鷹婆が張番をして居る。……以上に五月の市と云ふのを加へて、俗に倫敦の三大市と稱へる。此外に小なる者は澤山あるが、大同小異と思へば宜しい。

(5)此外に倫敦人の好んだ娯樂は鷄合せである。鷄合せに就いて御話しをすることは澤山あるが、時間がないから先づ略す事にする。一口に云へば金を賭けて鷄を蹴合はせるのである。其から熊いぢめ、牛いぢめ、仕合（眞劍で遣る）、其他ある事は大分あつて、話せば興味も少なくはないが、肝心の文學談の方が遲くなるから、みんな略して、保養場の事丈御話しして置く。ヘルス・リゾーッと云ふと、字の示す如く健康の爲に行く處と云ふ意味で、日本の湯治場の如き者であるが、日本のは重に入浴のために行く。英國のは重に飲みに行く。そこが違ひである。飲むと申しても酒を飲んで丈夫になると云ふ譯ぢやない、矢張り湯を呑むのである。だから溫泉に這入るといふ言葉よりも drinking the waters といふ流行語が出來た。「芦の湯を飲んだかね」とか、「伊香保を飲みに行かう」抔と眞面目に言ひ合つたものと見える。尤も日本の溫泉とは大分趣が違ふ。日本で溫泉といへば必ず山を連想する。英吉利のは必ずしもさうでない。先づ何所でも構はない井戸を掘る。すると其中から鑛泉が出る。鑛泉が出さへすれば直ぐ廣告して客を引く。客は單に健康の爲と稱して保養に行くのである。だから、何所其所の溫泉と云はないで、何所其所の井戸と稱したものである。此井戸の中には今では倫敦市中に這入り込んで仕舞つた場處が大分ある。例へばハムプステッドの如きは其一例である。これは私が一時下宿してゐた所で、片寄つてはゐるが無論倫敦の市中である。今では何所に井戸があるか、頓と見付からないが、當時は矢張り池上の溫泉位な格であつた。其他を云へば、イスリントンも例になる。ダリッチも例になる。皆昔の保養場で、今の小都會（倫敦中の）に變化して仕舞つた。

然し是等は皆小規模のものである。保養場中でも尤も著名なものを擧げるとタムブリッチとバスの二箇所である。中にもバスの如きは一七〇二年に女皇アンの行幸があつた以來流行社會の中心となつた位である。行幸當時の景況を書いたものに、百人の壯丁が揃ひの着物を着て、二百人の女子が馬に乘つて、新しく立派な道路を切り開いて、さうして行幸を迎へたとある。其時四方から集まつた群集の爲に、狹い所に不時の客が込み合つたので、宿賃などが非常に騰貴したさう

である。寢床を得る爲に十圓も取られたと書いてあるが、是丈ならさう驚くにも當たらない。然し蒲團一枚の損料が一晩で十兩だと譯すと成程と云ふ氣にもなる。

どうしてバスが流行生活の根源地になつたといふと、是は全くナッシ俗にボー・ナッシとして知られてゐる男の盡力に因るものと、後世一般から認められてゐる。ナッシは beau（ボー）の渾名を博す位の人物だから、斯ういふハイカラ事業にかけると非常な辣腕を有してゐた。寄附金を募つてバスに樂隊を雇ひ入れたのもナッシである。道路の修繕をして往復の便利を計つたのもナッシである。pump-room を改築したのもナッシである。（パンプ室とは喞筒仕掛で鑛泉を汲み出して客に飲ませる所を云ふのである。）集會室を建設したのもナッシである。其位では滿足しない。彼は工風を凝らして浴客日程と云ふものを拵へた。浴客が朝起きてから寢る迄一時間も退屈のない樣に、夫から夫へと娯樂を供する爲の課目である。學校の課目と違つて甚だ修め易かつたらうと思はれる。朝は入浴。午はパンプ室で合奏。晩は舞踏。と云ふ樣な具合である。

こんな娯樂を供すると同時に、一方では禮式を非常に嚴重にした。或男が何か女に失禮なことをしたと云ふので、その男を湯の中へ放り込んで決鬪を申し込んだ事などがある。夫から男女の服裝をきめた。男には佩刀を禁じて仕舞つた。刀から屢騷動が起るからである。舞踏會は火曜と水曜にやつた。六時に始まつて十一時に了る。十一時が鳴ると樂隊がぴつたりとやめて仕舞ふ。非常に規律の正しいものであつた。ジョーヂ二世の皇女が定刻後今一回と踊を所望した時に、ナッシはバスの規則はスパルタの法令の如く動かすべからざる者だと答へた位である。

倫敦邊から來る浴客は、皆此規律に服從した。實際服從しても損はない。倫敦よりも娯樂が一箇所に集まつてゐる。又うまく釣合が取れて居る。尤も仕舞には禮儀作法が段々八釜しくなつて來て、下らぬ遊戯を遣るにも大變仰山な禮式を用ひたさうだ。先づ浴客の日常生活を述べて見ると、――朝は入浴する。尤も男女共に裸ではない。衣服を着た儘である。女は宿（やど）から轎輿（セダン・チエヤー）に乘つて浴場に行く。浴場は五箇處あつて、皆男女混浴である。湯壺の中で、漬かりながら挨拶をする。談話をする。是が一つの社交である。女は歸るときも轎輿である。夫からパンプ室へ行つて、湯を呑む、音樂を聞く。午飯は二時から三時頃である。其前には遊步場に出て散步する。其時は出來得る限りの美裝をして逍遙するのである。次に御寺へ行つて禮拜の式を遣る。それが濟めば隨意に運動をする、町内を素見して步行く。この日課の上に、一週に二回宛舞踏會がある。其景況は略す。

劇場もある。バスへは倫敦から有名な役者が來て、よく出勤した。かの有名なるシドンス夫人の如きは倫敦のドルーリー・レーンでは一向持てなかつたのだが、バスへ出てから急に評判が高くなつた位である。御蔭でシドンス夫人は又ドルーリー・レーンに呼び戻されたと云ふ逸話さへ傳はつてゐる。

バスの概況はざつと斯んなものであつた。チエスターフイールドやホレース・ヲルポールは皆

此所へ來て遊んだ事がある。文學者でバスに關係ある者に至つては非常に多い。今一々述べてゐる譯に行かないから皆略して仕舞ふ。

序だから一言する。一七五〇年にドクトル・リチヤード・ラツセルと云ふ人がサツセックスの一小村ブライトヘルムストンと云ふ處に居住を定めて、凡ての病氣は海水浴をすれば全快すると云ふ說を天下に吹聽した。すると何か事あれかしと待ち構へてゐた退屈な連中はワツと云うて茲の寒村に集まつて來た。今でもブライトンと云ふと英國第一流の海水浴場になつて居る。これが今日流行の海水浴の濫觴である。

八　文學者の地位

十八世紀の一般社會の狀態はこれで敍述した積りであるから、是から愈本論に入る筈であるが、本論に入るに先だつて當時の文學者の地位及び文學が世間から如何に迎へられてゐたかに就き一言して置きたいと思ふ。是は當時の狀況を知るに便宜であるのみならず、又日本今日の形勢と比較して、多少の興味を惹くべき問題である。尤も大概人の知つて居ること計りで別段耳新しい材料も事實もないのだから其積りで聞いて下さい。十八世紀の始め、卽ち女王アンが位にある時に文學者として名をあらはした者は大抵相當の地位を得て有福な暮しをして居る。例へばアヂソンは伯爵夫人と結婚をして國務大臣になる。スヰフトはセント・パトリツクスの副監督牧師になる。其他夫々政治的な意味に於て、衣食に不自由をしない位には遣つて居た。そこで俗にこの時代を稱して國家保護（state patronage）の時代と云つてゐる。卽ち文才がありさへすれば官職を得ることが出來る。筆さへ達者だと政府は喜んで功名の地位富貴の椅子を與へる。文學者に取つては有難い時代であつた。これが普通の見解であつて、讀書子は大抵此說を信じて居た。所が先達て物故したレスリー・スチーヴンの講義（此講義はスチーヴンが病氣の爲、他人が代讀して、後に『十八世紀の文學及び社會』と題して出版した。）によると、是が誤解である。彼の云ふ所によると、何も文藝に秀でてゐる爲に登用の路が開けたのではない。當時は文學政治の兩者が後世よりも餘程密接の關係を有して居つたから、當路の勢力家から云へば、たゞ自家の朋友や知人、例へば大學の同輩とか又は珈琲店の會員とかを採用して役に付けた迄である。あれは詩才がある、これは文才がある抔と喫賞の餘りに官職を與へたと思ふのは間違ひである。現に役に就いてから詩文を作り出したものさへある。と斯う辯解してゐる。成程さうかも知れない。何れの解釋でも我々は痛痒を感ずる必要がない。文學者が一方に政治的地位を得て樂に暮らしたものが多かつたと云ふ事實さへ承認して貰へば宜しい。彼等は派出な服裝をして珈琲店に出入する、劇場に出入する。バスに遊ぶ、タムブリツヂに遊ぶ。所謂當世の流行兒、一代の風流漢を以て自ら任じて、得意に世の中を渡つて居たのである。然る處この黃金時代は永續する事を得なかつた。一七一四

年に女王アンが死んでジョーヂ一世が位に卽くと同時に、彼等は過去の榮華をたゞ夢にのみ見る不遇に際會したのである。時の宰相サー・ロバート・ヲルポールと云ふひとは全く文學氣や芝居氣の無い男であつた。從つて文學に從事する操觚の士は一向に顧られなかつた。女王アン時代に文學及び文士の保護者と稱せられたハリフアクスとは大違ひである。ハリフアクスは自分でも詩を作つた。元來英國の貴族はチヤールス時代からの習慣で作詩と云ふことを貴族の藝のやうに考へてゐた。恰も舊幕頃の日本人が誰でも歌の一首や詩の一首位讀まねば恥のやうに思つて居たのと同樣である。夫だからして文學者と政治家とは存外緣故が深かつたのだが、ロバート・ヲルポールの樣な實際家から云ふと、文士文學共政治的に無意味な贅物である。議會制度に基づく國體の常として、大臣は對議會策を講じねばならぬ。利祿を懸け、地位を賣つて一意議員の買收に腐心したヲルポールの事だから、と云ふと原因の樣になつて可笑しいが、何しろ幾百の空位空官があつたからと云うて之を文學者などに分け與へる氣色は更になかつた。從つて文學を天下に標榜する輩は全く官途に米鹽の資を仰ぐの望を絶たねばならぬ仕儀となつた。一方では政府と緣が切れて仕舞つたのに、一方ではまだ社會に「讀書界」なる者が成立して居らなかつた。現に世紀の始めには、文學の弄ばれる範圍が殆ど倫敦に限られてゐた位である。倫敦以外には殆ど讀書子が存在してゐないと評しても差支ない程不振な有樣であつた。ヲルポール時代は夫よりも發達したかも分らないが、書物の販路はまづ知れたものである。一方では政府に見放され、一方では讀者

を有つて居ない彼等は、唯一の策として個人的保護の下に麵麭を得るの途を講じ出したのである。詰り國家的保護が衰へて其餘習がまだ拔けないからして、何等かの保護を求めたくなる。已むを得んから貴族の金持で多少文學の好きな者を捕へて自分の保護者としようと云ふ考に流れ込んだのである。

原稿料の方は後廻しとして先づ保護者の方から話しをするが、保護者と云ふと何だか曖昧な語であつて、保護といふ範圍も極めて茫漠たる感がある。然し彼等の保護を求めると云ふ意味は、つまり自己の作を出版するに就いて豫約者になつて呉れろと依賴するのである。豫約者になると云つても、今日本で流行る樣な申込ではない。自分の著書を出版するから何部丈買つて呉れと嘆願するのである。つまり現今の豫約出版は本屋が新聞に廣告する丈であるが、此時分には著者自身が貴族の門に叩頭して憐みを乞ふのだからその趣は大變違ふ。尤も豫約で出した書物だからと云つて、どれもこれも、斯う云ふ不名譽な出版とばかりは限らない。ジョンソンの『沙翁註解』は此豫約法で出版したものである。（是は出版が後れたため世間から詐欺師だなどと評判された位遲延した者である。）ポープのホーマー譯も亦豫約で出版した。是等は豫約でも前の樣なのとは少々趣を異にして居る。調べて見るとジョンソンは初版に三百七十五磅取つて居る。二版には百磅取つて居る。ポープの如きはホーマーで五千三百二十磅四志を得て居る。無論普通グラップ街の文士とは一所にならない。然しポープの如きは全く例外であつて、多數の著述家は前の如く

犬の様に頭を下げて貴族の家に行く。見ず知らずの人の家に行くのだから先づ中間とか玄關番とか云ふ連中に賄賂を使ふ。さうして其玄關先に待つて居て、主人が外出の際車に乘る爲玄關に出て來るのを捕へるのである。捕へた處で御辭儀をしたり揉手をしたりして、恐る〳〵豫約を賴むのである。こんな有樣だからして、彼等が無主義無節操口から出任せの妄語を陳列して麵麭に代へようと焦つたのは無理のない話である。ゴールドスミスは彼の『世界の市民』の中に之を諷刺して居る。書中にリエン・チ・アルダンジと云ふ支那人が本國へ英國文學者の景況一斑を報ずる書簡がある。或文學者が倶樂部で自分の不平を他の會員に訴へて居る處を報知したものと思つて御讀みなさい。

"'To the devil I pitch all the nobility,' cries a little man, in a peculiar accent, 'I am sure they have of late used me most scurvily. You must know, gentlemen, some time ago, upon the arrival of a certain noble duke from his travels, I sat myself down, and vamped up a fine flaunting poetical panegyric, which I had written in such a strain, that I fancied it would have even wheedled milk from a mouse. In this I represented the whole kingdom welcoming his grace to his native soil, not forgetting the loss France and Italy would sustain in their arts by his departure. I expected to touch for a bank-bill at least; so folding up my verses in gilt paper, I gave my last half-crown to a genteel servant to be the bearer. My letter was safely conveyed to his grace, and the servant, after four hours' absence, during which time I led the life of a fiend, returned with a letter four times as big as mine. Guess my ecstasy at the prospect of so fine a return. I eagerly took the packet into my hands, that trembled to receive it. I kept it some time unopened before me, brooding over the expected treasure it contained; when opening it, as I hope to be saved, gentlemen, his grace had sent me in payment for my poem, no bank-bills, but six copies of verses, each longer than mine, addressed to him upon the same occasion.'"

（小男が大きな妙な聲をして斯う云つた。――華族なんてものはみんな死損ひだ。早くくたばつて仕舞ふがいゝ。この間も人をこんな苛い目に合はせやがつた。本當だよ、嘘なんか吐くものか。君等も知つてるだらう。先達てある公爵が外國を巡回して歸つて來た。それから一生懸命に公爵を頌し奉つた詩を成るべく飾り立てて捏ね上げた。自分の見る所ではまあ旨く出來た。是ならば鼠でも欺して牛乳を取上げられると思つた。僕は此詩の中に全國民一同は公爵の歸朝を歡迎すると書いて置いた。それ計りぢや不可ないから佛蘭西、以太利の藝術は公爵を失つて定めて困るだらうと書いて置いた。これを持つて行けば大丈夫少しは吳れると考へたから、其詩を丁寧に疊んで、なけなしの一圓札を家從にやつて、取次を賴んだ。僕の書いたものは公爵の手元に渡つたには渡つたが、家從の野郎待たせたの待たせないのつて、とう〳〵四時間餘

り引張つた。やうやく包をもつて出て來たのを見ると、僕の書きものの約四倍はある。旨い御禮が來たと思つて僕は喜んだね。手を出して引つたくる樣に包を受け取つたが、妙に手が顫へてならなかつた。幾何這入つてるかと思つて、しばらくは包の儘ぢつと眺めてゐた。所が開けて見ると驚いた。丸で嘘の樣な話ぢやないか、詩の御禮に來たものは金でも何でもない。矢張り同じ題で公爵を頌し奉つた詩なのだ。〆て六篇ある。しかも僕のよりもみんな長い奴ばかりだつた。)

是は豫約の依賴ではない。然し豫約の依賴以上に痛切な者である。人間に命が一番大切であつて、饑餓が一番苦痛なものだとすれば、詩人や文人が衣食の爲に心にもなき追從を竝べて輕薄の御世辭を振り蒔くのは當然の事である。此追從が何の位の度迄行はれたかは當時の詩集などのデヂケーションが如何に馬鹿々々しい諛辭で埋まつて居るかを見ればすぐ分る。夫から此時分には御來駕の上御新作の朗讀を乞ふ抔と招待を受ける事がある。招待する人は無論金持で、招待される者は無論貧詩人である。だから招待と云ふは名のみで實は命令である。夫だから彼等が出席する時は、あらゆる輕蔑や嘲弄や冷かしや無禮に甘んぜねばならん。夫でも餓死するよりはよいと見えて彼等はのそ〳〵と出掛けて行くのである。考へると隨分氣の毒な境遇に居たものである。

以上の樣な人物は特別として、硬骨廉直の士が貴族などの憐憫に浴さずに獨立して遣つて行けるかと云ふと是が又非常な困難である。第一出版事業と云ふ者は現今の樣に容易な事でない。當

時の讀者は殆ど數へる程しかなかつたのである。下等社會は當時の敎育狀態から云つて殆ど書物を手にしない。中等社會になると子弟が泥棒の傳記などを讀む計りである。つまり本を讀まない者が讀む者より非常に多い。金があればのらくらして遊んで居る計りである。貴族などは十八九になると漫遊と稱して歐洲を家庭敎師が附添うて廻つて來る。廻つて來れば世間を知るとか、何とか云ふのだけれども、其實放埒の程度を增す計りである。商人などの家にある書物と云へば、聖書に讚美歌、夫に時としては『ピルグリムス・プロッグレス』『ロビンソン・クルーソー』『パメラ』位である。或人の自傳にこんな文句がある。

"Books were not then, great or small, on this subject or on that, to be found in almost every house. A book, except of prayers or of daily religious use, was scarcely to be seen but among the opulent, or in the possession of the studious; and by the opulent they were often disregarded with a degree of neglect which would now be almost disgraceful."

(書物は大小に拘らず、題目を問はず、殆ど持つてゐる家はなかつた。祈禱書とか日常使用する宗敎上の書物は特別だが、外のものになると金持とか、學者とかが持つてゐる計りである。しかも是等の金持は今日ならば外聞の惡いと思はれる位書物に無頓着であつた。)

是は一千七百五十九年頃の話である。夫で熱心に書物でも讀まうと云ふ人は書籍店へ出掛けて自身の讀み度い本を取つて出來る丈立讀みをする。明くる日又その續きを讀む。又その明くる日

其次を讀んで、とう〳〵讀み切つて仕舞ふ抔と云ふ呑氣なことをした。當今の本郷邊の雜誌を冷やかす書生よりも烈しい位である。尤もかゝる熱心家は十八世紀の中頃に貸本屋が出來る樣になつて大に便宜を得たのであるが、なぜこんなに本が傳はらなかつたかと云ふと、一つは人間が冷淡であつたからであるが、一つは書籍の代價が高かつたのが原因である。十八世紀の末頃でさへヨークとかグラスゴーへ行つて見ると、まだ代表的作物（standard authors）が普及して居なかつたと云ふ話である。十八世紀の前半に於ては四ッ折版は平均十二志した。八ッ折版は五乃至六シリングであつた。それが後半に行つて却て大に昂騰した。十二志が一ギニーになつた。書物屋の方でも浩澣なものを週刊又は半週刊に割つて倫敦の各處へ配布して賣り擴める方法を取つた。夫から今一つ貸本屋の設備が出來たので、書物の普及上に多大な便利を與へる事となつた。尤も此貸本屋は何時頃から營業として成立するに至つたかよく分らないのだが、何でもフランクリンが一千七百十八年頃に英國へ來た時分には頓と見當たらなかつたと云ふ話である。此貸本屋が出來た時には書肆が大に狼狽して皆自家の出版物の賣れ口を氣遣はないものはなかつた。其うち貸本屋は段々殖える。貸本屋が增すに從つて恐慌の度も益甚しくなつたのである。所が實際は豫期に反して書物の賣高が今迄よりはぐつと增加して來た。是は幾千と云ふ家族が皆この貸本を讀む計りでなく、之が爲に讀書の趣味を挑發せられて、今迄借りて濟ましてゐたものが、急に心機一轉して購買者に變じたからである。かうなると文學者の方も大分景氣よくなる譯ではあるけれども、それにも關らずグラッブ・ストリートと云ふ、今の世の諺に殘る位悲慘の境遇に沈んだ幾多の文星を產出したのである。マコーレーが書いたジョンソン論の中に、ジョンソンは丁度保護者がなくなつた後、一般の讀書的好奇心がまだ起らぬ前、卽ち文學者に取つて氣の毒な時代に倫敦へ出て來た（千七百三十七年）のだと說いて、其頃の文學者の窮狀をこんな風に敍して居る。

"Thus, at the time when Johnson commenced his literary career, a writer had little to hope from the patronage of powerful individuals. The patronage of the public did not yet furnish the means of comfortable subsistence. The prices paid by booksellers to authors were so low that a man of considerable talents and unremitting industry could do little more than provide for the day which was passing over him. The lean kine had eaten up the fat kine. The thin and withered ears had devoured the good ears. The season of rich harvests was over, and the period of famine had begun. All that is squalid and miserable might now be summed up in the word Poet. That word denoted a creature dressed like a scarecrow, familiar with compters and sponging-houses, and perfectly qualified to decide on the comparative merits of the Common Side in the King's Bench prison and of Mount Scoundrel in the Fleet. Even the poorest pitied him; and they well might pity him. For if their condition was equally abject, their aspirings were not equally high, nor their sense of insult equally acute. To lodge in a garret up four

pair of stairs, to dine in a cellar among footmen out of place, to translate ten hours a day for the wages of a ditcher, to be hunted by bailiffs from one haunt of beggary and pestilence to another, from Grub Street to St. George's Fields, and from St. George's Fields to the alleys behind St. Martin's church, to sleep on a bulk in June and amidst the ashes of a glass-house in December, to die in an hospital and to be buried in a parish vault, was the fate of more than one writer who, if he had lived thirty years earlier, would have been admitted to the sittings of the Kitcat or the Scriblerus club, ……"

（斯う云ふ事情だからして、ジョンソンが文學的生活を營み始めた當時にあつて、有力なる權勢家の庇護を受ける望は文士に取つて皆無の有樣であつた。去ればと云つて、樂な暮しの出來る程社會公衆の庇護もなかつたのである。書肆の作家に拂ふ原稿料と來たら實に苛いもので、立派に才學のある人だらうが、如何に勤勉な男だらうが、漸くに其日々々を過ごして行くと云ふ體裁であつた。《聖書に所謂》瘠せた牝牛が肥えた牝牛を食つたり、枯れた穗が實のる穗を呑んだと云ふ樣な物騷な時節であつた。豐かな收穫の季は過ぎ去つた。來るべきは飢饉である。あらゆるみじめとみすぼらしさは詩人の二字で優に代表することが出來る樣になつた。詩人の二字を聞いて、目に浮かぶのは案山子の樣な着物を着て、何度となく監禁所、拘留所の門を潛つて、牢屋へ這入るなら、キングス・ベンチが好いか、それともフリート街の方が好いか、ちやんと心得てゐる黑人である。《註、此時分に借金をして返せない者は執達吏の管理するspunging-house と云ふ所へ監禁される。夫でも始末がつかないと本式にcompterに送られる。是は負債者を收容した牢屋である。それに三つある。キングス・ベンチとフリートと今一つはマーシャルシーであつて、其うちのフリート監獄がcommon sideとmaster's sideの二部に分かれてゐたのである。Mount Scoundrelも是と同じくキングス・ベンチ監獄のうちの一部だらうと思ふがよく分らない。》如何な貧乏人でも詩人と聞いて輕蔑しないものはなかつた。また輕蔑するのも無理はない。と云ふのは、たとひ雙方の貧乏さ加減は同程度としても、向上心の度が違ふ。凌辱を感ずる度が違ふ。梯子を四つも上らなくつては足の屆かない屋根裏に住んで、暇を出された中間と一所に地下室で飯を食つて、溝浚ひ程な賃銀を得る爲に、一日十時間も翻譯をして、始終執達吏に追ひ回されて、疫神乞食の巢窟から巢窟へと宿替へをして逃げあるいて、グラツブ町にゐるかと思へば、セント・ジョーヂ・フイールドに居たり、セント・ジョーヂ・フイールドに居るかと思へば、今度はセント・マーチン會堂の後の路次裏に隱れてゐたり、夏になると屋臺見世の上へ寐たり、冬になると硝子製造場の灰の中にもぐり込んだり、揚句の果は施療院で死んで、死んだあとは共同墓地に埋められて仕舞ふ。是が少なからざる文士の運命であつた。もう三十年も早く生れたら、「キットカット」や「スクリブリラス」の會員になる資格のある文士の運命であつた。）

所謂貧乏文士の狀態は此一節のうちに極端に描き出されてゐる。尤も文學史家の中には、グラツブ街の文士を以て吾人の信ずる如く甚しき窮乏に陷つたのではないと辯解して居るものもある。例へばジョーヂ・センツベリーの如きは其一人で、『ソーシアル・イングランド』第五卷（トレール監修）の三百三十五頁にこんな事を云うて居る。――「マコーレーの敍述を見ると、十八世紀中葉の文士は是非とも困窮しなければならない樣で有るが、其實甚だ疑はしいものだ云々」と。センツベリーの理由を聞いて見ると、フイールヂングやコリンスやジョンソンやゴールドスミスの如き名流ですら、皆借金の爲に拘引せられんとしたと世間では云ふけれども、是は少々考へて見なければならぬ。成程コリンスは立派な詩人かも知れないが、其出版したものは片々たる小冊である。之を賣つて一生安樂に暮らさうとするのは十八世紀に限らない、何れの世に有つても六つかしいことだ。十七世紀にミルトンが『ラレグロ』丈で飯を食ひ、十九世紀にテニソンが『ゼ・パレス・オブ・アート』丈で糊口しようとしたなら、矢張りコリンス同樣の窮狀に陷らなければならぬ。フイールヂングは不經濟の人かも知れないが、無名の士として小說を書いた時百五十磅を得た。次には六百磅を得た位である。ジョンソンは紹介もなく金もなく學位もなく倫敦へ出て來たのみならず、彼は几帳面に勞働することを知らぬ男である。又憂鬱病に襲はれる癖のあつた人である。ゴールドスミスに至つては、二萬圓の借金を背負ひ込んで、手に入る金を湯水の樣に使ひ果たした男であるからして、一錢二錢の出入に頭を惱ましてグラツブ街に屈托してゐたとは云はれない。――是がセンツベリーの考へである。成程彼等の或者は働かないで酒を飲んだり騷いだり、無茶苦茶な浪費をした爲に祟られたのだらう。働いて金が取れぬと言ふよりも不相當に取つたものを使つたのだらう。かのボイスの如きは其好例である。其他ナサニエル・リーは行き倒れになつた。サヱジはよく野宿をした。みんな同臭味の連中かも知れない。少し年代は違ふが、かのチャタートンの如きは（異例にもせよ）矢張りこの内に屬するものである。

彼等は文學と名がつけば何でも遣る。坊主の爲に說教文を作つて遣る。古い作者の註釋をする。索引を作る。波斯の御話を翻譯する。少しも選り好みをしない。それで苦しくつて堪らなくなると、ジン酒を飲んで一時でも苦痛を免れようとする。會、金が這入ればすぐ使つて仕舞ふ。今云つたボイスの如きは一ギニーを手に入れるや否や、直ぐ料理屋へ馳け付けて、最上等の料理を誂へて第一等の酒を呑む。妻子が餓ゑ死にしようとも構つては居られない。こんな話がある。一千七百四十年頃のことであつたが、此ボイスが非常な窮境に陷つて、襯衣も上衣も何もかも質に入れ盡くした揚句、とう〳〵寢臺の上の上敷布迄借金の形に取られた。凡ての後にたつた一枚の毛布が殘つた。それで先生工風を凝らして、其毛布へ穴を開けて、穴から手を出して、膝の上へ紙をのせて漸くの事詩を書いたさうだ。このボイスと云ふ男は佛文の翻譯が出來るので、書物屋が佛書をあてがつて翻譯を賴むと、先生第一回丈譯して直ぐその原書を質に入れて仕舞ふ。本を出して遣ると又一回丈は譯す。さうして又質に入れる。質から出してやりさへすれば必ず質に入れ

て仕舞ふと云ふ呑氣な性質であつた。

有名なジョンソンが英語辭彙を出版したときチエスターフイールドの保護を退けたのは人の知る所であるが、彼が此窮境の中にあつて、あれ程思ひ切つた手紙を書いたかと思ふと、二百年後の今日に至る迄ジョンソン其人の面影が偲ばれる。私は別にジョンソンが好きな譯でもない。文にも論にもさう敬服する者でもないが、獨り此チエスターフイールドに與へた書翰丈は昔讀んだ時から此講義をやる今迄感心してゐる。感心は兎も角も、此書翰は文界にあつて個人保護の時代が永久に過ぎ去つたと云ふ記憶に値する事實を尤も露骨に天下に發表したものであるから、此點から見ても文學史上重要の意味を有してゐる。一寸御覽に入れる。諸君も定めて御承知だらう。

"Seven years, my Lord, have now passed since I waited in your outward room, or was repulsed from your door, during which time I have been pushing on my work through difficulties of which it is useless to complain, and have brought it at last to the verge of publication, without one act of assistance, one word of encouragement, or one smile of favour. Such treatment I did not expect, for I never had a patron before. ..... Is not a patron, my Lord, one who looks with unconcern on a man struggling for life in the water, and, when he has reached ground encumbers him with help? The notice which you have been pleased to take of my labours, had it been early, had been kind: but it has been delayed till I am indifferent, and cannot enjoy

it; till I am solitary, and cannot impart it; till I am known, and do not want it. I hope it is no very cynical asperity not to confess obligations where no benefit has been received; or to be unwilling that the public should consider me as owing that to a patron, which Providence has enabled me to do for myself. Having carried on my work thus far with so little obligation to any favourer of learning, I shall not be disappointed, though I should conclude it, if less be possible, with less; for I have been long wakened from that dream of hope, in which I once boasted myself with so much exultation."

（嘗て御玄關脇に伺候致候ひしより、否御玄關先にて拒絶の命に接し候ひしより、はや七年を經過致候。小生は此七年の間依然として小生の事業を繼續致候。其間如何なる困難に遭遇せしかは、愚痴の繰言とも思召あるべければわざと差控へ不申上候。此七年の辛抱にて、拙著は漸く出版の運びに至り候。寸毫の補助を受けず、一言の奬勵を蒙らず、微笑の眷顧を辱うせずして、漸く出版の運びに至り候。小生はいまだ庇護者の下に立ちたる經驗なきもの故、庇護者よりかゝる御取扱を受けんとは全く小生の豫期せざる所に候。庇護者とは人の將に溺れんとする折を冷眼に看過し、漸く岸に泳ぎ付きたる折を見計らつて、わざと邪魔ともなるべき援助を與へらるゝものに候や。小生の勞力に對する御推賞は感謝の至に不堪候。たゞ其の遲きに過ぎたるを憾みとするのみに御座候。今となりては難有く頂戴も出來かね候。貴人の推挽も世に知

られざる時の事にて候。事實上何等の利益をも受けざる邊に向つて、謝意を告白せず候とも、又天命の加護によりて成就致し候ものを、一庇護者の爲なりと誤解せらるゝを忌み候とも、必ずしも皮肉なる小憤の結果とは存じ申さず候。今日迄自力にて事業を繼續仕候以上は、此後は猶々他人の恩は蒙るまじき考に候。昔時左しも得意なりし希望の夢も、もはや醒め果て申候。）

此文章は短い割に大文字である。下らぬ小説や詩を讀むよりも愉快である。獨立の價値を解したものは誰も同意だらうと思ふ。ジョンソンを保護しようと云ふ男の方から云へば何處までもジョンソンを見縊つて居たに相違ない。何の貧乏作家がと高を括つてゐたのだらう。然しチェスターフイールドだつて別段氣狂でも馬鹿でもなければ、又無暗矢鱈に傲慢な人でもなからう。それがジョンソンを見下すならば、當時の一般文學者が貧苦の爲に不見識極まる態度を以て貴族輩に對して居つた事が分る。之を四十年前の文士の境涯と比較して見ると雲泥の差がある。彼等の多くは文學者兼政治家である。文を草する以上は民黨とか王黨とかどちらかに屬せねばならぬ。どちらかに屬して朋黨の爲に文を舞はすとなれば、大臣や勢力家と接近するのは無論の事である。スキフトは不平を以て一生を終つた人である。夫にも拘らず、かの有名なる『ステラに與へし日記』のある節を讀むと、彼が時の大臣に對して如何ばかり勢力を有して居たかが分る。かのセン・ジョンとかハーレー抔と云ふ政治家はスキフトの同輩と云はんより、或點から云へば幕僚の感がある。例へば千七百十年—十一年二月六日の條にはこんな事が書いてある。

"Mr. Harley desired I would dine with him again to-day; but I refused him, for I fell out with him yesterday, and will not see him again till he makes me amends; and so I go to bed."

（ハーレーが今日も亦一所に飯を食はうと云つて寄こした。然し斷つてやつた。實は昨日ハーレーと喧嘩をした。何とか片をつける迄は逢はない積りだ。だからすぐに寢た。）

ハーレーと云ふのは時の大臣で後にオックスフォード伯爵になつた人である。なぜスキフトが此男と喧嘩をしたかと云ふと、ハーレーがスキフトに五十磅贈つたのである。所が其贈り方が氣に喰はぬ、無禮であると云ふので、スキフトが之を峻拒した。其結果として飯も一所に食はない。中々癇癪持である。偖其次の日の條を見ると斯うある。

"I was this morning early with Mr. Lewis of the secretary's office, and saw a letter Mr. Harley had sent to him, desiring to be reconciled; but I was deaf to all entreaties, and have desired Lewis to go to him, and let him know I expect farther satisfaction. If we let these great ministers pretend too much, there will be no governing them. He promises to make me easy, if I will but come and see him; but I will not, and he shall do it by message, or I will cast him off..... and I absolutely refuse to submit to his intended favour, and expect farther satisfaction."

（今朝大臣官房詰のリュイスに逢つたら、ハーレーがリュイスに送つた手紙があつた。自分

と和解したいと書いてある。けれども斷然跳ね付けてやつた。是ぢや承知が出來ないと話して呉れ玉へとリユイスに賴んだ。大臣だの何だのと云ふ連中を威張らして置くと癖になる。制禦が困難になる。ハーレーは逢ひに來てさへ呉れゝば不都合のない樣にすると云ふが、さうは行かない。何時迄も使で用を辨じさしてやる。でなければ放り出して仕舞ふ迄の事だ。……ハーレーは斯うする積りだとか、あゝする積りだとか旨い事を云ふが、此事件が滿足に落着する迄は眞平御免だ。)

と。同二月十七日の條を見ると、

"I took some good walks in the Park to-day, and then went to Mr. Harley. Lord Rivers was got there before me, and I chid him for presuming to come on a day when only Lord Keeper and the secretary and I were to be there; but he regarded me not; so we all dined together and sat down at four……"

(大分公園を歩いて、ハーレーの所へ行つた。行つて見ると、リヴー卿が來てゐる。Lord Keeper と大臣と自分と三人丈の會だのに、君は失敬だと云つて詰問してやつた。然しリヴーは歸らなかつた。そこで四人で餐を食つた。四時着席……。)

二月廿五日にはかうある。

"I dined to-day with Mr. Secretary St. John, on condition I might choose my company, which were Lord Rivers, Lord Carteret, Sir Thomas Mansel, and Mr. Lewis;……and I did it in revenge of his having such bad company when I dined with him before……"

(今日は大臣セン・ジョンと飯を食つた。但し伴食者は自分の隨意に選ぶと云ふ條件で有つた。自分はリヴー卿、カーテレット卿、サー・タマス・マンセル及びリユイス等を擧げた。是は此前セン・ジョンと一所に飯を食つた時いやな男計りだつたから、其復讐にやつたのである。)

彼は斯の如く大英國の宰相及び大臣を眼下に見下して居つた。又見下す丈に彼等から畏敬されて居た。尊大の點に於てはスヰフトもジョンソンも異なる所はない。唯貴族輩、政治家輩から尊敬せらるゝ程度は斯の如く違つて居た。アン時代の文學者とジョーヂ時代の文學者の地位を比較する上に於て面白いと思つたから此二人を例に出して見た。

九　倫敦以外地方の狀況

以上で一應十八世紀に關する敍述の一般を終つた筈であるが、今一つ附記して置きたい事がある。それは外でもない。卽ち同時代に於ける倫敦以外の地方の狀況である。倫敦の景況は先に述べた通りであるから再び繰り返す必要はないが、地方の有樣は少し變つてる所丈でも一言して置く方が便利である。存外文學に關係があるからして等閑には出來ない。詰り貧乏な文士連が前に

話した様な窮狀に陷るのも、矢張り此地方の景況――教育やら、生計の程度やら、經濟の事情やら――に關係して居るに相違ない事は明らかである。

十八世紀の田舍は今日に比較すると大變開けて居らなかつたと云はんよりは寧ろ野蠻と云つて然るべき位であつたらしい。前に倫敦の十八世紀と二十世紀に非常な變化のある事を話したが、田舍の變化は倫敦の變化よりも猶一層甚しかつたらしい。當時は汽車もなし、電信もない。夫に街道が泥濘膝を沒すと云ふ漢語で形容の出來る有樣で、河と來たら流れつきりで橋も何も架かつて居なかつた。――但し悉くではない。

斯の如き交通の不便から起る結果は考へなくても明瞭である。詰り田舍は田舍、都會は都會と各獨立して、其間に劃然たる區別が出來て仕舞ふに極まつてゐる。彼等は己の村に住んで、己の家に起臥する丈である。生涯大都會の樣子を知らず、又都から來たものには一人も遇はずに死んで了つた位である。一七七〇年に本屋の主人でハットンと云ふ男が其生地のバーミンガムからして古戰場の見物旁レスターシャーのある村へ行つたら、そこらの者がハットンを見て妙な奴が來たと云ふので犬を嗾しかけたさうだ。ジョン・ウエスリーが地方を旅行した時には、村民が大聲を擧げて車の後から追ひかけて來た位である。現今日本の寒村僻邑へ行つたつて斯んな響應振りはある譯の者でない。彼等が都會の狀況を知る機會は、まづ田舍廻りの小商人を捕まへるか、又は近所の庄屋の所へ來た新聞の古いのを臺所から拾つて來て、隣人を集めて朗讀する時位のもの

である。第一其庄屋なる者が今の紳士などと云ふ品格は無論ないので、ある人の評によると「鄕士の大多數は單なる植物同然で、同じ地面の上に生えて、同じ地面の上で立ち枯れになるに過ぎなかつた。」彼等は何と云ふ仕事もしない。たゞ狐狩り計りやつて居た。寺の坊主は又ひどく貧乏な者であつて、百姓の賃銀以下の費用で漸く生活してゐた。從つて品格もない、書物棚も入らない。

その他未開の例を一二擧げると、糊づきの狀袋さへ出來て居なかつた。手紙を書くと、上紙へ封臘をべたりと押したものである。會食があつても飲食以外に面白い談柄を持つてゐるものは丸で無い。隨分な物持でも自分で織つた衣服を着る。少々上等な衣服になると子々孫々に傳へる。恰も今日の日本人の樣である。チャールス二世時代の帽子をジョーヂ三世の時に被つて居た連中さへあつたと云ふ。勞働者抔は肉も食へなかつた。普通の麵麭さへ食はなかつたものもゐる。大麥麵麭を嚙つて居た。猶述べる事は澤山あるが、冗長になるから是で已めて置く。

十八世紀の社會風俗を研究するに都合の好い書物は、講義中にも紹介して置いたが、第二編の結末に達したから纏めて竝べて見ると、下の數書である。

W. C. Sydney 著 *England and the English in the Eighteenth Century.* 二卷
W. B. Boulton 著 *The Amusements of Old London.* 二卷
Dr. Traill 編修 *Social England.* 十八世紀の部

W. Besant　著　*London in the Eighteenth Century.*　一卷
A. Barbeau　著　*Life and Letters at Bath in the Eighteenth Century.*　一卷
W. Hogarth　畫集　二卷

是等の書物には、普通の歴史又は文學史抔に書いてない裏面生活の狀態が述べてある。普通の參考書とは趣が違ふから掲げて置く。其他の論說、原作、又は批評、歴史等で此講義に緣故の深いものは、其都度紹介した丈で澤山だから省く。以下には斯う云ふ性質の參考書が出て來ない。だから特別な目錄を付けない。然し他人の說を引くときは、其出所を明らかにして責任を明らかにする。

第三編　アヂソン (Joseph Addison. 1672—1719) 及び スチール (Sir Richard Steele. 1672—1729) と 常識文學

是から愈本論にかゝる。前申した通り十八世紀の文學と云つても、文學は長い河の流の樣に繼續して居る者だから、途中で無理に引きちぎつて、是から十八世紀の文學だと云ふのは甚だ不自然である。然し是が不自然だからと云うて其前に遡れば、又其前から始める所に不自然がある譯だから、詰り順を追つて英文學の初めから出立しなければならなくなる。だから不自然でも仕樣がない。矢張りいゝ加減に始めなければならない。ゴッスの『十八世紀文學』を見ると、王政復古後から始めて居る。詩はウオラー (Waller. 1605—1687) デナム (Denham. 1615—1668) カウレー (Cowley. 1618—1667) 邊から、脚本はジョン・ウイルソン (John Wilson. 1622?—1696?) か

ら、散文も亦一六六〇年あたりから論じて居る。然し私は一七〇〇年を基點として出立する積りである。無論文學者も人間の一部であるから一七〇〇年に古いのが悉く死んで、一七〇〇年に新しいのが悉く生れると云ふ譯はない。十七世紀と十八世紀の兩方に跨つて生息して居る者はいくらでもある。從つて其著述も兩世紀に跨つて居るのも少なくはない。夫だから前後の關係上已むを得ぬ時は十七世紀迄遡る事もあらう。又は十八世紀に入り込んだ部分を切り棄てて仕舞ふ事もあらう。其邊は臨機應變として置いて、先づ大體は一七〇〇年以後から論じ出す積りである。扨一七〇〇年から論じ出すと云ふ事を目安に置いて文壇を見渡して見ると、一七〇〇年にはトムソンが生れて居る。同時にドライデンが死んで居る。四年經つてスキフトの『桶物語』(*A Tale of a Tub*)が出版されて居る。夫から五年目に(一七〇九)ポープの *Pastorals* が出て居る。同年に雜誌『タトラー』が出現した。此三四人の作者卽ちスキフト、ポープ、アヂソン、スチール等は互に珈琲店へ寄り合つては談笑に其日を暮らした朋友である。今云ふ通りの一七〇〇年を標準として始める以上は、先づ是等から論じて行かなければならぬ。デフオーの如きは比較的古いかも知れぬが、デフオーが眞の文學者として小說を書き始めたのは一七二〇年頃の話であるからして、寧ろ後廻しにしても差支ない。そこで以上三四人の內、どれから論じ出しても差支はないが、スキフトの『桶物語』は彼の『ガリヴァ巡廻記』と同じく小說と云うてよいか、比喩譚と云うてよいか一寸風變りの者であるのみならず、『ガリヴァ』程の影響を文壇に與へて居ない。ポープは固より詩人である。一流の祖と云はれる人には違ひないが、詩は十八世紀の特產物ではない。たゞアヂソンとスチールは此世紀にあつて一種淸新な文學を書き始めた人で、一方から云ふと、前代の性格描寫(character sketches)の著しい發展とも思はれるし、又體裁から云つても、定期刊行文學の發達の一部を形造る一連鎖となつて居るし、又其動機から云つても、十八世紀一般の傾向をあらはして居るし、色々の點から云うて興味がある。それで先づ此アヂソン、スチール兩人から論じ出さうと思ふ。其前に當時の文學者の團體はどんな者から成立して居つたか一寸一言して置いたら諸君の參考になるだらうと思ふが、是は余自身が御話しするよりも、此時代に精通した研究家の說を引用する方が確かでもあり、又有益であるから、さうする積りである。レスリー・スチーヴンが前に一寸紹介した『十八世紀に於ける英國文學及び社會』と云ふ講義の五十三頁以下に當時の文學機關の組織を論じてから書いて居る。

"It is made up of men of the world — 'Wits' is their favourite self-designation, scholars and gentlemen, with rather more of the gentlemen than the scholars — living in the capital, which forms a kind of island of illumination amid the surrounding darkness of the agricultural country — including men of rank and others of sufficient social standing to receive them on friendly terms — meeting at coffee-houses and in a kind of tacit confederation of clubs to compare notes and form the whole public opinion of the day. They are conscious that in them is

concentrated the enlightenment of the period. The class to which they belong is socially and politically dominant — the advance guard of national progress. It has finally cast off the incubus of a retrograde political system; it has placed the nation in a position — of unprecedented importance in Europe; and it is setting an example of ordered liberty to the whole civilized world. It has forced the Church and the priesthood to abandon the old claim to spiritual supremacy. It has, in the intellectual sphere, crushed the old authority which embodied superstition, antiquated prejudice, and a sham system of professional knowledge, which was upheld by a close corporation. It believes in reason — meaning the principles which are evident to the ordinary common sense of men at its own level. It believes in what it calls the Religion of Nature — the plain demonstrable truths obvious to every intelligent person. With Locke for its spokesman, and Newton as a living proof of its scientific capacity, it holds that England is the favoured nation marked out as the land of liberty, philosophy, common sense, toleration, and intellectual excellence. And with certain reserves, it will be taken at its own valuation by foreigners who are still in darkness and deplorably given to slavery, to say nothing of wooden shoes and the consumption of frogs.”

（文學機關を組織するものは俗情に通じたる世間的人物である。所謂‘wits’である。彼等は自ら稱して、普通 wits と呼んでゐた。wits と云ふと、まあ旦那と學者の混つた樣なもので、其混り方の歩合を云ふと、學者よりも寧ろ旦那の方が勝つてゐる。無論都に住んでゐる。《其時分の都と云ふと暗い田畠で取り圍まれたなかの、一種の燈明に比較すべきものである。》その連中には地位の高いものもゐる。地位は夫程でなくても、之と對等の交際が出來る位な身分のものが這入つてゐる。冥々のうちに倶樂部が同盟したと同じ結果になるが、珈琲店で寄り合つては、意見を交換して、一代の輿論を作らうとする。彼等は時の文化を一身に集めたやうな氣でゐる。彼等の屬する階級こそ社會的に云つても政治的に云つても優勢である。國家的進歩の先鋒である。彼等は遂に時勢後れの政體に對する迷霧を破つた。彼等は國家を前古未曾有の重要な地位に据ゑた。全世界に向つて秩序ある自由の模範を示した。僧侶をして精神的主權者たるの要求を撤回せしめたものは彼等である。思索界に於て、迷信、僻見の舊權威を打破したものは彼等である。牢たる團結によつて標榜せられたる專門的知識の虛僞を曝露したものは彼等である。彼等は理知を信ずるのみである。理知とは常人の常識に常程度に訴へて戻らざる原則を云ふのである。彼等は自然教を信ずるのみである。自然教とは條理に暗からざる人の明らかに認めて、平易にして他に說明し得べき眞理となす所のものである。ロックは彼等の先覺者である。ニュートンは彼等の能力を活きながら證明する豪傑である。自由、哲學、常識、寬容、能力卓越の國柄として、天祐を受けたるは英國である。——是が彼等の意見であつた。全

然贊成する譯にも行かぬだらうが、まづ大體の上から評すれば、當時の外國人は彼等自身の評價を、彼等自身の言葉通りに受けても宜いかも知れない。當時の外國人は木履を穿いて蛙を食つてゐた位のものだ。さう手苛い事を云はないにしても、奴隷はあるし、文明は進まないし、氣の毒なものであつた。）

是は單簡であるが明瞭である。のみならず必要の事項を悉く含蓄して居る。余が此講義の冒頭に述べた十八世紀の狀況一般と題する諸項を綜合して考へて見たら、成程當時の文學者なる者の地位、資格はかうもあらうと思はれるであらう。

かゝる現象を生じた原因を說明してスチーヴンは當時の政治狀態と智力狀態の二つを擧げてゐる。第一に、立憲政體の下に立つ政治家はもう往時の樣にたゞ宮廷の鼻息を窺つて行動する必要がない。彼等は專制君主と戰つて大勝利を得た。英國は言論自由の國となつた。宗教寬假の國となつた。立憲的秩序の國となつた。戰爭には大勝利を得た。昔アーメーダを擊沈した時と同樣の刺激を受けた。凡て此等の成功は皆自由の名を以て得たのである。自由とは甚だ曖昧な言葉だけれども、英人の胸中には一種の感慨を與へる歷史的因緣がある。英國は自由の國土なりとは彼の佛國人が大に羨んだ所である。第二に、學問卽ち智力の方から云へば、十八世紀を支配すべき哲學、宗教、政治の三者に亙つて永く其基礎を置いたロックが彼等の同胞の中に出てゐる。ロックはスピノザやデカルトの如く論理的に一貫した議論は立て得ないかも知れない。又バークレーや

ヒュームの如く雋妙な哲理を發揮し得ないかも知れないが、當時に於ける根本的信仰の解釋者として一世を支配すべき人であつた。卽ち教育ある分別のある社會の常識を代表して居る哲學を組織した人である。かの哲學者ならざるアチソンの如きが少々哲學者ぶらんとする時は何時でもロックを引用する位に迄常識に富んだ哲學者であつた。ロックの著書を讀むと教育ある人の普通使用する言葉で書き流してある。哲學の歷史を研究して當時に至ると所謂煩瑣哲學の臭味のないのが著しく目につく。勿論煩瑣哲學なるものが其前から攻擊を受けて居たには相違ないが、大學からはまだ驅逐されなかつたのである。十七世紀の僧侶などになると其專攻する所の一派の神學に在つては、到底俗人の嘴を容るゝ能はざる程の奇妙な三段論法の訓練を受けた位である。彼等は古代の教祖の著書を悉く暗誦しかねまじき哲學者であつた。哲學者と云はんよりは一種の運動圖書館であつた。だから彼等の說教と云ふ者は古書古典の引用のみで充滿してゐる。世紀の末にチロットソンと云ふ神學者が出て漸く此弊風を一變した。神學に於けるチロットソンは恰も哲學に於けるロックと同樣の手柄がある。說教をしても唯各人の有して居る理性に訴へる。別に六つかしい引用や、黴臭い書籍などを振り廻さない。從つて俗人でも頭腦さへあれば理解が出來る。英國の散文は實に此時代に發達したと稱せられて居る。專門の學者でなければ分らぬ樣な言句を使はぬ樣になつたのも此時代である。錯雜極まる羅甸流の構造を棄てたのも此時代である。其先鞭をつけたのはドライデンであるが、ドライデンは其文章をチロットソンから得たのである。

凡て是等の變化を綜合して見ると。――政治に至つて此變化は寛容（トレレーション）となる。俗人も自家自在の意見を有することを得る。學問にあつては是が唯理論（ラショナリズム）となる。卽ち理性――人々の所持する共有の理性――に訴へて判斷する。文學に在つては衒學を嫌ふ、換言すれば一般の人間の常識で理解の出來得る樣な文體を選ぶ事。總べて是等が落ち合つて前に引用した樣な特色のある文學機關の組織が成立した。――是がスチーヴンの解釋である。要領を得た立派な考である。冒頭に是丈の事實を承知して置いて、本論を聞いて貰ふ。有名なる『タトラー』（*The Tatler*）『ガーヂアン』（*The Guardian*）『スペクテーター』（*The Spectator*）はかゝる風潮を受け、かゝる時勢に際會して、かゝる態度を以て世間を觀、事物を察するwits――アヂソン及びスチール――によつて計畫せられ又發行せられたのである。私は彼等の文章と彼等の生息せる時代とを實例によつて比較し、又彼等の文章上に如何なる程度に於て個人性が發揮せられて居るかを研究し、又彼等の文章の功罪を指摘して見ようと思ふ。これが此編の重なる目的である。然し一寸記憶して置くべき事がある。上記の刊行物は一種の文學的述作であると同時に又一種の定期發行の文字であるからして、今云つた主要の點を論ずる前に英國の新聞事業を歷史的に一瞥して置く必要があると思ふ。

遠く新聞の起源を尋ねると、羅馬時代に始まるのださうである。無論當時の事であるから印刷された者ではない。唯日每の出來事、官吏の任免黜陟等を記した板を公共の場所に揭げて、衆庶の觀覽に供した迄の事で、Acta Diurna と稱したとある。方今用ふる「ガゼット」と云ふ話はも

とエニスから來たので、是も其頃觀覽所にかけて衆人に見せた者ださうだ。英國ではバーリー卿と云ふ人が初めて新聞を起したと云ふが、其動機を尋ねると西班牙艦隊が英國へ攻めて來ると云ふ當時、之を迎へ擊つ爲に、一國の元氣を鼓舞して敵愾心を喚起する必要があつた爲からださうだ。然し是はどんな者であるか、現今傳はつて居らんから分らない。ガーネット及びゴッスの『英文學史』卷二、百八頁に英國古代の新聞『イングリシュ・マーキュリー』の五十一號が昔の儘で轉載されて居るけれども、是は僞物である。著者自身も其僞物なることを斷つて居る。眞正なる確實なる新聞は『ゼ・ウイークリー・ニウス』と號する者で、一六二二年の五月二十三日に初めて發行した。是は無論日刊ではない、週刊で、編輯者の名をナサニイル・バターと云うた。其後色々なのが出たが、『ゼ・インテリゼンサー』と云ふのが彼のサー・ロジヤー・レストレンジの發行にかゝるものである。（一六六三年八月三十一日。）此『インテリゼンサー』が後に『ゼ・ロンドン・ガゼット』に變化し（一六六五年）、『ゼ・ロンドン・ガゼット』が又『ゼ・オブサーヴエートア』に變つた。其時彼の革命が起つたのである（一六八八年）。此革命が所謂君主神權說を破壞して、議院制度の建設となり、新教宗義の基礎となり、國家の收入及び支出は凡て下院の管理する所となつたと同時に、出版の自由を公衆に與へたのである。（尤も檢閱係の官職はまだ存してゐた。相當の束縛と所罰もあつた。）

それから愈十八世紀に入るのであるが、十八世紀に入つて一寸人の目を惹くのは、初めて日刊

新聞の出來た事である。之は『ゼ・デーリー・クーラント』と云つて、一七〇二年の三月十一日に出た。然し無論つまらぬ者である。今一つ注目すべき事はデフオーの發刊にかゝる『ア・レヰユー・オブ・ゼ・アフエアス・オブ・ステート』と稱する新聞體の者である。是は一週二回の發行であつたが、賣れるので一週三回にした。學者の說によると是が『タトラー』の源であると云ふ話である。

然し其內容は大變違ふ。デフオーは小說家であると同時に政客であつた。彼の編輯にかゝる隔日新聞は純然たる政治的目的を以て發刊された者である。處がアヂソンやスチールになると一面に於ては政治家に相違ないが、彼等は其政治的意見を發表する爲に『タトラー』や『スペクテーター』を書きはしなかつた。だから目的が根本的に違つて居る。是に次いで起つた者が王黨の機關『ゼ・エキザミナー』である。是にはボリンブローク、スキフト、アターベリー、プライアー抔が執筆した。民黨は之に拮抗する爲に『ホイツグ・エキザミナー』を起してアヂソンを其主筆に推した。是から論じようとする『ゼ・タトラー』は恰も此際に生れ出たのである。

此『タトラー』は一七〇九年四月十二日に一號を出して、一七一一年の正月二日を以て廢刊した。（一週三回。）次いで同年三月一日に『ゼ・スペクテーター』が出た。是は日刊で一七一二年十二月六日に至つてやんだ。續いて『ゼ・ガーヂアン』の一號が一七一三年の三月十二日に生れて同年の十月第百七十五號を以て往生した。（日刊。）翌年一七一四年の正月に、一旦中絕した『スペクテーター』が又再興して、遂に其年の十二月迄繼續した。以上は此三種の文學の興廢に就いての年月である。調べて見ると、三四年の間に前後して起つたり倒れたりしてゐる。時期の前後する如く內容も殆ど同じ性質である。筆者も同じく二人である。二人とは卽ちアヂソンとスチールである。尤も外の文士も時々は助勢を與へて居る。之を區別して見ると以上の刊行物の三種に涉つて、スチールは五百十號を擔任してゐる。アヂソンの受持は三百六十九號である。スキフトは二號程寄草して手傳つた。コングリーヴは『タトラー』にたゞ一文を載せて居る。ポープは『スペクテーター』に三度書いた事がある。『ガーヂアン』には八度寄稿した。だから以上の三種を通じて大體の責任者はアヂソンとスチールになる。尤も發起人は何時でもスチールであつた。現に『タトラー』を發行した時抔は、アヂソンは公用でアイアランドに出張中で、誰が主筆だか知らぬ位であつたが、倫敦へ歸つてからスチールが發起したのだと聞いて、初めて執筆者の一人になつた位である。けれども、アヂソンはスチールに劣らざる位に此方面に盡力した人であるから、評論の際彼をスチールの下に置くことの出來ぬのは無論の事である。且詞藻の上から云つても、文壇に貢獻した功績の上から云つても、アヂソンの方がずつと重きを置かれて居るのだから、其點は御互に承知して置きたい。

次に起る問題は是等雜誌の性質如何であるが、これも私が答へるより斯道に權威のある古人が旨く答へて居るから、それを引用する。ジョンソンが書いたアヂソン傳中に斯うある。

"To teach the minuter decencies and inferior duties, to regulate the practice of daily conversation, to correct those depravities which are rather ridiculous than criminal, and remove those grievances which, if they produce no lasting calamities, impress hourly vexation, was first attempted by Casa in his book of Manners, and Castiglione in his "Courtier;" two books yet celebrated in Italy for purity and elegance, and which, if they are now less read, are neglected only because they have effected that reformation which their authors intended, and their precepts now are no longer wanted. Their usefulness to the age in which they were written is sufficiently attested by the translations which almost all the nations of Europe were in haste to obtain.

This species of instruction was continued, and perhaps advanced, by the French; among whom La Bruyere's "Manners of the Age," though, as Boileau remarked, it is written without connection, certainly deserves praise for liveliness of description and justness of observation.

Before the "Tatler" and "Spectator," if the writers for the theatre are excepted, England had no masters of common life. No writers had yet undertaken to reform either the savageness of neglect or the impertinence of civility; to show when to speak or to be silent; how to refuse or how to comply. We had many books to teach us our more important duties, and to settle opinions in philosophy or politics; but an *Arbiter Elegantiarum*, a judge of propriety, was yet wanting, who should survey the track of daily conversation, and free it from thorns and prickles, which tease the passer, though they do not wound him."

（一寸した禮儀だの細かい作法だのを教へたり、日常の談話を改良したり、罪惡ではあるまいが、見にくいと思はれる陋習を矯めたり、又は永久の災とならない迄も時々刻々に不快を感ぜしむる弊害を除いたり、――斯ら云ふ方面の著述は、カサの禮法書と、カスチリオネの『コーチア』とが嚆矢の樣に思はれる。兩書共優雅高潔の趣を具へてゐるので、以太利では今猶盛に行はれてゐる。尤も昔の樣に讀み手が多くないかも知れないが、それは著者の思はく通り改革の目的を達したからの事で、書中の教訓が不用に屬した爲と見れば宜い。出版當時是等の著述の有益であつた事は、全歐の人が爭つて之を飜譯しようと力めたのでも充分に分る。

此種類の教訓を持續し又進前せしめたものは佛人である。就中ラ・ブリユイエルの『今代の禮法』が最も效力があつた。ボアローは此書を評して、減裂だと稱したが、敍述に活氣ある點に於て、觀察の正鵠を得たる點に於て、充分賞讃の價値がある。）

英國に在つては、脚本家を除くの外、通俗生活に筆を着けたものがない。これあるは『タトラー』と『スペクテーター』から始まると云つて宜しい。無愛想も過ぎれば野蠻になる。丁寧も無暗だとぶしつけに陷る。斯ら云ふ缺點を矯正しようとした作家はまだ一人もなかつた。其

他何時口を利いて宜いか、又何時差控へべきものか、斷るにはどうして斷るもの、應ずるにはどうして應ずるものか、『タトラー』と『スペクテーター』が出る迄は誰も教へて呉れ手がなかつた。重大な倫理問題に關して義務の意義を說いたものはある。哲學、政治の大爭論に斷案を下したものはある。けれども日常談話の道程を測量して、通行人を傷つけない迄も、往來の煩ひになる茨、とげの類を取り除かうとした趣味の主宰者、禮法の判決者は是より以前にまだ出た事が無かつたのである。)

『タトラー』『スペクテーター』『ガーヂアン』の英國文壇に於ける地位及び其性質はジョンソンの言によつて明らかである。此上に何も云ふ必要はない。私は是から其內容に就いて聊か解剖的批評を試みて、其內容の精神がどの位まで時代精神をあらはして居るかを紹介しようと思ふ。

(一) 最前話した中に十八世紀は常識の世であるといふ言葉を使つた。今研究しようとしつゝあるアヂソンは嘗て詩を作つて、スペンサーの如き浪漫的な詩は「理智の時代」を樂しましむるに足らんと云うて居る。すると此世紀の特色なる常識は是等の三種の文學中にあらはれて居るだらうと云ふ考が先づ浮かぶ。調べて見ると果してさうである。常識は解釋の仕樣で色々な意味になる。(い) 明快なのも常識の表現である。文章ばかりではない、內容にも毫も不可思議な分子を容れないのである。(ろ) 問題が日常に見聞する以外に涉らないで、平時平人の觀察で滿足して居るのも常識である。(は) 過度を嫌ひ突飛を忌むのも常識である。先づ此三點を驗べて見る。

(い) 『スペクテーター』の第百五十九號に『マーザの幻夢』と題した一文がある。是はよく人の讀んで知つて居る文章である。ある人が變怪に遇つて岩山の天邊に連れて行かれる。そして恐ろしいやうな幻を見ると云ふ筋である。然しながら讀んで見ると一向に神祕的な所がない。神祕的に見える所は悉く作者に依つて說明されて居る。從つて理解の出來ぬ所はない、よく分る。よく分るのは結構である。然しよく分ると云ふのがよく感ずると云ふ譯でない。否ある物になるとよく分る樣にした爲に却てよく感じなくなつたと云ふことも云ひ得る。變怪がマーザに向つて Cast thy eyes eastward and tell me what thou seest. (東の方を見ろ、何が見えるか云へ。) 抔と云ふ所は譯すと駄目だが原文で讀めば莊重である。マーザが之に答へて、I see a huge valley and a prodigious tide of water rolling through it. (大きな谷が見える。大きな水が谷の中を流れてゐる。) と云ふのもよろしい。此問答丈で澤山である。所が此谷と此水を變怪が說明して居る。The valley that thou seest is the vale of misery, and the tide of water that thou seest is part of the great tide of eternity. (谷は不幸の谷である。水は永劫の流である。) と云ふのが其言葉であるが、折角の感興も此二句、殊に不幸の谷云々の一句の爲に打ち崩されて仕舞ふ樣に思ふ。マーザの答を聞くと共に、讀者は腦中に雄大なる谷と汪洋たる水を描き出す。化物が其名を說明するに及んで又聞いて見ると、谷は不幸の谷だと云ふ。河は時間の流だと云ふのだから、頭中にはすぐ一轉換が起る。扨は眞の谷でもない、眞の河でもない。單に比喩的の河と谷であると思ふ樣になる。

之を思ふと同時に今迄描いて居た腦中の大景色は消えて仕舞はねばならぬ。尤もアヂソンは此名前によつて人生の苦痛と永久に流るゝ時とをあらはし度いのである。あらはしたいのみではない、是非説明したいのである。もし説明をしなければ荒誕不稽の物語と一般にして、何等の寓意も假托もないものとなつて仕舞はねばならぬ。さうなつては常識に反するのである。常識にはづれた狂氣染みた事は教養ある紳士のやる事ではない。だから是非共此谷は何をあらはす谷で、此河は何の記號になる河であると云ふ事を是非理解させて置きたいのである。理解させる方はどこ迄も理解させたいが、感得せしむる事は、之が爲に却て減じて仕舞ふと云ふ眞理には氣が付かなかつたと見える。昔から常識の發達した人に感じの強い例はない。ある程度以上に強烈な感じを有してゐるものは狂人であると、所謂 wits なるものは解釋して居たのだから、アヂソンが感興に重きを置かないで、わざと説明を加へて不可思議を可思議に翻譯し、幻像を比喩に崩したのは十八世紀の文學者たるアヂソンのアヂソンたる所である。

然しいくら感じが乘つても何の意味か分らなくてはならぬ、人生問題を比喩的に説明したと云ふ事を人が理解しなくつては行かぬと主張する人があるかも知れぬ。一應は尤もであるけれども、是は必ずしも感興を害して迄も説明する必要はない筈である。浮世の苦難とか不幸とか云ふものを圖で示せばかうだと説明するよりも、ある物を假つて浮世の苦痛を直覺的に讀者に悟らしむるのが文學者の手際である。直覺と云ふのは何だか曖昧な言葉であるなら暗示すると云つてもよろ

しい。暗示には感じ丈あつて理由が分らぬ事がある。從つて神祕的である。從つて常識を滿足せしめない事になるかも知れない。

不幸の谷や永久の時の流だけなら是でもまだよろしいが、其下にマーザが I see a bridge standing in the midst of the tide.（橋がある。）と云ふと、其橋が人生だからよく見ろと變怪が注意する。するとマーザの答が斯うである。Upon a more leisurely survey of it, I found that it consisted of threescore and ten entire arches, with several broken arches, which added to those that were entire, made up the number about an hundred.（よく見ると橋にはアーチの數が七十ある。其他に壞れたのも大分見える。みんな合はせると百程になる。）此一句に至ると前の傾向が一層明らかになる。あの橋が人生だと云ふのは何の意味もない事で、唯河が時の流だから、其流に懸けてある橋は人生だと妙に緣をつけた丈である。子供が疊の上でこゝが御湯で、此所が着物を入れる所よと相談で極めてゐる樣なものである。常識に訴へると云ふけれども、常識よりも淺薄な器械的な約束に過ぎない。のみならず其橋のアーチの數が七十あると云ふのは人生七十と云ふ西洋の陳套語から出たもので、橋を人生とすればアーチの數が七十あるべき筈だ抔と考へるのは福引の落ちと同然である。理智一片を動かすにしても、もう少し深い所がなくてはならない。——これは一例である。例だから全斑を窺ふに足るものとして紹介する。例外を例に引いてアヂソンを故意に貶したものと思つては不可ない。

（ろ）前段に當時の政治と文學とは密接な關係を有して居ると述べた。政治の中心は無論倫敦である。政治に關係のある者は、貴族若しくは貴族的傾向を有した人間であつて、社交上流行の中心である。從つて政治家兼文學者なるアチソンやスチールが自ら流行的紳士を以て許し、自らwitを以て任じ、しかも都人士のみを眼中に置いて、日毎に遊戯半分の筆を舞はすならば、其述作の性質は豫想するに難からずと云つても差支ない。

彼等の作物は都會の空氣を以て飽和してゐる。私はあながちに都會の空氣を非難する積りはない。古來の文學者中、傑作雄篇と稱せられるもの――ことに小說の如きは都會生活に關係のあるものが多い樣に思はれる。けれども其の傑作たり雄篇たる根本義を尋ねて見ると、都鄙の區別から起つたのではなくつて、それ以上に立ち入つた或物を描き出してゐるからである。それを委細に述べる必要もないから、諸君も御同意と見做して略して行く。又觀察のしやうや、經驗の具合や、暗示の受け方や、變化の區域や、人間の複雜な發達や、事件の進行の模樣や、凡て色々な點から見て、都會でなくては研究も出來ず、描寫も六づかしい場合が澤山ある。其澤山あるうちには、一つでも見逃さうものなら、又書き損なつて仕舞はうものなら、文壇――廣く云へば社會が永久に損失を受けた樣な氣のするものもあるだらう。私はあながちに都會の空氣を非難するものではない。

現にアヂソンやスチールの書いたものを讀むと、當時の倫敦は斯う云ふ有樣であつたかと、恰も一部の風俗史に對するやうな興味が起る丈でも結構である。然し、都會の風俗は、人類發展の一停車場として、吾々の注意を惹くには違ひないにしても、其風俗を作り上げた人間の內部裏面の消息迄も此表面上の敍述中に充分含んでゐると思ふのは間違ひである。人間を捕へたのと、其人間の manners 丈を捕へたのとは大分違ふ。同じ小說にしても、此兩樣の差違は瞭然として深淺厚薄の感に等級を生じて來る。まして兩人の書いたものは多くは斷片的で普通の小說程に纏まつてゐない。だから彼等の寫した都會の空氣は、都會一般の空氣である。甚だ明瞭な樣で、又甚だ朦朧たる人間の描寫である。鮮やかに人が動いてゐるが、切實に人が生きてゐない。飯を食ふ人の箸の持ち方は分るが、箸を持つ主人公の何者たるかは分らない。又其箸の持ち方から想像出來る樣にも書いてない。

私はあながちに都會の空氣を非難するものではない。又都會的空氣の描寫を忌むものでもない。もつと讓步して云へばアヂソンやスチールの寫し出した都會の空氣にさへ感謝の意を表するものである。けれどもアヂソンやスチール以上の觀察や感想や解釋が都會的生活の上に於て充分なし得らるゝ餘地のある事を信じて疑はぬものである。

何故に彼等があの程度にとゞまつて、夫以外に一步も向上の道を開かなかつたと考へて、私は彼等が自己の生息してゐた都會的空氣に災せられたものだと斷じた。私の非難したいのは、寧ろ彼等の觀察眼を眛ました意味に於ての一種の都會的空氣を云ふのである。

都會は一國の中心である。人の競つて集まる所である。金の多い所である。娯樂の多い所である。餘裕の多い所である。當時の英國は前にも述べた通り全歐で最も優勢な地位を占めてゐた、少なくとも英國人自らはさう考へてゐた。其優勢な英國の首府が倫敦であつて、倫敦の金と娯樂と餘裕とを比較的に支配する地位にあるアヂソン抔の心持はどんなものであらう。已に足りて外に待つなしと云ふ言葉が一番よく彼等の境遇をあらはしては居ないだらうか。左右前後を見廻しても刺激がない。佛蘭西が恐ろしくも獨逸が怖くもない、國家は安泰である。才學、文章は自分が一番えらい。社會と風俗は自分が一番よく心得てゐる。政治上の黨派はあるかも知れないが、文學上に劇烈な戰爭などはない。丁度下町邊の大町人の旦那の樣なものである。自分一人が通人で、物がよく分つて、酸いも甘いも嚙み分けてゐて、何處へ出てもちやほやされて、萬事にそつがなくつて、意氣で上品で——一口に云へば極めて低級な程度に於ける全智全能の神である。

斯う云ふ人は萬事をもう卒業してゐるのだから、決して研究心や向上心を起すものではない。自分以外に自分と同程度、もしくは同程度以上の種類の違つた人間が存在し得るとは決して認めない。たま〳〵そんな人に出逢へば氣の毒なものだとして仕舞ふ。だから凡てが得意である。云ふ事が樂天的である。

それで生活問題に追はれようぢやなし。（スチールと云ふ男はよく借金取りに追ひ廻されたが、是は無茶遣ひをする馬鹿なんだから、實際追はれてゐるんではない。冗談半分に逃げてゐるやう

なものである。）人生の大問題を考へようぢやなし、生死の難關を切り拔けようぢやなし、肉の束縛を苦しがるんぢやなし、人間の奥迄切り込んで、自分を曝露しようと云ふんぢやなし、まあ呑氣である。呑氣だからして強ひて事件を拵へる。無理に拵へる事件だから勢ひ煩瑣になる。肉汁を吸ふのにちゆう〳〵云はせるのは下卑てゐるとか、紋付の羽織は野暮だとか、女にはかう云ふ風に御辭儀をするものだとか、默つて拜聽してゐれば大變な所へ連れて行く。

其上都會は氣の移り易い所である。漫然として一町も歩いてゐると、家を出た時とは了見が違つて來る。又一町も歩くと又周圍が變つて來る。物を追懸けて歩きさへすれば際限のない程ぐるぐる回る。さうして家へ歸ると何も殘らない。漫然と云ふと弊があるかも知れないが、凡てに滿足して政治、社會、あらゆる方面に根本的な不平もなく、又は研究の競爭から血眼になる懸念もなく、或は痛烈な悲喜哀樂の爲に驅られて、厭でも應でも一筋道に引張られる憂もなく、もしくは眞率直下に人生の機微に接する神經もなく、落付いた頭で眼前の萬事を商量する知欲もなく、——是等がないとすれば、いくら夜會帽に氣を揉んで舞踏の相手に心痛したつて、まあ漫然暮らしてゐる樣なものである。一面から云へばアヂソンやスチールは夫相應の心配も苦勞も色々な經驗も有つたらうけれども、浮氣な調子のなかに得意に浮かれてゐた所から云へば、漫然生活と云つても差支ない。だから彼等の書いたものも矢張り漫然としてゐる。漫然とはボンヤリと云ふ意味ではない。全く反對である。よく氣が付く。氣が付いてぐる〳〵回り過ぎる。『スペクテータ

ー』『タトラー』『ガーヂアン』など何百號かを讀み盡くして、あとで何が殘るかと考へて見れば分る。勸工場を通り過ごした樣なものである。よく云へば輕い感じがする。綺麗な心持がする。氣が利いてゐる。寄木細工の香箱見た樣である。惡く云へば、どれも是も土足で踏み壞しても構はないもの計りである。

都會生活と云つても中々複雜である。さう一概に言はれないのは無論の事で、現に私も諸君も都會生活を送つてゐる。然し私や諸君の全生活のうちから、個人に特有な生活を除いて、一般に共通な都會的生活を考へて見ると、思つたよりものべつなものである。百萬の人が寄つて市を構成してゐると云ふ意味は、此百萬人が或機關の下に調和して共同生活を營んでゐると解釋してよろしい。ある機關の下に束縛的な調和を保つ計りではない。個人と個人が接觸する場合に必ず一種の調和術が必要である。所が交際の範圍やら往來の區域が田舍と違つて大分廣いから、あつちへ調和する爲にこゝの角を磨り減らし、こつちへ調和する爲にそこの角を磨り減らし、段々磨り減らして行くうちに、角が全く無くなつて、丸藥の樣な轉がるに便利なものが出來上る。此丸藥を稱して、其都會に共通の常識と云ふのである。一度び常識の薫陶を受けて、常識以上の修養をする機會がないと、現在の凡てが、永久に正當なものであるかの如き考になる。此社會が正當の社會で、此道德が正當の道德で、此政體が正當の政體で、萬事が正當であるから根本的に滿足である。異を立てる必要もなし、奇を衒ふ了見も起らず、行住坐臥尋常の世界にあつて滿足である。

元祿、天明の江戸は將にこれであつた。アヂソン、スチールの生れた倫敦は將にこれであつた。

彼等は斯う考へてゐた。――世界の歷史あつてより以來、尤も開化した世に生れたものは自分等である。開化した世のうちで、尤も開化したものは自分等である。ゴシックと名の付いた野蠻時代の事物は固より論ずるに足らぬ。文藝復興と稱する波瀾も左迄に感心したものではない。希臘羅馬の古に溯つては、文物制度の蔚然たる偉觀を望み得ないとも限らないが、要するに異教徒の仕事である。此開明、此宗教、此政體、此自由と寬容と、此合理的に物を觀、事を察するの明とは英國人に限つてゐる。英國人のうちでも下等社會や田舍ものは相手にならん、自分等丈に限つてゐる。

彼等は斯う云ふ了見で筆を執り始めた。固より世間を教育する積りでゐた。應じないものは冷笑する氣でゐた。然し眞面目にはやらない氣でゐた。眞面目は野暮で、喧嘩は野蠻であると思つてゐた。熱烈痛刻は未開時代の人民の性情で、enlightened と云ふ言葉と矛盾する樣に考へてゐた。都會の流行を書けば文學者の能事は畢るものと信じてゐた。日常の禮義作法に批評を下せば天晴な道德家だと心得てゐた。市井の瑣事を論ずれば文學者だと合點してゐた。彼等のあとに、バーンスが出た。クーパーが出た。ブレークが出た。オシアンの譯が出た。バーシーの古謠集が出た。彼等は是等の詩人と詩集とを天地間に存在し得るものとは夢にも想像し得なかつたらう。アヂソンの衒學者（ペダント）を論じた條（『スペクテーター』第百五號）に斯うある。

"The worst kind of pedants among learned men, are such as are naturally endued with a very small share of common sense, and have read a great number of books without taste or distinction. The truth of it is, learning, like travelling, and all other methods of improvement, as it finishes good sense, so it makes a silly man ten thousand times more insufferable, by supplying variety of matter to his impertinence, and giving him an opportunity of abounding in absurdities."

（學問をする男のうちで、最も性質（たち）の惡い衒學者（ペダント）は、天分常識の缺乏した上に、相當の好惡も分別もなく無暗に澤山書物を讀んだ輩である。學問は旅行其他の教育法と同じく才智を研くと同時に、馬鹿を千層倍も厄介にする。馬鹿が生意氣になる材料が殖えて、猶々物笑ひの種を增す機會を得るとなつたら堪らない。）

尤もである。然し此批評の尤もか、尤もでないかは、アヂソンの見たる常識の性質如何によつて決せらるべき問題である。アヂソンの住んでゐた社會に共通な常識やアヂソン自身の頭にある常識を標準として考へれば、アヂソンの攻擊してゐる方が却つてアヂソンを笑つて然る可きかも知れない。是非は暫らく措くも、アヂソンの常識に重きを置いた事は慥かである。

常識は日毎の俗事以外に問題も作らねば、思索も及ぼさない。常識以上の詩、常識以上の興は眞僞、美醜、善惡、壯劣の各方面に渉つて嘗つて接觸する事がない。アヂソンは『スペクテータ

ー』七號に於て、俗人の迷信を嘲弄して居る。ある時彼が正餐の招待を受けて去る所へ行つて見ると、主人夫婦が殊の外の御幣擔ぎであつた。彼等の談話が如何にも愚劣なので、

"I dispatched my dinner as soon as I could, with my usual taciturnity; when, to my utter confusion, the lady seeing me quitting my knife and fork, and laying them across one another upon my plate, desired me that I would humour her so far as to take them out of that figure, and place them side by side. What the absurdity was which I had committed I did not know, but I suppose there was some traditionary superstition in it; and therefore, in obedience to the lady of the house, I disposed of my knife and fork in two parallel lines, which is the figure I shall always lay them in for the future, though I do not know any reason for it."

（自分は例の通り默つて、出來る丈早く飯を食つて仕舞つた。所が驚ろいた事には、細君が自分の肉叉と肉刀を置く所を見て、――自分は二つを食ひ違に置いたのだが――御願だから食ひ違はよして、並べて下さいと云つた。自分はどんなぶまな事をしたのだか一向氣が付かなかつたが、何しろなにか傳來の迷信がある事と思つて、細君の云ふが儘に、肉刀と肉叉を二行に並べ直した。細君の言葉に從へば、是から注意して何時でもかう置かなければ不可ないさうだが、其譯は分らない。）

と書いてゐる。書き方が全く客觀的で自己の批評を加へて居ないから事實其物の敍述に一種の滑

稽趣味を感じて讀んで行くと、あとからこんな句が出て來た。

"Upon my return home, I fell into a profound contemplation on the evils that attend these superstitious follies of mankind."

（家に歸つて、人間の迷信的愚昧に伴ふ弊害を考へて深き冥想に沈んだ。）

中學生徒だつて、こんな冥想に沈むものは一人もない。冥想の低價も亦甚しい。讀んで此句に至ると、最前の敍述は此冥想の下拵えで、敍述其物の面白味に滑稽の興味を感じて居たのではないといふ結論になる。文藝のたしなみがないのみならず、常識をはづれた冥想家だとも思はれる。成程箸の竝べ方で「深き冥想に沈む」のは常識をはづれてゐるには相違ないが、よく考へると是がアヂソンの常識である。常識であればこそ、箸の揃へ方に心配する。箸の揃え方以上に「深き冥想に沈む」べき何物をも持つて居らん所が常識なのである。アヂソンがもしかゝる低級の常識を有つて居なかつたならば、――たゞ迷信的の細君を敍述して一種の可笑味を與へる丈に留めて置いたならば、讀者は其可笑味の裏面に、此冥想より遙かに大なる教訓を感得し得たらう。

百十號に「スペクテーター」君がサー・ロジャーの下屋敷の近邊にある廢寺に、幽靈が出ると云ふ噂を聞いて探檢に出懸る所がある。是も事實其儘を平敍して置けば、其調子一つで、幽靈が出た樣にも取れ、又幽靈などが有る譯のものでないと云ふ考にもなれるのだが、さうやつてはアヂソンの常識に反するから決して遣らない。常識の目的は幽靈不可有論を說明しなければ已まない。尤も最初の一節には夜陰荒涼の敍景が少しある。さうして、かゝる寂寞たる所だから愚人の變怪を認むるも亦宜なるかなと云ふ口調で結んでゐる。愚人には恐縮する。さも〳〵賢人らしい。しかも賢人になれば、どんな暗闇でも、墓原でも、決して氣味の惡いものぢやないと云はぬ許りの挨拶である。何だか小學校の倫理の先生然としてゐる。其上ロックの哲學を引用して、幽靈の有無は明暗に關係なきものだと大いに辯解してゐる。御苦勞の至である。少し後へくると斯う云ふ句がある。

"As I was walking in this solitude, ... I observed a cow grazing not far from me, which an imagination that is apt to *startle* might easily have construed into a black horse without an head: and I dare say the poor footman lost his wits upon some such trivial occasion."

（淋しい所を歩いてゐると、少し向ふに牝牛が草を食つてゐた。氣の短かい臆病者には首のない黑馬に見えかねる。先達ての仲間は何でもこんなものを見て腰を拔かしたに違ない。）

立派な落ちである。ロックを拔きにして、此落ち丈書いて置いたらどんなものだらう。常識を振り廻すより、いくら效目があるか知れやしない。

こんな譯だから大した詩興もない、えらい熱情もない、雄俊博大の氣象は固より乏しい。けれども當時市井の風俗に至つては一から十迄悉く網羅して、どこかに出てゐる。珈琲店の討論や、サー・ロジャーの芝居見物や、モーホック共の亂暴や、（註、モーホックと云ふのは良家の不良子

弟で夜になると隊を結んで狼籍を働いたものである。婦人を酒樽へ入れて轉がしたり、番太の鼻をひしやがしたり、惡戯ばかりしてゐた。）其亂暴にそなへる爲めに、ロジャーの從僕が棍棒を携えて護衛をする事や、貧乏な家具屋が無暗に外國通信を聞きたがる事や、下っては男子の服裝の事や、女子が退屈して一日を暮しかねる事や、婦人の帽子の馬鹿に大きい事や、――何でもある。純然たる一部の風俗志である。さう云ふ例を擧げだせば、此等の雜誌の各號を悉く擧げなければならないから略して仕舞ふ。

風俗志であると同時に一種の性格描寫（character sketches）にもなる。普通の小說では、筋が發展するに從つて、篇中人物の性格が自然にあらはれて來るのだが、是は其人の特長や性癖を二三枚のうちに收めて、面目を活動させる。アヂソンやスチールが普通の小說を書かないで、かう云ふ短かい描寫に滿足してゐた理由は一寸分らないが、彼等より以前にあつて、眼前の誰彼をモデルに捕へて、筋の込み入つた社會小說の樣なものを書いた人がないので、始めからフィールヂング的な長篇に手を下しかねた事が一つ。夫から彼等の從事した仕事が多くは日刊物で、半ば新聞の體を具へた娛樂的機關であるから、豫じめ話の筋を立てゝ、これを續きものに書き足して行く事が困難であるのが二つ。で短かい性格描寫となつたのだらう。其中で比較的長くつて、且つ尤も有名な性格はサー・ロジャー・ド・カヴーレーである。これはアヂソンとスチールの兩人が共同して書いたもので、丁度甲乙二人が寄つて、連句をした樣な體になる。ロジャーの出るのは

『スペクテーター』の第二號からで、此二號はスチールの筆である。

"He is a gentleman that is very singular in his behaviour, but his singularities proceed from his good sense, and are contradictions to the manners of the world, only as he thinks the world is in the wrong. However, this humour creates him no enemies, for he does nothing with sourness or obstinacy; and his being unconfined to modes and forms, makes him but the readier and more capable to please and oblige all who know him."

（隨分な奇人である。然し其奇人たる所は彼の分別から出て來る。世間が間違つてゐるから世間の習俗に反するのださうだ。奇人には相違ないが別に敵も出來ない。苦い顏をしたり、强情を張る樣な性質ではない。彼の禮法に拘泥しない所が、却つて彼の朋友の氣に入り易い。）

スチールが初めに、かう書いた以上は、アヂソンもかう云ふ人物にロジャーを書き上げて行かなければならない。夫が旨く出來てゐる。二人で拵えたとは思はれない位渾然としてゐる。加之アヂソンは此人物に對して非常な同情を有つて居た。ある號にスチールが、此人物が酒屋に女を引張り込んだ所を書いたのでアヂソンから散々怒られたさうだ。ロジャーの性格はよく出來てゐる。閑があつたら參考に御覽になるが好い。

（は）常識の結果として、彼等は中庸を愛して、過度を嫌つた。法外を惡んだ。extravagance は彼等にとつて禁物である。當時婦人の帽子の無暗に高かつた事は前に述べた通りである。アヂソ

ンはすぐ之を攻撃した。『スペクテーター』の九十八號にある。

"There is not so variable a thing in nature as a lady's head-dress: within my own memory I have known it rise and fall above thirty degrees. About ten years ago it shot up to a very great height, insomuch that the female part of our species were much taller than the men. The women were of such an enormous stature, that "we appeared as grasshoppers before them": at present the whole sex is in a manner dwarfed and shrunk into a race of beauties that seems almost another species."

（婦人の帽子程變り易いものはない。自分の知る限りでも三十度位上つたり下つたりした。十年前であつたか急に飛び上つた事がある。其時は女の方が男よりもずつと脊が高かつた。我が女の前へ出ると丸でバッタの様な感があつた。現今では又ずつと萎縮して殆んど別種屬と見える美人團が出來た。）

帽子抔に馬鹿氣た意匠を凝らして、徒らに人を驚かしたつて、何の役にも立たないと云ふ注意があつて、仕舞に例の說教がある。

"I would desire the fair sex to consider how impossible it is for them to add any thing that can be ornamental to what is already the masterpiece of nature. The head has the most beautiful appearance, as well as the highest station, in a human figure ..... in short she (nature) seems to have designed the head as the cupola to the most glorious of her works; and when we load it with such a pile of supernumerary ornaments, we destroy the symmetry of the human figure, and foolishly contrive to call off the eye from great and real beauties, to childish gewgaws, ribbands, and bone-lace."

（婦人自身が既に自然の大傑作であるのに、裝飾の御蔭で、其上にどうしやうの、斯うしやうと云ふのは全然不可能である。婦人方は是非此點を御一考願ひたい。頭は人間の最高部に位する所で、又尤も美くしい部分である。……手短かに云ふと、自然は其尤も光榮ある作物の頂冠として頭を据ゑたのである。其上に入らざる裝飾を積み疊ねて、整つた形を崩したり、小供らしい玩具をぴらつかせて、わざ〳〵本來の美を目に付かない様にするのは愚かである。）

常識の說法は大概此位なものである。別段面白い事もないが、過度を忌むと云ふ例にはなる。もう一つ例を擧げる。

一としきり婦人の男裝が流行つた事がある。是も常識から見れば突飛である。『スペクテーター』の百四號にスチールが之を攻撃した。

"There is so large a portion of natural agreeableness among the fair sex of our island, that they seem betrayed into these romantic habits without having the same occasion for them with their inventors: all that needs to be desired of them is, that they would *be themselves*, that

is, what nature designed them; and to see their mistake when they depart from this, let them look upon a man who affects the softness and effeminacy of a woman, to learn how their sex must appear to us, when approaching to the resemblance of a man."

（わが島國の女性には、天性男子の氣に入る樣なのが多いと見えて、男子同樣の必要もないのに、男裝をしてくれるものが大分ある。自分はたゞ、女は女らしくして貰ひたいと一言するのみである。自然が拵えて呉れた儘であつて欲しいと云ふより外に何も言はない。かうしないのは間違である。男の癖に厭に優しくしたり、ひなひなしたりするのを見たら、男の服裝をした女が、我々の眼にどう映ずるか、女にも大概悟れるだらう。）

是も常識の助言である。今で云へばまあ新聞の雜報に序ながら書く程度の助言である。例をもう一つ擧げる。今度は決闘の弊害である。

常識は人並の事をしろと敎へるものである。わるく云へば奇拔な事をしてはならない、平凡に暮して行けばよいと敎へるものである。此立場から云へば喧嘩さへ不都合である。命の遣り取りに至つては猶更不都合である。理智の世である。情熱の世ではない。劍を拔いたり、血を流したりするのは野蠻至極である。ことに「光明ある革命」の後を承けて、是からこの黄金時代の太平を謳歌しやうと考へてゐる上流の先覺者から見れば、殺伐な斬り合は蒙昧の餘弊に過ぎない。彼等は嘗て其君主をさへ殺す程血に渴いてゐた。然しそれは過去の夢である。立憲政體の基礎が確と定つて、年來の理想であつた自由が現實された今日は、たゞ樂天的に暮すべき時代である。安寧無事に過すべき日月を眼前に控えながら死ぬの生きるのとは物騷千萬である。成程 wit の眼から見たら決闘は不條理、不合理極つた精神錯亂の所爲に違ない。this chimerical groundless humour である。this unchristian-like and bloody custom である。スチールは『タトラー』の紙上に號を重ねて此陋習を攻擊してゐる。

一寸當時の決闘に立ち戻つて御話をするが、決闘に satisfaction と云ふ言葉がある。スチールには第一此字が氣に食はなかつた。まづ此所に正直な田舍の紳士があるとする。それが所謂當世流の men of honour と何かの緣故で一座になる。さうして侮辱される。侮辱した方は、故意に侮辱を加へた事を自覺してゐる。その一人が翌朝になつて、侮辱された當人へ手紙を付ける。其文句にはいつ何時でも御滿足の行く樣に取り計ひますとある。(ready to give him satisfaction.) 手紙をつけられた田舍紳士こそ難有い仕合である。

昨夜（ゆふべ）は散々な目に逢ふ。今日（けふ）は決闘をしろと云ふ。要するに御滿足を與へると云ふ意味は殺されて仕舞へと云ふ意味と同じ事になる。かゝる場合につける果し狀は大抵極り文句を竝べたものだが、其内容を明らさまに書けば、こんな不合理極まる書翰になる。――スチールは滑稽的に其手紙を作つて、之を公けにした。

"Sir,—Your extraordinary behaviour last night, and the liberty you were pleased to take

with me, makes me this morning give you this, to tell you, because you are an ill-bred puppy, I will meet you in Hyde-park an hour hence; and because you want both breeding and humanity, I desire you would come with a pistol in your hand, on horseback, and endeavour to shoot me through the head, to teach you more manners. If you fail of doing me this pleasure, I shall say, you are a rascal, on every post in town: and so, sir, if you will not injure me more, I shall never forgive what you have done already. Pray, sir, do not fail of getting every thing ready; and you will infinitely oblige, sir, your most obedient humble servant, etc."

（昨夜の君の行爲は法外千萬である。余に向つて狼籍を加へたるものと認める。よつて此書を送る。君は禮義を知らぬ犬だ。今より一時間後ハイド・パークで出合はう。君は無教育な人道を辨へない男だから、短銃を持つて、馬に乘つて、余の頭を打ち拔く積りで來るがいゝ。さうしたら少しは禮儀を覺えるだらう。もし余の申し込に應じないと、向後君は兇漢である。倫敦中の柱へ悉く貼り付けてやる。此上にも余に向つて無禮を加へ樣ものなら、過去の事も決して許してやらない。早く御支度を祈る。さうすれば千萬辱ない。君の順良謙虛なる從僕より。）

君は教育もなく人道をも辨へないから決鬪を申し込むんだと云ふ。決鬪を申し込んで人を傷ける意志の明かな自分は、教育があり、人道をも辨へた氣でゐる。君が決鬪の申込に應じて、僕を殺すか傷けるかしなければ決して許さないなどと云ふのは大した滑稽である。

こんな話もある。ある咖啡店へ、若い男が鞭を上衣の釦へ結びつけて、赤い踵の靴を穿いて來た。それを smart fellow だと評したら、其男がすぐ決鬪を申し込んだ。smart fellow でないと云つたら決鬪を申し込む意味も分るが、是は又異常である。そこで『タトラー』の主筆は、世人は何故かう云ふ馬鹿氣た事で、決鬪騷ぎをやるのだらうと、一般公衆から答辯を求めた。讀者の一人からの返事にかうあつた。（無論スチール自身の書いたものである。）

"It is to avoid being sneered at for his singularity, and from a desire to appear more agreeable to his mistress, that a wise, experienced, and polite man, complies with the dress commonly received; and is prevailed upon to violate his reason and principles, in hazarding his life and estate by a tilt, as well as suffering his pleasures to be constrained and soured by the constant apprehension of a quarrel."

（分別のある、經驗のある、禮義を心得た人が流俗の服裝を着け、《註、不自然な鬘などを被る事を指す》又自己の理性も主義も顧みずして、妄りに生命財產を危くするのみならず、居住爭鬪の念に妨げられて、彼等の娛樂を縱まにする事の出來んのは、全く他から變つた樣に思はれたくないからである。又情婦の歡心を得んが爲である。）

スチールが『タトラー』の二十五、二十八、二十九の三號に亙つて、決鬪の惡習を攻擊したのは尤もな事で、かゝる薄弱の源因で、無暗に決鬪が流行しては堪るまい。然し自から決鬪の流行

する世の中の薫習を帶びながら、之を攻擊する眼識のあるのは矢張り常識の御蔭である。感情の熾な世には隨分不合理な事が流行しながらも時人擧つて、熱心に其存在を主張するものである。こんな事は中々云はない。

（二）私は常識から生じた特性を二三文學上の例に徵して、之を時代精神の反響として說明して見た。是から彼等の訓戒的傾向（moralising tendency）に移つて、少しく所見を述べ樣と思ふ。尤も十八世紀は一概に評すると訓戒的作物の世と云つても差支ない。自然派の一種とも見做されべきフイールヂングにさへ此傾向は著るしく見える。必ずしもアヂソンとスチールに限つた譯ではない。が此二人にあつて、は此傾向が述作の本位になつてゐるかの樣に思はれるので、世紀一般の傾向としてのみならず、とくに二人の特色として、諸君の注意を煩はしたいのである。

茲に訓戒の意義を明瞭にする必要が起る。凡て文藝上の作物は、其取材の天然たると、動物たると、人間たるとに論なく、又其目的の、眞を描くと、美を寫すと、善を述べると、壯を敍するとに關せず、又普通の場合の如く此等の二以上もしくは全體に亙つての作物たると否とを問はず、人世と沒交涉のものは一つもない筈である。絕體に人世と交涉のない事は頭のなかで想像する事さへ出來ない。從つて如何に愚劣な作物でも、人世を度外に置いてゐるものは決して存在しない。果して何等かの點に於て、人世と交涉があるとすると、其交涉のある點に於て、讀者を動かすのは當然である。（動かし方の强弱、大小、及び其影響する時間の長短は固より無限の差があると理論的に評してもよろしいが。）動かしたとすれば、動かした程度に於て、其人の未來を支配したものである。未來を支配したと云ふ意味は、向後の生活狀態に多少の變化を輸入すると云ふ事だから、たとひ其變化が處世の大問題に觸れないにしろ、一擧手一投足の微細な行動にしろ、日常平凡の瑣事を觀察する方法にしろ、悉く之を作物上から得た訓戒に得たと云はなければならない。此變化は自己の意志に從つた變化であつて、其變化の源は作物に接したから起つたと溯つて行けば、現在の自己をして、しかく現在にあらしむるものは作物の訓戒によると云はなければならない。人世のどの方面に輸入した變化に對しても訓戒の二字は使用する事が出來る。ある作物を讀んで、ある事を知つたとする。（今迄氣のつかなかつた人生上のある眞を知つたとする。）知つた事が娛樂であるかも知れない。然し此娛樂は其底に橫はる知識を擁し從へて其人の未來の運命を構成する一要素となるのが當然である。從つて此人は此作物から一種の訓戒を得たのである。又ある作物を讀んで美醜、善惡、壯劣、の諸方面に就いて感じたとする。此感じも娛樂であるかも知れない。然し此娛樂も亦其內部に美醜、善惡、壯劣それ〴〵の感じを含んで、矢張り其人の好惡、言動を支配する樣になるのは明かである。從つて此人はそれ等の作物から一種の訓戒を得た事に當る。

此意味に於ての訓戒は文藝上あらゆる作物の自然的結果であつて、何人も訓戒の二字に對して異議を申し立てる權利はないものと思ふ。然し今私が諸君の御注意を煩はしたいと云ふ訓戒的傾

向は、かう云ふ廣義に解釋した訓戒ではない。人生の一部分卽ち善惡丈に觸れた訓戒である。しかも十八世紀の常識に束縛された習俗的道德を標準とした訓戒である。しかも其訓戒は、娛樂の裏面に形を具へずに伏在する訓戒でなくつて、明からさまに訓戒的文字となつて現はれる、恰かも政府の公布する法律の條令の樣なものである。條令は懲罰を控えて、禁壓の意をほのめかすものである。自由意志を誘つて、有機的に人の未來の運命を改造するものではない。一言にして其弊を云へば、非藝術的である。アヂソンとスチール原の訓戒的方法は、前段に例證した彼等の口氣と態度とによつて明瞭であるが、その明からさまなる注告的の言說を附加する所が條令とよく似てゐる。異なる所は懲罰の項を省いた丈である。

方法の非藝術な所が卽ち私の尤も諸君に御注意したい點であるが、是は前に引いた例、たとへば、肉叉と肉刀の置き方が迷信的なので、家へ歸つて、深き冥想に沈んだとか、女は女らしく自家の服裝をしてゐる方が見好いとか云ふ文章で一斑は明かであるから、其點は此位にて置く事にする。それから彼等の標榜した道德は、日常の禮義原作法に關する瑣末な事で、それより以上に大なる問題を捕へてゐないと云ふ事も前段で略御了解になつたらうと思ふから重複を避けて前へ行く。

たゞ殘るものは、橫からも、縱からも、斜めにも見られる廣い世界を、たゞ道德の二字で貫いて、何でもかんでも道德的に眺めてゐる彼等の平面的眼界、直線的視線である。私は彼等が咖啡

店の有樣から、女子の帽子、肉刀肉叉の置き方に至る迄、あらゆる日常の瑣事を書き連ねたのを非難する了見は少しもない。私の樣なものは此瑣事の顚末を讀んで頗る興味を感ずる一人である。たゞ何故彼等が凡てを綜ぶるに道德の二字を以てして、萬事を善惡の標準で律しやうとしたかを疑ふのである。彼等の訓戒を聞く度に、彼等の世界觀はこれ程狹かつたのかと驚ろく位である。もしさうでないと、彼等の存在して居た社會は如何にも狹くて窮屈なものであつたと云ふ氣になる。

無論人生の半は行爲から成り立つてゐる。その行爲の半ばは道德的意義を帶びたものが多い。また研究して見ると存外妙な所に此意義を認める事が出來る。筆を執り文を草するものは、暗に此意義を認めながら、無意識に或物を叙述原してゐる場合が多い。たとへば茲に一人の男があつたとして、其男が他の贈物を拒絕したと云ふ事實を傳へるとする。其時あるものは「彼は傲然として斥けた」とかくかも知れない。又あるものは「彼は毅然として斥けた」とかくかも知れない。隨意には相違ないが、此數種の敍方のうちには、どれも是も善惡の評價の意味が含まれてゐる。卽ち讀者の方で厭な奴だとか、面白い男だとか、其人を好惡し易い樣な敍方である。言葉を換えて云ふと、讀者の好惡を幾分か支配した樣な書方であつて、さうして其好惡は、拒絕した本人の人格上、ことに人の贈りものを拒絕するといふ一事件に就て起るのだから、其裏面に道德的な匂

ひを帶びてゐるのは無論である。して見ると普通我々が信じて、純然たる客觀的敍述と見做して居るものゝなかでも、道德上の分子はある形式を以て入り込んで來る。存外區域の廣いものになる。

けれども人生の全體が是で掩ひ盡せるものではない。是等は人生と云ふ一枚の布を織り上げた中で、絣にも比較すべきものである。萬遍なく入り込んで來るには相違ないが、夫丈で人生の模樣は成り立たない。

然しかう云ふ風に、人生の總體に亙つて織り込まれてゐる點にも比すべき、道德上の意義は、どんな事を書いても、――肉刀肉叉の置き方を書いても、もつと烈敷云へば、天然の光景を書いても――切り離す事が出來ないかも知れない。その意味からしてアヂソンとスチールが倫理的傾向を有してゐると評した所で別に批評にも知識にも何にもならない。アヂソン、スチールに限つた事ではない。古今東西に亙つて人事に筆を着けたものは一人として此倫理的傾向を免かれない。私の所謂彼等の倫理的傾向と云ふのはある一事一件を全體と觀て、其全體に向つて倫理的批評を加へなければ已まない傾向を云ふのである。かうなると世界が急に狹くなる、一本調子になる。例へば芝居の光景を描くとする。舞臺の模樣、觀客の態度、役者の所作、それ丈でまあ充分だらうと思ふ。所がアヂソンになると此光景の凡てを括つて道德的に觀察し、判斷しなくては氣が濟まない。道義の批評が最後の斷案であるかの如くに考へてゐる。だから結末に至つて、あゝ役者が忘けては困るとか、觀客が殺風景で嘆ずべき事だとか、道具の粗末なのは座主の責任だとか、――何でも物々しく注意する。其物々しさから見れば彼は此訓戒を役者と、觀客と、座主に與ふるの目的と約束を以て、場に臨み、其訓戒に必要なるが爲に、わざと場内の光景を敍した事となる。私の平面的眼界、直線的視覺と云ふのは、これを申すのである。此點に關する例はくだ〳〵しくなる許だから省略する。

アヂソンは批評家としてミルトンを賞め出したと云ふので有名である。又『チエヴイ・チエーズ』の古謠を稱揚したので評判である。ミルトンはアヂソンが賞め出したのではない、デフオーが既に賞贊してゐる。ミルトンは何うでも好いとして、彼が野蠻時代と見做してゐる中世の ballad を紹介して世に出したのは一見矛盾の感がする。私は異に思つて、わざ〳〵調べて見た。アヂソンの『チエヴイ・チエーズ』を論じた文章は『スペクテーター』七十號と七十四號に出てゐる。七十四號の方は大した參考にはならないが、七十號の方には彼の傾向がよく出てゐる。其中に斯んな文句がある。

"The greatest modern critics have laid it down as a rule, that an heroic poem should be founded upon some important precept of morality, adapted to the constitution of the country in which the poet writes."

（現代に名ある批評家の規定せる一則によれば、ヒロイツク詩は建國の大旨に戻らざる重要

なる道德上の格言に基いて筆を起さゞるべからずとある。）

彼は之を說明してゐる。――ホーマーもヴージルも此目的を以て彼等の計畫を起した。希臘は小國の集合體で、曾て波斯から侵略せられたとき、その爲め非常な不便を感じた事がある。それでホーマーは彼等の安全に必要なる統一を確立せんが爲めに、數多の公子が敵を眼前に控えながら、互に軋轢して、遂に其乘ずる所となるあたりから筆を起した。『チエヴイ・チエーズ』の作者も亦中世のバロンが互に割據して、空しく爭鬪に日月を送つてゐた時に、生れたから此詩を作つたのである。

"The poet, to deter men from such unnatural contentions, describes a bloody battle and dreadful scene of death, occasioned by the mutual f uds which reigned in the families of an English and Scotch nobleman: that he designed this for the instruction of his poem, we may learn from his four last lines, in which, after the example of the modern tragedians, he draws from it a precept for the benefit of his readers.

'God save the King, and bless the land
In plenty, joy, and peace;
And grant henceforth that foul debate
'Twixt noblemen may cease.'"

（此著者が血腥さい戰爭や、恐ろしい光景を書いたのは、英吉利と蘇格蘭の兩貴族の間に起つた確執の爲めに、不自然な爭の長びくのを防ぐ爲である。此詩の訓戒がこゝに存する事は、最後の四行を讀みさへすれば分る。此四行は現代の悲劇に倣つて、作者が讀者の爲に教訓を垂れたものである。其四行には、

君に國に、豐かに、喜びに、平和に、幸を下し玉へ。
願くは向後に諸侯の爭ひを禁め玉へ。）

此評を讀んだらばアヂソンの文藝觀の一斑は容易く窺ひ知る事が出來るであらう。彼の考によると『チエヴイ・チエーズ』の作者の目的は全く當時諸侯の紛擾を憂ひて之を和解せしむる目的である。『チエヴイ・チエーズ』は有名なものだから諸君も定めて御覽になつたらう。あの詩を讀んでアヂソンの樣に解釋の出來るものはたんとあるまい。私などは却つて喧嘩がしたくなる。打ち合つたり斬り合つたりする事が愉快に思はれる。あんなものを讀んですら、アヂソンの眼には教訓的に映ずるのだから、彼の書いたものが、萬事に亙つて訓戒を條令的に附加するのは無理もない事である。

（訓戒的傾向とは關係がないが序でだから、當時の批評家の考を一寸紹介して置く。『チエヴイ・チエーズ』を評したアヂソンの言葉のうちにも I must only caution the reader not to let the simplicity of the style, which one may well pardon in so old a poet, prejudice him against the

greatness of the thought. ——《文體の單純なるが爲め、大いなる內容を閑却しない樣に讀者の注意を煩はしたい。文體の單純なのは昔の詩人だから仕方がない》。——『チエヴイ・チエーズ』は英詩のうちで尤も面白いものゝ一つと考へてゐるが、其面白いのは、私の見る所では、全く其文體の單純な爲である。私ばかりではない、諸君も御同感だらうと思ふ。此點に於てアヂソンの云ふ所は全く我々の批評と相容れない樣に思はれる。實際容れないのである。當時の詩人は手の入つたもの、磨きを掛けたもの、きちりと緊つたものでなければ丸で詩とは認めなかつた。だから十八世紀の終りになる迄 Ballad（バラッド） 文學の價値を認めるものは一人もなかつたのである。アヂソンは十八世紀に生れた人だから無論單純といふ事には興味をもつてゐなかつた。此點は大分現代の人と違ふ樣であるが、さすがにアヂソン丈あつて、群小批評家より一頭地を拔いてゐたと見えて、『チエヴイ・チエーズ』の自然に訴へる力を認めて、思ひ切つて之を世間に紹介したのである。之を紹介する丈でも大變に勇氣の入る事である。所が當時の批評家中にジョン・デニスなるものがゐて、大いにアヂソンを罵倒した。其言に。——There is a way of deviating from nature, by bombast or tumour, which soars above nature, and enlarges images beyond their real bulk; by affectation, which forsakes nature in quest of something unsuitable; and by imbecility, which degrades nature by faintness and diminution, by obscuring its appearances, and weakening its effects. In "Chevy Chase" there is not much of either bombast or affectation; but there is chill and lifeless imbecility. The story cannot possibly be told in a manner that shall make less impression on the mind. ——《誇大に失して自然を離れる事がある。誇大とは自然以上に飛躍するものである。凡ての物象を本來の大いさ以上に擴げて仕舞ふ。人巧に失して自然を離れる事もある。是は自然を棄てゝ、却つて適切ならざる他のものへ走りたがる。最後に無氣無力の爲に自然を失する場合がある。自然は之が爲めに明瞭を欠き又萎縮して仕舞ふ。自然の形狀は朦朧と化し、自然の感じは薄弱に陷る。『チエヴイ・チエーズ』には誇大もない、人巧もない。然し冷え盡した命根のない無氣力なるものがある。是より印象の薄い書き方は、どう書いても出來るものではない。》——『チエヴイ・チエーズ』は御承知の通り尤も豪壯な、尤も活潑な、尤も氣魄に充ちたバラッドである。之を批評するのに惡口もあらうに、無氣無力だと云ふに至つては、殆んど解し難い。人間の趣味が時代によつて、斯う迄も變らうとは思ひも寄らぬ事である。然し無氣無力はデニスに取つては疑ひもなき眞理なのだらう。歷史を調べると時々かう云ふ人物に出合つて驚ろく事がある。驚ろかれる位の人間だから、今日は白骨となつて、誰一人デニスの名さへ知らないのかも知れない。序でだから一寸御吹聽申して置く。）

（三）常識に富んだ都會人種の趣味はヒューモアとなつて現はるゝよりも寧ろキットとなつて現はれる。フオルスタツフの樣な狼籍に近い行爲や、ドンキホテの如き非凡な言動は彼等の眼から見れば宛然狂人の沙汰である。到底彼等の鑑賞に價しない。元來ヒューモアとはどんなものか

と云ふ議論になると、問題が大分込み入つて來て、六づかしい研究を經なければ御話も出來かねるかも知れないが、其特色の尤も著るしい點を擧げると、ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味であるといふ事になりはせぬかと思ふ。外の言葉で云ふと、ヒューモアのある人の行爲は、他から見ると可笑しいが、當人自身では他から可笑しがられる譯がないと思つてゐる。彼は眞面目である。無意識に可笑味を演じつゝある。もう一つ言ひ直すと、可笑味が當人の天性、持つて生れた木地から出る。從つて取つて付けた樣に見えない。行雲流水の如く自然である。之に反してもし人を笑はせると云ふ結果を豫期して可笑味を演ずるならば、其人は如何に巧妙に道化ても、道化を自覺しつゝ遣つてゐる。意識して、尋常にはづれた行爲言語を弄するならば、其行爲言動は故意である。卽ち不自然である。假り物である。內から湧いたのではない、外から引つ付けたのである。私の解釋によると是がキツトである。勿論から區別をしたからと云つて、二つのものが截然明瞭に二つになつて、作物の上にも實際の上にも現はる〔る〕ものではない。極端はかう分るが其中間に橫はるものは悉く雜種である。それは御承知を願つて置く。さてから解釋して見るとヒューモアを有してゐる人は、人間として何處か常識を欠いてゐなければならない。常識を欠かないで、尋常一般の行動をしてゐたならば、いつ迄立つてもヒューモアの出て來る譯がない。（火事地震の樣な非常事件が外界に起るときは、特別である。かう云ふ時は普通の人でも尋常一般の行動をやる事が出來ない。だから事件が濟んだ後から當時の狀態を思ひ出すと、笑はずにゐられない場合が多い。猛烈な一時の刺激でみんながヒューモラスに成つたのである。）從つて極めて常識に重さを置いてゐる十八世紀の紳士、アヂソン、スチールの如きものゝ描き出すヒューモアは、フオルスタツフやドンキホテの如き狂人に近い劇しいものでなくて、常識を去る遠からざるヒューモアである。又彼等自身が演じたるヒューモアありとすれば、それはヒューモアと云はんよりも寧ろキツトであらうと思ふ。

彼〔等〕兩人の合作になると傳へられたサー・ロジヤーの如き性格を見ても分る。ロジヤーは奇癖に富んだ人である。然し其奇癖は、根本的に常識を具へた人の上皮もしくは一局部が、少し宛常人と異なる所から出る奇癖に過ぎないのである。從つてロジヤーの言動を見ると、讀者は微笑する。然し決してげら〳〵笑はない。作者も其積りで書きこなして居る。腹を抱へて笑ふ抔は、彼等から見れば、山出し、田舍漢の類である。

『タトラー』の百五十五號にアヂソンが去る家具師の性格を敍してゐる。固より椅子、寢臺の類を商ふ男だから、政治政論には緣の遠い方に違ひない。然し其緣の遠い政治政論に熱中して無暗に狂奔するとなると、そこに一種の矛盾が起つて、可笑味が出る。アヂソンは正に此可笑味を捕へたのである。

"Upon his coming up to me, I was going to enquire into his present circumstances; but was prevented by his asking me, with a whisper, 'Whether the last letters brought any accounts that

one might rely upon from Bender?' I told him, 'None that I heard of;' and asked him, 'whether he had yet married his eldest daughter?' He told me, 'no. But pray,' says he, 'tell me sincerely, what are your thoughts of the king of Sweden?' For though his wife and children were starving, I found his chief concern at present was for this great monarch. I told him, 'that I looked upon him as one of the first heroes of the age.' 'But pray,' says he, 'do you think there is any truth in the story of his wound?' And finding me surprised at the question, 'Nay,' says he, 'I only propose it to you.' I answered, 'that I thought there was no reason to doubt of it.' 'But why in the heel,' says he, 'more than in any other part of the body?' 'Because,' said I, 'the bullet chanced to light there.'"

（段々近づいて來たから、此頃の暮し向は、どんな模樣か聞いてやらうと思つてゐると、向ふから小聲で話しかけた。「ベンダーから信用すべき通信が來たでせうか。」私は知らないと云つて「御前の娘はもう片付いたか」と聞いて見た。「まだです。時にスキーデンの國王はどうでせう。あなたの御考は、本當の所を聞かして下さいな。」女房も小供も食ふや食はずの有樣だのに、まだスキーデンの國王の事を考へてゐる。私は「偉い人さね」と答へた。「創を受けたつて云ひますが本當でせうか。」私が驚ろいた顏をしてゐると「いえ、たゞ御聞き申す丈なんです」と云つた。「そりや間違はなからうぢやないか」と答へたら、すぐ「然し何故踵へ創をしたんでせう。他部でもよささうなもんぢやありませんか」と聞いた。私は「銃丸が丁度其所へ中つたからさ」と答へた。）

此家具師は多少常識を失してゐる。然しながら彼の言動は只讀者をして微笑せしむるに留まる丈である。アヂソンは是より以上のヒューモアを好まなかつたのである。

アヂソンは『スペクテーター』の三十五號にヒューモアの何物なるかを論じてゐる。

"It is not an imagination that teems with monsters, an head that is filled with extravagant conceptions, which is capable of furnishing the world with diversions of this nature; and yet if we look into the productions of several writers, who set up for men of humour, what wild irregular fancies, what unnatural distortions of thought, do we meet with? If they speak nonsense, they believe they are talking humour; and when they have drawn together a scheme of absurd, inconsistent ideas, they are not able to read it over to themselves without laughing."

（ヒューモアとは怪物を以て充滿した想像を云ふのではない。漫に法外の思想を蓄へて一世を喜ばしむるに足る頭腦を云ふのではない。普通ヒューモアの人と號する文士の作物を讀めば、放縱なる空想と、旋毛の曲つた不自然に充ちて居る丈である。無意味な事を云ひさへすればヒューモアだと思つてゐる。不合理にして矛盾極まる觀念を連結して、自分さへ笑はずには讀めないものを書けばヒューモアだと信じてゐる。）

ヒューモアに關するアヂソンの議論を取つて、さきの家具師の例と引き較べて見ると、彼の考がよく分る。彼は家具師以上のヒューモアを決して許す氣はなかつたのである。ヒューモアに於て過度法外を忌んだ如く、彼はキットに於ても中庸說を持つてゐたらしい。從つてラベレイもしくはシエクスピアもしくはスターンの如き、突飛な、執拗な、奇拔な、理を離れた、常識を飛び越した、種類のキットは彼の好まざるのみか、解し得ざる所であつたらしい。キットに關する彼の考は矢張り彼の口から聞くのが一番慥かである。彼は『スペクテーター』の五十八號より六十三號に亙つて僞りのキットを攻擊してゐる。其說は今から見ても決して下らないものではない。僞りのキットの第一には古昔（希臘）の詩人が、自分の詩を、卵の形や、翼の形や、又は斧の形に似せて書き綴つた例を擧げてゐる。是はキットかも知れないが、私の見る所では文學上の價値はないものとしか思はれない。僞りのキットの第二にはリポグラマチスト卽ち字落しを擧げてゐる。此字落しと云ふのはイロハのうちのある字を使ひつゝなしで詩を作る。一種の遊戲である。成程是も才がなければ出來かねるかも知れないが、文學の內容には關係のない事だから論ずるには當らぬ事である。第三の僞りのキットは中世紀に起つた換綴（アナグラム）ださうである。是はイロハ中の五文字とか十文字とかを撰んで色々に竝べ換え、置き換えて其都度新らしい字形に組み上げる。是も文學ぢやない慰みだから我々には用はない。第四の僞りのキットとして、アヂソンはパン（地口）を擧げてゐる。是は日本で俗に云ふ駄洒落の事である。沙翁にも大分ある。アヂソンはわざわざ沙翁抔も此弊を受けてゐると斷つてゐる。此節に彼は甚だ尤もな事を述べた。

"Having pursued the history of a pun, from its original to its downfall, I shall here define it to be a conceit arising from the use of two words that agree in the sound, but differ in the sense. The only way therefore to try a piece of wit, is to translate it into a different language: if it bears the test, you may pronounce it true; but if it vanishes in the experiment, you may conclude it to have been a pun."—No. 61.

（パンの歷史の興廢を敍したから、余は茲にパンの定義を下さうと思ふ。パンとは發音が同じくつて、意義の違つた二つの言葉を用ひて生ずる一種の氣轉である。キットを試驗する唯一の方法は、之を他國の言語に翻譯するにある。翻譯しても通用すれば眞のキットである。もし翻譯と共に消えて仕舞へばパンである。）

パンは固より文學的に價値の多いものではない。其價値は字音の類似の通用する範圍內に限られてゐる、從つて之を外國語に譯す事は到底出來ない。譯せば消えて仕舞ふ許である。外國語に譯せないと云ふ事は、つまり其價値の普遍的でないといふ意味と一般である。アヂソンの說く所は至當である。然し普遍的であると云ふ事は、あながち文學的に最上といふ事にはならない。普遍とはたゞ誰が讀んでも興味がある丈で、興味の廣狹を示す言葉ではあるが、其深淺を定める言葉ではない。從つて單に翻譯が出來る出來ないで、萬事の試驗を了する譯には行かない。嚴密に

云へば文學的に尤も價値のある部分でも翻譯しがたい所はいくらでもある。バンに限つた事ではない。アヂソンの說は此所迄及んでゐないから不完全なものには相違ない。其積で御聞を願ひたい。

次に彼は眞のキットを說明してゐる。彼の意見によると、眞のキットは字音に關係なく、多くの場合に於て、觀念の類似調和から出る。又眞僞の混交したものもある。彼は之を雜のキットと名づけてゐる。彼は雜のキットの例にカウレーを擧げた。情熱は火に似てゐる。昔から此類似觀念の連想を利用して愛を喩へて火と云ひ燄と呼ぶのが御定まりである。此表裏二面の意味をもぢつて、詩人が種々樣々のキットを弄した中に、カウレーのは大分手數がかゝつてゐる。

第一には、女の眼が愛の熱情の源である。同時に眼そのものは甚だつれない。冷やかな樣子をする。だから之を喩へると、氷から出來た燃えるが如き硝子 (burning-glasses made of ice) である。けれども女の爲なら、何んな苦痛も厭はない。此意味を、熱帶でも住めると云ふ句であらはしてゐる。次に、此女にレモンの汁で書いた手紙を送つたら、女はこれを火に翳して讀んだと云ふ所から引掛けて、どうぞもう一度愛の燄に翳して讀んで貰ひたいと云つてゐる。次に女が泣けば、內心の熱から蒸溜した涙であれかしと願ふ。夫から女の居ない時は八十度以上になる。三十度も極に近づいて來る。彼の冒險性の愛は向上の燄である。幸福なる愛は天上の火である。不幸なる愛は地獄の火である。寐られぬ時の愛は烟の出ぬ火である。人の意見に從はぬ愛は風に煽られて愈熾なる火である。酒を呑んで戀を忘れ樣とするのは、火に油を注ぐ樣なものである。彼の心はエトナの火で、ヴルカンの代りにキューピッドの鍛冶場を有してゐる。——どこ迄行つても際限がないから此位にして已める。但しアヂソンは之を評して「雜のキットである。……類似が言葉にあるか觀念にあるかの楷級によつて眞に近づいたり、僞に近づいたりする」と云つてゐる。

是でアヂソンのキットに關する意見が大分明瞭になつた。私の考へてゐるキットの意味はいざ知らず、彼は二個の類似觀念を綜合する才を稱してキットと呼んでゐるのである。此點に關しては、去年の講義中に卑見を述べて置いたから、再び之を繰り返す必要はあるまい。然しアヂソン自身のキットは果してどの位の程度なものであらうか。少し研究して見たい。『スペクテーター』の百九十八號に女を Salamander (普通山椒魚と譯すが、こゝにあるのは傳說的のサラマンダーである。架空の動物である。) に比較した所がある。

"There is a species of women, whom I shall distinguish by the name of salamanders. Now a salamander is a kind of heroine in chastity, that treads upon fire, and lives in the midst of flames without being hurt. A salamander knows no distinction of sex in those she converses with, grows familiar with a stranger at first sight, and is not so narrow-spirited as to observe whether the person she talks to be in breeches or petticoats."

(世の中には一種の婦人連がある。余は此婦人連に敢てサラマンダーの名稱を呈したい。サ

ラマンダーと云ふのは、火の上を渡つたり、篋のなかに住んでゐて、怪我をした例しのない程に節操堅固の女豪を云ふのである。サラマンダーは相手が男だらうが女だらうが御構ひなしに話をする。一見直ちに舊知の如く親しくなる。先方が袴を着けてゐやうが、簪をさして様が、そんな事に頓着する様な局量の狹い女ではない。)

サラマンダーは蜥蜴の様な恰好をして、火を食つて生きてゐるといふ怪物だが、此怪物を以つて、御轉婆に喩へた所がアヂソンのキットである。甚しい御轉婆になると、男性の訪問者を寢室へ案内したり、月夜に男の手をとつて、一所に散歩したり、隨分危ない事をやる。サラマンダーが火渡りを遣るやうなものである。夫を見兼ねて、亭主や親爺が意見でもすると、清淨なる自由を妨害すると云つて大不平を鳴らす。つまり何處へ行つて、何んな誘惑に逢つても平氣な女(無論冷評的に云ふ)だから、恰もサラマンダーが火の中に晏如として生活してゐるのと能く似てゐる。此似たものを二つ引き付けたのがアヂソンのキットである。

頗る面白い。思ひも寄らぬサラマンダーを引張り出した所が奇拔であるのみならず、比喩が中中適切に行つてゐる。誰でも微笑する様な御手際である。日本で云ふと蛙の面に水といふのと同程度で、それ程陳腐に聞えないから刺激が多い。此位なものは、彼等の書いた何を見ても至る所にある。中には是よりも旨いと思はれるのもある。

然しアヂソンの解釋する様なキットの意義に束縛されずに、もつと廣い一般のキット——それを説明して見ろと云はれると一寸困るかも知れないが、まあ私と諸君がぼんやりながら一致してゐるキット——此方の御手際はどの位なものであらう。調べて見ると、是が彼等の尤も得意な所である。彼等の文章のうちには、痛切な悲哀や、深刻な苦惱や、又は幽玄縹緲の趣や、壯烈勇壯の感じや、非凡超群のヒューモアはないが、謂ふ所のキットは何所にでも充滿してゐる。例を擧げれば際限もない。今迄擧げたものを見ても其一斑は既に分つてゐる。

『スペクテーター』の百二號にある「扇運動」と云ふのを其うちの輕妙な一として紹介して置かう。

女の扇は男の刀と同じく大切な道具である。だから男が擊劍を稽古する様に女も扇の使ひ方を練習する必要がある。そこで學校を立てゝ扇子使用法の教授をやる。持て(handle your fans)とか、擴げ(unfurl your fans)とか云ふ號令を掛けると、生徒が其通りに扇を持つたり擴げたりする。

"There is an infinite variety of motions to be made use of in the *flutter of a fan*. There is the angry flutter, the modest flutter, the timorous flutter, the confused flutter, the merry flutter, and the amorous flutter. Not to be tedious, there is scarce any emotion in the mind which does not produce a suitable agitation in the fan; insomuch, that if I only see the fan of a disciplined lady, I know very well whether she laughs, frowns, or blushes."

(煽ぎ方は千差萬別に使ひ分けが出來る。むつとした煽ぎ方がある。内氣な煽ぎ方がある。

おづ〳〵した煽ぎ方がある。落ち付かないのも、快豁なのも色氣の多いのもある。一と口に云つて仕舞うと、どんな心行きでも扇の使ひ方で、それと悟らせる事が出來る。自分抔は心得のある婦人の扇さへ見れば、はゝあ、笑つてるな、八の字を寄せてゐるな、顏を赧かくしたな抔と、すぐ鑑定がつく位である。）

是は無論遠廻しの諷刺である。女供が扇を道具に色々な藝をするのを、それとなく戒めたものに極つてゐる。學校を立てゝ扇の使用法を教授する迄に、女の小刀細工が發達したと云ふ主意で、之をあからさまに罵倒する代りに、裏面から面白可笑しく敍述した所にキットがあるのであらう。前に云つた通り輕妙ではある。又彼等の尤も得意とする所である。けれども左程の手柄ではない。一概に云へば下らない。如何にも女性的で、こせ〳〵してゐる。それはキットの性質でなくつて、題目の科だから仕方がないと云へば、それでも宜しい。題目は別として、たゞキット其物の性質から論じて見ても、成程と首肯かれる迄の事である。常識を離れないから馬鹿氣た所がない。馬鹿氣た所は彼等の尤も嫌ふ所で、どこか馬鹿氣た所がないと、ある面白味は乏しくなる。尤も馬鹿氣た感じの薄い所にデリケートな所がある。それが都會的な所以である。彼等の通人粹客たる所以である。通人粹客とはデリケートの必要なき瑣事に迄、手段をかけてデリケートたがるものである。

アヂソンとスチールの人格と作物。今迄は兩人を一樣に十八世紀の思潮に感染したものと見做して、其作物對時代といふ問題を眼中に置いて解剖的に進んで來た。然し作物は時代の反射であると同時に、人格の表現である。だから今度は後の方から少し研究して見たい。アヂソンとスチールは昔から竝び稱せられてゐる。離すべからざるものとなつてゐる。夫程に此二人は實際文藝の兩生活に於て密接な關係があつたのである。兩人は大學當時からの朋友で、其交際は彼等の生涯を通じて渝らなかつた。アヂソンが死んで六ヶ月目に、スチールは、二人生前の交情の親密なる有樣を『シアター』十二號に寄せた。其言によると彼と、アヂソンとは非常に關係が深かつた。長い間かつて一度も二人の間に行違ひがあつた事がない。たゞ同じ事を二人でやるときに相方行き方の違があつた丈である。一人は差控えてゐる。さうして潮流を食ひ留める。一人は我無しやらに其中へ飛び込んで仕舞ふ。それで少時らくの間は双方とも避け合ふ樣にしてゐたが、それでも相互の幸福は絶えず心配し合つてゐた。だから又逢ふ樣になると遠慮も何もない。丸で小供の樣であつた。其時一生の大事を談じたけれども、相方共に相手を說き伏せてやらう抔と云ふ考は丸でなかつた。又やつたつて出來るものではない。彼等の間に生じた意見の相違とはどんな事であつたか、又どの位の價値のある事であるか一向分らない。スチールはたゞ、自分の虛榮心を傷けた爲め、家族には不都合であつたかも知れないが、國家には幸であつたと、意味あり氣な事を洩してゐる。

斯の如く親密な友誼を結んでゐた二人は、性質の點に行くと大分違つて居た。アヂソンは感情

の鋭敏な男で、他人の前へ出ると滅多に口も聞[原]かない。冷やかで何となく構へてゐる樣に思はれる。スチールは卒直一方の性で、腹藏のない、親切な所はあるが時々無茶をやる。或る時金に困つて千圓程アヂソンから用立つて貰つた事がある。所がかう云ふ男の常として、到底期限内には返せない。するとアヂソンはスチールを相手取つて法廷に訴へた。詳しい事情は分らないが是丈聞いて見ると頗る妙な感じがする。ポープの詩名が隆々と世間に喧傳せられる樣になつた時、アヂソンは嫉妬の念に堪えないで、裏面から手を廻して、彼を傷けたといふ話さへある。ジョンソンの彼を評する言葉によると、かうである。

"This modesty was by no means inconsistent with a very high opinion of his own merit. He demanded to be the first name in modern wits; and, with Steele to echo him, used to depreciate Dryden, whom Pope and Congreve defended against them. There is no reason to doubt that he suffered too much pain from the prevalence of Pope's poetical reputation; nor is it without strong reason suspected, that by some disingenuous acts he endeavoured to obstruct it; Pope was not the only man whom he insidiously injured, though the only man of whom he could be afraid."

(大變謙遜に控えてゐる。然しいくら謙遜したつて、自分が一番偉いと思つてゐる事も出來る。此男は當世 wits の第一に數へられなくつちや承知しないのである。彼はスチールを味方にして、ドライデンをくさした。ポープとコングリーヴが賞めたからである。ポープの詩名が高いので煩悶したのも疑もない事實である。又陰險な手段に訴へて、其盛名を傷けやうとしたのも根據のある事の樣に思はれる。彼が不正な方法を用ひて傷けたのはポープばかりではない。尤も彼の恐れてゐたのはポープ丈であつたらう。)

アヂソンは又極めて注意深い男である。力めて敵を作る事を避けた男である。スキフト抔に對しても出來る丈骨を折つて調停策を講じた男である。スチールとは全然反對である。此の方は輕卒で、淡泊で、非常な勢[原]力家で、遊ぶ事も、いくらでも遊び、仕事をする事も、いくらでもする。友達の爲めに日常の計畫などを打ち壞されても、苦にする所ではない、寧ろ一所になつて愉快に遊んで仕舞ふと云つた風の性である。だから直情徑行、結果も成行も決して構はない。容貌から云つても鼻の短かい、顏の丈の詰つた滑稽漢である。

之を括つて見ると、アヂソンは落ち付き拂つた、手落のない人の樣に思はれる。スチールは亂暴で失敗が多くつて、それでゐて愛すべき資格を具へてゐる樣に見える。どつちが好きでも、どつちが上手でも構はないが、普通世間の評價は、いつでも眼前の實用丈で人物の高下をつけてゐる。あれは人物だと云ふから、どんな男かと思つて見ると、たゞ實際的實用向だと云ふのと同じ事である。用をさせるには都合が好いかも知れないが詩的に云ふと三文の面白味もない。人間は用ばかりして居られるものぢやないのだから、用以外の點に就ても少し人物を拵えて置いたら善

からうと思ふ。――夫れはほんの餘事である。此二人の性格が果して作物の上に出てゐるか、ゐないかを一應調べて、すぐ次の問題に移らうと思ふ。

『スペクテーター』の四百二十二號にスチールが「嘲弄」に關してかう云つた。

"To say a thing which perplexes the heart of him you speak to, or brings blushes into his face, is a degree of murder; and it is, I think, an unpardonable offence to shew a man you do not care, whether he is pleased or displeased."

（人を困らしたり、人を赤面させる樣な事を云ふのは、人殺しの輕いものである。たとひ先の人はどう思はうとも、厭な奴だからと云ふので、其人に對して、こんな所作をするのは許すべからざる罪惡である。……）

實際彼は此主義を實行したと云つてよろしい。彼が他の惡德や愚習を攻擊するときはアヂソンの遣口とは大分趣を異にしてゐる。アヂソンに比べると皮肉の度が餘程少ない。ミントーは其著『英國の散文』中に此兩者を比較して、スチールのヒューモアは眞卒な和氣に滿ちてゐるけれども、婉曲な細工になるとアヂソンに及ばないと評した後にかう論じてゐる。

"Steele was a kindly observer of human frailties. Against what he considered to be heartlessness and vice he was openly indignant: his natural tendency was to use the lash freely in hot blood—not to introduce galling points of satire with a smiling countenance. Minor faults, affectation, presumption, a dictatorial manner, and suchlike, he ridiculed with good humour, with a certain fellow-feeling for the objects of his ridicule."

（スチールは人間の弱點を親切に觀察する人である。彼の眼から見て、無情、惡德と思はれるものに對しては、彼は明かに公憤を洩すを憚からなかつた。彼の傾向は熱情に乘じて、容赦なく鞭を振ふにある。破顏微笑の下に針で刺す樣な遣口は取らない。其他の小過に至つては、氣取る事であらうが、生意氣な事であらうが、威張る事であらうが、此同情を以て、善意的に嘲笑した。）

ミントーは又アヂソンを評して斯う云つた。

"He is the great English example of polite ridicule …… Not a single paper of Addison's can be pointed out that does not contain some stroke of malice—'gay malevolence,' perhaps, but nevertheless malevolence. …… Still, in characterising his humour, the critic must not sink the fact that it is at basis malicious—it is 'humorous satire.' If we call it amiable humour, we must remember that it is a kind of humour that may be amiable to the reader or hearer, but is far from appearing amiable to the object."

（彼は恭しき嘲弄の好模範である。……凡そアヂソンの書いたもので、何處かに惡意を含んで居ないものは一枚もない。陽氣な惡意と云へば云へるかも知れないが、矢張り惡意はどこ迄